

誰が為の独白

しんり

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

彼女はただ、空気を読んでいた。

原作前にはじまり原作までいかずに終わる小話。

ほぼほぼ原作前の話。

※支部にもタイトルは違いますが同内容で投稿しています。

目次

逃げて逃げて	1
なんてことない日	8
遊びと思われたって	13
特別なんかじゃない	20
高身長許すまじ	26
笑みを返す人たち	32
同族嫌悪に近いのかも	38
期待	44
青春とは	51
テスト前の憂鬱	58
加古と化粧と東隊	64
ストーカー事件	70
暑い日とアイス	76
かける言葉は	81
揺れる心よ	87
お呼び出し	95
似てるようで似てないコウハイ	101
変わったのかも	107
普段とちよつと違う日	113
焼肉は美味しい	120
相棒と言うと怒られるけど	127
こわくない人	133
燻る感情はまだ解けない	139
意外と可愛いかもしれない	144

これを師弟と呼ぶと拗ねられたとか嘘

151

遠征後の軽口

158

水と油とガス抜き

163

適當の重要性

169

逃げて逃げて

昔からわたしは誰かの顔色空を見ていた。親の事も、友達の事も、生たちも、周りの人たちもずっと。

怒っている時はピリピリしてて、嬉しい時はふわふわしてて、悲しい時はじめつとしてる。子供だからこそ感じ取れた事かもしれない。でも、わたしは大きくなってからもそういう顔色、というよりは空気を読んで行動していた。嫌な空気を避けてより明るい方に。しかし明るすぎない程度に保つ。明るすぎては逆に嫌な空気が湧くこともあるとわかっていたから。

付き合う子は自然と周りからしたら派手な子たち。その方が嫌な空気をコントロールできるって、小学生の頃いじめを行う子と戯れたら知った事だ。その子達が嫌な空気にするなら、こう言ったらどうなるのかどうするのかって。そういうのも見ていたから。

だから、ああ、なんというか。

その日も、わたしは——あたしは、街全体に蔓延する嫌な感じに焦燥を抱いていた。

後に第一次近界民侵攻と呼ばれることになったその日。中学三年生だったあたしは親が出かけていないからという理由で友人の家に泊まりに来ていた。

あたしの親は家にはいない。父親は出張中だし、母親は仕事。その友人とは親がちよつとアレなのを理由に仲良くなったから、まあきつとそういう事だろう。

二人して明日は学校サボってみる？ とか。どこそこの学校の人がかっこよかったとか。あのクラスの誰それが付き合っているとか。わたしとしては少々下らない、しかし友人にしては面白い話をしたりしなかったり。

ただなんとなく肌に纏わりつく嫌な空気に寝れないあたしを氣遣ったのかもしれない。だけど、今にして思えばきつと全てが全て間違いはなかった、はずだ。わたしの行動は、予感。

「！ 親の通帳とかそういう、大事なもの持って！」

「え、色……急になに言っ——」

微かに揺れた空気に、爆発するみたいに充満する嫌な空気に、リュツク^鞆を掴んで友人に言ったその直後。

地震のような轟音が、震動が響く。

「早く！ 服とかそういうのはいいから、っ！ これは——」

地震じゃない何かが破裂するような音が、振動が、恐ろしい程のひりついた空気が、広がっていく。どこまでも、どこまでも。街を包むように、空まで覆っていくように。

それは、唐突な出来事だったのだ。

「悲鳴？ 外から……？」

「待つて。今、外を見ちゃ駄目だと思う。静かに下りて、靴履くよ」

「え……？ え、う、うん……？」

遠く聞こえる夜を裂く悲鳴が、轟音が外から聞こえてくる中で、わたしはそうして友人を急かし。しかし慎重に、この空気から逃れるべく頭を働かせた。

わかる事は、少ない。ただ今すぐ外に出てはならない予感と、大事なものだけは持つておくべきだという直感だけで行動を判断する。

自分のリュツク^鞆に菓子パンと水入のペットボトルを入れて友人を待つ間、耳を研ぎ澄ませて音の方向だとか断続的に響く地鳴りの感覚を確認。まだここからは遠いけれど、きつとすぐに近づいてくるといふ確信に近い焦燥。

「色、とりあえずこれでいい？ つか、何なのこの地震。アンタ無駄に落ち着いてるから乗せられてるけど、こうゆー時ってアレじゃない？

ホラ、えつと頭？ 頭守っておくんじゃね？」

「さあ。あたしにもわかんないけど、なーんか変じゃん？ だからたぶん、ふつーの地震じゃないんじゃねー？」

友人の怯えを隠すような軽口に合わせて同じように返しつつ、カーテンの隙間から外を窺う。

嫌な感じが強い方面に視線を滑らせれば、ぼんやりと白い何かが見えた気がした。あれが元凶なのだろうか。「何か見える？」と近づき

かけた友人の手を掴んで玄関に向かった。

——嫌な空気が、驚く程近かったから。

「は？ な、なに、な、えっ？」

「逃げるよ。でも悲鳴、上げると気づかれるかもだから、気をつけて」
何か破壊される音が壁越しに聞こえた。何か、さっきの白い大きなやつがきたのだろうか。

震える友人に声をかけつつ、玄関の扉を少しだけ開く。そこから音の方向だとか空気の流れ、みたいなのを確認してなんとなくここだ！
というタイミングで友人の手を引きながら町中へと飛び出していく。

行くあてなんて、ない。ただ漠然と逃げなければならぬ焦燥がわたしを突き動かす。今までで一度もなかったそれは、きつと危機感だとか第六感だとか、そういうものだったのだろうか。

「はっ、はっ、はっ……！」

友人とあたし。どちらのものかもわからない荒い息を吐き出しながら、破壊音や悲鳴の鳴り響く街をひたすらに駆けていく。はやく、遠くに。その一心で。

時折見えた白い怪物の目の前にはいかないよう友人とまだ壊れていない塀の内側だとか、崩れた壁のかけに隠れながら進む。

何が起きてどうなっているのかなんて何一つわからない。わかるのはただあの怪物たちに見つかったら、巻き込まれたら死んでしまうという事実だけ。最初は隠れる度に「何が」「どうして」と呟いていた友人もその事は気づいているのか次第に何も言わなくなった。

ただ、繋いだままの手だけが、確かにまだ生きている事だけを互いに知らしめる。

なんで必死になってるんだろ、わたし。

そんな事を考えてしまいがちながら崩壊していく街を、進んで行く。走る力がなくなっても、重い足を引きずって、どこまでも。どこまでも。誰か助けが来る、その時まで。

「」

視界が、いつの間にか暗転していた。

寝ていたのか。気絶していたのか。ハッと起き上がって辺りを確認すると建物は倒れていて、隣には友人が寝転がるように倒れていて、なんだろう。本当に寝てた？

でも、と考えるために頭に手を当て、おろした手に付着したそれに呻く。

「血……」

止まりかけているのか、乾いてはいる。傷は、ここか。こめかみの上くらいに傷が出来ていた。

友人、は。……同じく頭に傷ができているが、自分と同じくらい傷だろう。瓦礫が辺りに散らばっているから、これが怪我の原因か。

ズズ、ズズン――

「っ、あ……」

ぶわつと広がる嫌な空気に、小さく息を飲む。友人はまだ目が覚めない。だが、ここまできて見捨てるのは今後のためにも、小さな自分のためにも駄目だろう。

あたし、そーいうキャラなわけじゃないんだけど。心の内でそんな自分の顔を浮かべながら、友人の脇に腕を差し込んでどうにかこうにか体を起こして漫画とかでよく見る感じに肩に腕を回す。……うん。だめだこれ。

友人よりも低い身長のため諦め、どうにかこうにか背中に乗せて、ノロノロと歩き出す。走るには、到底力が足りない。それに、疲れ切っていた。

他人の悲鳴もずっとずっと聞こえていたから、それも疲れの一因だろう。でも、わたしに他人が救えるはずもない。友人を抱えているから、ではない。友人さえ、自分のついでというもので。だがそれでも、見知らぬ他人なら兎も角、友人を置いて逃げてしまえば気分が悪い。見捨てられれば、逃げられるかもしれないけど。

そんな考えが表面に浮かび上がって来るくらいには、もう、駄目だった。限界だった。

「はあっ……はあっ……は……っ」

自分を包み込んでいく嫌な空気が、更に濃くなっていく。首を絞めるみたいに、全身に重しをつけられるみたいに、纏わりつく泥みたように。これが、死なのだろうか。恐れなのだろうか。

ああ、ああ、嫌だ。泣きたくないのに、怖くて、恐くて、涙が出てくる。人間は恐ろしい時にも涙を流すものなのか。

ズシイン——

「ツ……!!」

影が、頭上に射した。

今まで見つからなかった事が、きつと奇跡なんだろう。

白くて大きな怪物。その口の中でぎよろりと眼のようなものが左右に動き、ゆっくりとわたしを見下ろす。

なんだ、コイツ。なんだ、コレ。何、何で？ わたし、これで死ぬの？

わたし悪い事……はまあ多少はしてきたけどさ。でも、死ぬほどの事なんてしてない。付き合ってる友人たちはまあ根は悪いわけじゃないけど、確かに素行が悪かったりするけどさ。でも、それだけじゃない。それだけの、はずなのに。

どうして。どうして。どうして！ どうし、て……！！

「ひ……っ！」

ぐわりと広がった怪物の口に、強く目を閉じる。

もう、駄目だと思った。死ぬのだと思った。

でも。どうしてか。

「無事か、君たち」

その向こうから聞こえてきた爽やかな風みたいな空気に、自然と目を開いた。

——ぐらりと揺れて倒れた怪物の山から飛び降りた影が、空気が、嫌な空気を解いていく。切り裂いたように。揺らめく朝靄のように。

その人は、輝くような空気を放ちながら、わたしの顔と友人の様子を確認して少しだけ頬を緩めた。

「生きて、いるんだな。よかった……もう大丈夫だ。私達はこいつ等を倒すためにここに来た」

「たお、す……う？」

「ああ。……君は、もう少しだけ頑張れるか？」

「……………はい」

言葉の意図はつかめない。疲れているからかもしれない。あんな怪物があつちこつちにいるのに、本当に倒せるのかという疑問はあつたけれど。でも、この人ならきつと、出来るのだろう。

たち、つて事は、きつと仲間がいる。一体何が起きて、この人は、その人たちはなんなのかは分からない。けど。

「よし。この近辺の音が止んだら、小学校の方面に行くといい」

そこで救助を呼んでいるからと力強い言葉をかけてきたから。だから、こくりと頷く。

そうして恐る恐る、尋ねた。

「おにーさんは、いったい……」

驚いた空気の後には、その人は名乗る。

——境界防衛機関『ボーダー』と。

わたしは運命なんて信じない。でもその出会いはきつと、わたしを、それ以外のものたちを変えていく。

今この時に何もわかつていなくなつて、それは否応なく現実を塗り替えていく。怪物——近界民ネイバーと彼らを中心とした戦いが、唐突なものではなくやがて日常に近いものへとなつていくように。

人類の歴史というのはそうやって変わつていくのだろうか？ 戦争とも呼べるそれによつて。

そうしてわたしたちも、変わつていくのだろうか。適応とも、同調とも、抵抗とも言える自分たちの心に従つて、武器を取ることにより。だけどそれでも、運命なんて呼んでやらない。信じてやらない。

今も、未来も、その先も。そんな陳腐な言葉にわたしの生を預けたくないから。

だからこれは、この話は。わたしが——雪原 色が周囲の空気に流されながら、それでも確かに自分を見つめる。それだけだ。それだけの、話になる。

つまらない人間の話でもよかつたら、まあ気楽に付き合つてよ。そ

う長くはならないだろうし。あたしもたまには、本音つてもんを吐き出してみたいしき。

なーんてね。ホントもウソも、自分ではわからないくせに生意気だよね、あたしって。

でもま、人間誰しもそんなもんでしょーよ。

なんてことない日

第一次近界民侵攻と後に呼ばれることになった事件から早半年と数ヶ月余り。あたしは高校生となって、友人たちと気軽なやり取りを交わしていた。

話題は様々なもので、学校でのしよーもない事だったり、メイクの事だったり、少々派手なところのあるあたしたちに目をつける先生の事だったり。それから……それから、近界防衛機関ボーダーの事だ。

「あのさ、色」

「ん〜?」

こそりとあの事件の時あたしと遊んでいた友人の耳打ちに読んでいた雑誌から顔を上げる。

「ウチらも、受けてみない? これ。ボーダーの募集」

嫌な空気ではない。どちらかと言えば、張り詰めたような強張った空気。おどけたように「ホラ、ウチらにも眠った才能が〜とか、ワンチャンあるかもじゃん?」と目をそらす彼女に、生返事を返しつつその手に持った紙を覗き込む。

第二回か三回目かの募集内容は前回と同じく、受かる人数を絞っているが今後も募集していくと書かれている。ふうん。

「じゃ、受けよか。青葉と一緒に楽しそうだし」

「あ……アハハ、嬉しい事言うなく色ってば! よし、気合入れてメイクしてこ!」

友人の言葉に笑みを返しつつ、もう一度今度は心中だけでふうんのため息のように呟く。

友人……青葉という彼女は、あの事件で両親を亡くしている。正確には亡骸は見つかっていないが。それでも、あの後小学校の敷地に辿り着いて保護を受けたわたしたちを待っていたのはそーいう現実だったというわけだ。もっとも、わたしの父は幸か不幸か存命ではあるけれど。それでも、彼女同様に母親は死んだ。

他の友人たちは無事だっただけに、わたしと彼女は同じ体験を共にした事で共感を抱いているのだろう。だからボーダーに入りたい、と

いうのもわたしにも理由の一端を担ってほしいというところか。いきょうのない気持ちで復讐なのかなんのかまではわからないが。

正直なところわたしはそこまでボーダーに興味があるわけではないが、あの人にお礼を言えるチャンスと考えれば悪い事ではないように思っていた。だから領いたわけで、気絶していた友人はそれを知ることはないが、まあなんだ。とりあえず、忘れがたい記憶ではあるし、命の恩人なわけだし、近界民^{ネイバー}という存在についてはどうあれ試すだけ試してみよう。

てか、その募集に応募して運良く会えたらいいやくらいの気持ちでいこ。あの人たち、わたしと友人だけじゃなくもつとたくさんの人間を助けたわけだから覚えているかもわからないし。

そうしてゆるーい覚悟で挑んだボーダー新隊員募集なのだが。いやはや人が多いこと。

隣の友人もビックリした様子で「見る限りふたクラス分はいそー」と呟いている。確かに。てかあたしらみたいになちよい派手な奴いなさすぎじゃね？ ウケる。めちやくちやあたしら浮いてるわ。

「では次……………ごほん。どうぞ」

筆記試験とかさせられ、次は基礎体力を調べるらしい。さっきの筆記の時もそうだったけど、試験監督する人があたしを見るなりギョツとした顔をする。別部屋の友人も恐らくそんな反応をされてる事だろう。何せガッツリメイクしてきてるわけだし。

中学の体育とかでやるような事をさせられ、薄っすら背中に汗が浮いている。正直気持ち悪い。着替えとか持つてきてないんだけどなーとか考えながらやってるとそのまますぐに面接を受けて終了だと言われた。

なんかよくわかんないけど、あつという間だったなー。これで受かってたら笑える。…………いや笑えないかも？

まあ残念ながら、というか流石にあの時の人はいなかったから、いつかお礼を機会があるといいなあその内忘れちゃうかもだけど。なんて思いつつ友人に連絡をとって、友人の面接が終わるまで近場のコンビニで時間を潰す。

汗ふきシートを買って首元の気持ち悪い汗を拭い、メイクを確認し直す。汗で落ちてたら見栄え悪いし。うん、でも大丈夫か。

「お待たせ〜」

「おつす。お疲れ〜」

やってきた友人に先程買った汗ふきシートを差し出して「ヤバかったね」「今度授業でも体力測定あるじゃん」「ふつーのバイトとかの面接もあんな感じなんかな」とかなんとか話しながら歩く。

友人は家族がいないからかいつもぶらぶらと歩き回って帰るため、親がいるようでないわたしはそれに付き合いつつ適当に買ったお菓子を摘まみながらあつちやこつちと視線を流した。

あれから、わたしの住んでいた街は、場所は、ボーダーの本部を中心に入るのは制限されている。かつて住んでいた家は壊れていなかったものの、警戒区域と張り出されたエリアとされた。

そのため、家を失った人向けに用意された仮設住宅にわたしと友人は住んでいるわけだ。が、まあわたしは父親が再婚してマンションを借りているところが居住区なのだが……現在はこの友人、青葉の住んでいる仮設住宅に転がり込んでいるのが現状なのである。

いやだって、継母って言うのかな、この場合。あの人、こないだ子供産んだんだぜ？ 明らかに母が存命中の妊娠だし、なんなら挨拶された時めちやくちやくわ〜い空気出してたし、一緒にいるとか無理でしょ。こわすぎ。あーあと産後の女性ってほら、なんか精神が安定してないらしいじゃん？ 産後鬱って言うのかな。とりあえず近寄らんといた方が互いのためってもんでしようよ。

まあ一応来月からやす〜いアパートを父親が借りてくれる予定なので、バイトを探さないとイケない。お金を出してくれる父親に家族なんだし利子つけちやわないでよ〜とは言ってるが、実際の将来はどうなる事やら。あんまり父親の生態には詳しくないから備えるだけは備えておくべきだろう。継母の方が何を言うのかもわからないし。

「うげ……マジい……？」

そんなこんなでボーダー隊員応募の件から数日。当然友人の住居ではなく父親のマンションに結果が届いたらしく帰宅したところ、合

格の二文字が書面に踊っていた。

継母は我関せずで赤ちゃんの世話を別室でしている中、父親は「入るのか？」とこちらを見ずに聞いてきた。この人実の娘に興味なき過ぎなのだが、一応父親らしい事言うんだな。なんて感動を覚えつつ、肯定の言葉を返す。この人たちのためとか、誰かのためとかじゃないのは確かだけど。せつかくならやるだけやってみるのもアリでしょ。

「サインしておく。……泊まっっていくのか？」

「え、うーん。パパがいいなら泊まってく。いい？」

「好きにしろ」

「ありがとー」と笑いながら、その空気を読み取ってトイレに向かうべく立ち上がる。父親から伝わるのはマジで無関心、な感じだ。なんと言うか、さつさと話を終わらせたい空気。ま、昔からこんなだから期待なんてできる部分もないけど。むしろボーダーの合格が届いて呼ばれた事が奇跡かも。

なーんて考えつつ継母な彼女に「今日は泊まってくね。手伝える事あったら手伝うよー？」と伝えてみる。一瞬苛立った空気を出したものの彼女はオトナらしく「いいよいいよ、色ちゃんも勉強とかしなくちゃでしょ？」なんて微笑んだ。あたしがこーいう派手なメイクとかしているのに対する嘲りを感じるが、普通の人ならよくある反応なので気にしない。

ま、出来る不良つてのがあたしのトレンドだから逆にそこそこ……あくまでそこそこの成績なのである。むしろ遊んでる割には出来がいい方でしょよ。

「じゃ、お言葉に甘えまーす。ご飯のお手伝いくらいはさせてね？」
「うん。ありがと、色ちゃん」

お互いに笑みを浮かべて見せつつ、異母弟に手を振って布団だけが置かれた部屋へと引き下がる。この部屋はいつか弟クンのものになるのだろう。とはいえそこまで大きくなる頃にはわたしも大人だ。

どんな事をしているのかななんて想像もつかないけど、まーそれなりにオトナな対応ができるようにはなっているだろう。今のわたし、まだまだ子供っぽいのは自覚してるし。……何せ身長が低いものだから

ら。いやギリ150はあるけど！ サバとか読んで……ないぞ。

そんなこんなでまー見た目は和やかに。空気はやや冷ややかに食事を堪能し、父たちの暮らすマンションでの一幕は終わりである。入隊のための書類の必要などころは記入してもらったから、後はわたしが書くところ書いてボーダーに送ったらいわけだ。

一応軽く給与態勢のどこを確認すると、どうやら最初は訓練生として扱うらしく訓練生の間は給料が出ないらしい。なるほど。で、昇給……訓練生じゃなくなったら仕事ぶりに合わせて給料が支払われる、と。なるほどなるほど。

えーじゃあお金貰えるようになるまでちょっと頑張らないといけないのか……。いや、まあ何もせずお金が貰えるってのも難しいんだろうし、頑張るしかないか。

最低限は父親からお金を貰っているとはいえ、いつかは返却すべきものだ。だから元々バイトはしようと思ってたし、うん。無理そうなら辞めればいいし。それ、自分が有利になるための努力は嫌いじゃないし、頑張れあたし。

友人の結果はどうだったんだろーなと考えつつ、少し埃っぽい布団に体を投げ出して、目を閉じる。あの子こそ、合格しているといいんだけど。

わたしみたいななーんの気持ちも抱いていない人間よりもずっと、目的を持ってしまった彼女の方が。きつと相応しい。

——けれど、結局のところ。そうはならなかった。

遊びと思われたって

友人、青葉はボーダーへは入れなかった。それが、全てだった。

お互いの結果を打ち明けてしまった以上、わたしは誤魔化す事も出来ずに「一緒にやりたかったね」と呟くしかなかった。それ以上最適な言葉は、あつただろうか。いや、きつとあつたはずだ。

でも、彼女を傷つける事にはなかつただろう。終わってしまつた物事を覆すのは、難しい事だから。

合わなかつたと辞めれば話は早い。だが、まだ入つてもいないし、というか郵送した後のためやっぱ入りませーんは少々よろしくないだろう。や、正直わからんけど。

……でも話を辞退したら辞退したで、現状だと友人の怒りを買うだけだ。それは、あまりよろしくない。人間関係拗らせたらめんどくさいって知ってるもん。別の学校にいった友人とか、なんかけつこーエグい恋愛してるらしいし。……いやいやこれはどうでもいい事か。

「色、今日からボーダーだっけ？ 頑張れ〜」

「ん。応援せんきゅー、青葉。青葉のために頑張ってみるよ」

「……アハハ、何その無駄にキリツした顔！ ウケる〜」

空元氣。その言葉が相応しい空気の青葉に苦笑を返しつつ、また家に行くことを伝えてボーダーへと向かう。移動距離短縮のために各所に作られたのだという通路のひとつに辿り着いたわたしは送られてきたトリガーとかいう手のひら大のをパネルに翳す。ドキドキしながら翳した瞬間、機械的な音声で『トリガー認証』と言われて扉が開いていく。「おおく」と謎に感動しつつ、先程の友人とのやり取りを心の奥にひとまずしまいこんで通路を進む。

ひどくSF感を感じるのだが、いやそもそも近界民^{ネイバー}って見た目がSFチックだったな。じゃあこの世界実はすごくSFなのか。……いやあたしあんまそーいうの詳しくないんだけどさ。

「うわギャルだ……」

「すごいメイク……」

「チビ……」

講堂？ みたいなどこに着いたところ数十人の中で、そんなヒソヒソ声が聞こえてきた。別にどう思われようが構わないが、チビというのはいただけない。いや……まあよく見れば年下なのかなって子もいるからあたしの事じゃないかも知れないけど。

でもめちやくちや気にしてるからチビという単語には反応してしまふ。小学生の時散々チビ言われてたしチビにチビって言われてムカついたのが一番の原因かな……。

とか考えながら髪をイジる。友人がいない時のわたしは基本的に嫌な空気が流れない限りは全てを無視するのである。だって変に関わるとめんどくさい。

「あ」
端の方でおえらいさん。上司、になるのかな？ が挨拶を始めたのを見上げてその近くににいる人に目を留める。

あの人だ。あの時居合わせたのは偶然かもだけど、助けてくれた人。わー明るいところで見るとかつこいー。大人のおにーさんだ。やっぱ同じ年以下年下よりも年上って……いいよね。いや別に恋愛とか正直言わなくてもどうでもいいんだけど。

そうしてその人を見つめる事数分。どうやらその人が忍田さんというのがわかった。忍田さんの入隊指導。オリエンテーションを受けられるらしい。

よく聞こえるいい声だ。真面目そうな空気だし、なによりあたしと目があっても試験の時の人だとか面接の時の人だとかと違って全然反応しないし。という事は見かけだけで特に厳しい判断をしない人のだろう。いや、もしかしたら使える人間ならそれでいい組織なのかもしれないけど。

手の甲に表示された1500という数字を見つつ、小さくふうんと鼻を鳴らす。基本が1000で、期待するところがあると点が少し増えた状態だと説明されるけど、この数字にどこまでの評価があるのか。そこそこ良かったとか、そーいうあれだろうか。

何にせよ、訓練でいい結果出せないと点数貰えないっていうなら頑張るしかない。4000までいくと正式な隊員になれるらしい

から、そこが目標地点か。

順番に戦闘訓練を開始するのを見ながら、息を吐く。最悪、なるようにしかならないのもまた人生ってやつなのかもしれないし、無駄に考えすぎない方がいいのかな？

「……………」

そうこうしている内に呼ばれ、訓練室に入ると出てきたのは丸い大きな怪物——近界民^{ネイバー}を模倣したデータの集積郡。あの時のような威圧もない。恐れも感じない空。だが、確かに敵らしく、薄っすらと嫌な感じがするから数歩下がり様子を窺う。

わたしの前にこの試験を受けた人たちは倒すことが出来ず制限時間が終わっていたり倒されてしまっていたけれど、さて。

攻撃されるタイミングで微かに空気が動く感じはある。それを避け続ければ傷つきはしない。

「つと……………」

攻撃は単調、なのだろう。突進に近い頭の振り下ろしからの飲み込み。足を叩きつける。眼からビーム。頭部への攻撃には首を振って振り払う、と。よしよし、実際にやってみると何となく掴める事もあるものだ。ものは試し、って昔から言うしね。

「ほつ…………、よ…………つとー！」

後は自分がどれだけ動けるか、ではあるけど。トリガーオンという言葉で変身？ 変身、した体だと多少跳ねたり飛んだりも出来るみたいだし、体はちよつと軽いし、ちよつとテンション上がる。だってこんなアクロバティックな動きなんてふつとできないじゃん？

それに、殺されかけたヤツを殺せるのって、こんな事でもないときない。とはいえコイツに、近界民^{ネイバー}に恨みとかはないが。

母親は死んだけど、それだけだもん。わたしは友人のように悲しんだり恨んだりなんてしてあげられない。薄情で親不孝者とは思うけど、でも本当に何も感じないのだ。そもそも目の前のコイツはデータだけ。

母が亡くなったのを伝えられた父が早々に再婚したあたり、父の薄情ぶりが遺伝したのかもね。ま、他人を愛そうとしてるあたりはわた

しよりマシなのかも知れないけど。……いや、どうだろ。子供ができてしまったから仕方なくなのかもしれない。というのは邪推かな。

『残り1分』

アナウンスの声に、流石にそろそろ仕掛けるべきかと判断してでかい背中にぴよいびよいと飛び乗って頭部目がけて走る。一瞬がくんと下に首がさがった後、振り払うように。あるいは打ち上げるように勢いよく頭部が上へと持ち上がった。

空気の抵抗？ みたいなのを避けるべくバネみたいに足を折って、頂点にくる直前に飛び上がり、片手に持っていた近距離武器。弧月という日本刀のような物をぎよろりとした眼へと振り下ろす。

『記録、4分15秒』

まーぼちぼちの記録なんじゃない？ わたしにしては。

呟きつつ弧月しまい、部屋を出る。顔を上げたあたしを見る人はいない。倒せたとはいっても時間かかってるし、そんなものなのだろう。別に注目されたいわけでもないし。動きは何となく把握したし、次はもうちよつと早く倒せるはずである。

その後も休憩を挟み、他の訓練を終えて本日は終わりとなった。中々ハードなスケジュールだ。一応ランク戦とかいうポイントを奪い合う模擬戦？ 個人戦？ とか出来るらしいけど、それよりも前にわたしはするべき事がある。それ即ち。

「忍田さん、ちよつとお時間いいですか？」
「ん？」

チャンスなのである。

ニコニコ笑顔を浮かべながら本日の案内をしてくれたその人へと近づき、声をかける。驚いた空気がしたがそれもすぐに止まり、「ああ、構わない」と鷹揚に頷かれた。うーん同じように頷く姿でも父親とはぜんっぜん違う。嫌味な感じがなくてカッコいい。

同じオトナでも、本当に色んな人がいるものだ。その中でも断トツで忍田さんカッコいい。これはきつとモテるタイプの人だ。

だから周りの奴らはこういう人を見習って、こつちをチラチラ見てくるな。話しかけもしてこないのに見てくるのは鬱陶しい。

「ずっとお礼をお伝えしたかったんです。……ありがとうございます
た」

けど、こういうお礼を伝える時は真面目にするべきだ。から、顔を
引き締めて頭を下げる。更に視線が集中した空気があるが、構うこと
などない。

そもそもわたしはこの人にお礼を伝える事が一番の目的だったの
だから。

「ああ、そうか。君はあの時の。……お友達も無事だったか？」

「！ はい。あの子は忍田さんの事覚えてないので、彼女の分までほ
んどありがとうございます」

覚えてたのかという驚きでパツと顔を上げて、優しい、安堵の宿る
表情にもう一度お礼を言う。友人は倒れる直前から怪我の手当を受
けるまでの記憶がない。だから……ここには来られなかった彼女の
分まで言おうと前もって決めていたのだ。

だってマジで、命の恩人ってやつだもん。何回言っても足りないよ
ね。

「ああ。……という事はまさか、礼を言うためにボーダーに？」

「え。あくそれもまあ、あります。忍田さんカツコよかったんで、
きよーみあつた感じですよ」

媚びたように言ってみると、おっと。白けた目が周囲から向けられ
たかな？ 僅かに視線を横に流し、しかしすぐに忍田さんに向け直し
てとりあえず笑ってみる。

「そ、そうか」

ちよつぴりたじろいだ忍田さんは、とりあえず会話を続けてくれる
空気をしている。もうちよつと時間が貰えるならなんか聞いてみる
かな。どうしよう。

けれど考えようとするのを遮るように、「雪原くん」と呼ばれた。
えっ忍田さんに名前呼ばれるのトキメク〜！ ヤバ〜、これは最早恋
じゃん恋。ハツコイってやつだわアハハ！

「先程の訓練で気になった点がある。遊ぶのはまあ、前回もいなかっ
た訳じゃないが、君は観察を重視していただろう。あそこまでじつ

り観察せずとももつと早く倒せたように思うが、どうだ?」

流石に強い人はよく見てるな。いやでもでも、あたしの力でここまでいけるのかわかんなかったし、えーどうだろ。

「そこまで遊んでたわけじゃないっすよ。でも次はそこそこ早めに出来る自信はなきにしもあらずっつて感じですよ」

「なるほど」

「それは楽しみだ」と小さく笑った忍田さんにキュンとしちゃう。いやはや、これはモテモテでしょ絶対。

でも期待されちゃったら頑張るしかないかな。散々頑張らないとな、とは思っていたけどあんまりやる気なかったのだ。それがスイッチ押しされちゃった。かもしれない。

「あ、忍田さんー!」

「頑張ります」と返してもう一回頭を下げたタイミングで、なんとも明るい声が響く。

振り返る忍田さんの向こうから、誰か知らない人がやってきた。帰るタイミングだったし、ちようどいい。

「じゃああたしはこれで失礼しまーす」

そう言っつて横を抜けようとしたところ、やってきた誰某さんが「おっ?」と片眉を上げた。

「お前、一年のギャルじゃねーか。なに、ボーダー入ったのか」

「は? あー、はい?」

絡んでくると思わず戸惑いながら首を傾げると、誰某さんは不思議そうな顔で周りを見た。一年の、と言うあたり同じ学校かつ年上なのだろう。

とはいえあまり先輩の情報を仕入れていないから、正直この人が誰なのかわからない。ボーダーに入った事を公言してる人だったら名前を聞けば思い出せるかもだけど。さして興味ない話題だったから曖昧だ。

「ふうん。……初訓練だったろ? 記録どうだった?」

「えー……と、恥ずかしながら4分ちよつとつすね」

何で聞いてくるんだろ。意味わかんない。

好奇心ともとれる空気に笑顔が引きつる。いやほんと、何なんだこの人。何でそこで忍田さんを振り返って。

「忍田さん的にはどうでした？」

「観察眼はあるようだし、しっかり訓練に励めば光る人材だろうな。

……それがなんだ、慶」

「いやあく」と笑って、誰某さんがガシリとわたしの頭を掴んだ。

……身長高いからってか。ムカつく。何ちっさいとか言ってるのさ。マジでムカつくんですけど。

「こいつに興味があるんで、良かったら一緒に鍛えてくれませんか？」

というかこの人えっ、眼怖くない？ めちゃくちゃ楽しそうな空気してる割になんでそんな眼怖いわけ意味分かんない。チグハグじゃない。

てか、何。何だ。鍛えてって……なにを？ まさか、あたしを？

まったくこの誰某さんの事がわからず、わたしは困惑と戸惑いを深めるのであった。

特別ななんかじゃない

誰某さん改め、太刀川慶と名乗ったその人はいつこ上のセンパイらしい。そーいえば聞き覚えがあるような、ないような。見たことは……どうだろ。特別な事がない限りあんまり人の顔覚えてられないからな。

太刀川センパイの言葉に忍田さんは少し考え、とりあえずセンパイと戦ってみてほしいということらしく、訓練室に再び入ることに。こちらのやり取りを見ていた他の訓練生たちはセンパイにしつしと追いつまわっている。

いやマジで何がどうしてそうなったの？

「っし、やるか！」

やるか、じゃないけど。流されてしまった手前声を上げられず、一先ず弧月を構える。

そうして、センパイが数歩近づいた。その瞬間。

ゾワツ

「!!」

嫌な感じがして、一步足を引く。

眼前を、光が過ぎっていった。

「ハハ！」

ギリリとした眼を、向けられても！ 怖いだけ！ だってーの！

「っ……………」

しかし反撃しようにも動けず、返す刀で下から振り抜かれた刃が胸を裂く。

これが訓練室じゃなかったら、たぶんトリオン体とやらが破壊されたところなのだろう。いや、ほんとマジでビビった。

たたらを踏んだものの、どうにか体勢を整えて太刀川センパイを見る。やる。

「やっぱな」

何がやっぱりなんだ。意味分かんない。

でもこのままやられっぱなしというのもムカつく。から、自分の勘

に従って避け……ようとしては斬られ、回復と同時に斬りかかるも斬られるというのを何回も繰り返す。

十回を越えてからは数えてないが、最初は反射で動いていたのが少しずつ目で追えるようになってきた。かもしれない。

「く……っ」

刃を受け止めた手が、押される。男女の力の差か、鏢迫り合いは拮抗する事なく弧月が弾き飛ばされた。

だが、それでも足は動く。振りかぶられた刀を、その横に倒れ込むように前転することで避けて距離を取る。

弧月はセンパイの後ろだ。さて、どう取りに行くべきだろうか。

「んー。ま、とりあえずこんなもんか？ ……ホラよ」

「え……えーつと、もう終わり？ つすか」

悩んでいたら構えを解いたセンパイがトリガーを拾い上げて手渡してきた。受け取って礼を言いつつ首を傾げると、彼は「そうだな」と肯定なのかわからない頷きを返して訓練室を出ていく。

追いかけるように一緒に出ると、忍田さんが考え込むように腕を組んで待っていた。やっぱカッコいい人だな。

「どうですか、忍田さん」

「ふむ。観察眼もあるが、粘り強く、冷静に対処しようとしていたのは褒めるべき点だ、雪原くん」

「はあ……ありがとうございます？」

褒められると少々たじろいでしまう。両親に褒められる事なんてなかったし、褒められるような事をした事もないから。だからなかなか、照れくさい。

どう反応していいかもわからず視線を外して、いつの間にやら部屋にいた他の人を見る。正隊員、なのだろう。

しかし誰も見覚えがないのですぐに視界から外す。あまり見ているとガンつけられたと勘違いする人も多い。経験からの話である。そうした面倒をボーダーでも作りたくないの、自衛は大事だ。

「雪原くん。君が良ければ慶に訓練をつける時に来るといい。一度に複数を教えられるほど私は器用ではないから、慶のついででも構わな

いのであれば、になるが」

「防衛任務が入ってない放課後と土日によつて来るから来いよ」

「え、ええ……？ いや、ありがたいつすけど、正直あたしより出来る人はいますよ？」

一言二言こそりと話をした二人が歓迎ムードを出すのが、待つてほしい。マジで何で、そうなるの。

強い人に教われるのってかなり運がいいとは思うけど、あたしである意味って何。あたしは、わたしは、期待されたって、結局――。

「そうだな。そうかもしれない。だが君の観察眼はもつと化ける可能性もある」

「私の勘だが」と言われては、言葉を飲み込んでしまうというものだ。人の勘は侮れないものだ、わたし自身はそう考えているからこそ。

他人の期待に応えた事のないあたしでも、今度はいいのだろうか。大丈夫、だろうか。期待外れだと思われないだろうか。

「サイドエフェクトでも持つてるかもしれないけど、それならそれで楽しそうだろ？」

「サイドエフェクト……、……？」

なにそれ。というか何でそんな断定的な言い方するんだこの人。グイグイくるし、眼は怖いし、この人苦手かもしれない。今まで寄ってきた男子と全然違いすぎる……いや空気は若干似てるか。

それは兎も角として、少々理解してない反応をしたからか、忍田さんがサイドエフェクトについて説明してくれた。

人間が持つて生まれるトリオンは、トリオン器官という見えない臓器から生み出されているそう。なるほど。正直資料を斜め読みしてたからちゃんと理解したのはこれがはじめだ。

そのトリオンというのは筋肉とかと同じく多少なりと鍛えて増やすことができるが、元々の保有量に個人差があるらしい。トリオン量が多いほど、サイドエフェクトという特殊な影響を発現する事がある、と。そこも個人差があるとの事なので、じゃあなんでセンパイは断定的なんだという疑問が湧き上がる。

「あー……ちよつと前、3階から黒板消し落としたんだ。覚えてるか？」

「黒板消し……？ ああ……あれ」

尋ねると、センパイはややバツが悪そうに頭を搔きつつ何かを手放すような仕草を見せた。それで思い出すのは半月程前の事。

その週は花壇周りの掃除当番で、友人が「ダル」「帰り何する？」とか話しながら片付けをしていたところ。ふと嫌な予感がして上を見上げたら、上の階で黒板消しを叩いていた人がいた。今の話ではそれがセンパイらしいが、それは兎も角として。

それがツルツと落ちて、若干あたしたちの立っていた位置の近くに落ちそうだったのだ。で、そのまま落ちたら粉が舞ってソックスと靴につきそうだったからこう、持っている箒を何気なくここだつて感じのところに入れた。ら、なんか黒板消しが引つかかったのである。

幸いな事に友人には見られていなかったらしく、変に囁し立てられるのも嫌だったから安心して、上の階をもう一回確認した。しかしそこには誰もいなかったたので、取りに下りてくるつもりなのだろうと判断して花壇のレンガの上に置いて、さっさと帰ったのである。

「そうそう、あん時は悪かったな。けど、黒板消しの紐に箒の柄を通すなんて、よつぽどじゃやねえと出来ないだろ？ だからお前がサイドエフェクト持ちなんじゃないかって、戦ってみてから思ったわけだ」

「なるほど。だからセンパイ、そんなしつこいんだ」
「しつこいとは何だ」

またガシツと頭を掴んできたセンパイに半目になってしまふあたりは悪くないはずだ。あと頭を揺らさないでほしい。

戯れてくるセンパイに忍田さんは苦笑して、「そういう事なら」とひとつの事を提案してくれた。トリオンの正確な検査を試みようとする。

その日はそれで話が一区切りとなって、忍田さんとセンパイはそのまま訓練を。わたしは帰宅した。

明日には話を通しておくから、本部に来たら医務室の方に行つてくれとの事だ。本当は二人の訓練に興味がないでもなかったが、初日はあんまり遅くならないように帰るつもりだったのもあるから仕方な

い。

青葉からのどうだったかという質問に返事を返しながら、ため息を吐き出す。なんやかんや、疲れたなど。

翌日。本日は日曜日。洗濯だけ終わらせて、アパートの扉を締めて少しだけ気合を入れた。いや、気合を入れるほどのものはないんだけど。

「こんにちはー、雪原といいまーす」

どうにかこうにか広い本部の医務室に辿り着き、挨拶しながら顔を覗かせる。中にいた人が何かを書く手を止めてこちらを見、一瞬うわつとでも言いたそうな顔をした。が、取り繕うように笑いながら席を勧められたので遠慮なく座る。

けっこう真面目にメイクしてるから、そういう反応には慣れたものだ。学校の先生たちには怒られてばかりだけど。

「さて、それじゃ早速」

トリオン量をはかり、普段の生活についてだとか、空気の話だとかを促されるまま話す。片手に取られるメモに最後の一字を書き足した先生はそれを眺めてうんと唸った。

センパイはあたしにサイドエフェクトがあると思ってるみたいだけど、こう難しい顔で悩まれたら違うんじゃない？ と思ってしまう。

あたしにそんな才能が眠っていたなんて！ なーんて思うほど、わたしは頭お花畑ではないつもりだ。自分が特別な人間じゃない。特別なんだったら、きつとわたしはこんな人間じゃないはずなのに。

「君のサイドエフェクトは、名付けるとするなら空間感応能力というところだろう」

しかしそれを定義されてしまうと、ああ。わたしは、わたしがしてきた事は……最初から間違いだっただって。そう思う。何もかも、全部。

「空気の流れを察知できるのなら、それは戦闘においてかなり有用だろう。しかもそれに嫌な空気、つまり気配を識別し、同時にその中に活路を見出すということは、だ。迅とはまた違う、予知に類する能力にも思える。そう考えると感応能力というには違う気もするし分類

として間違えてはいないはずだから」

説明、というには何かブツブツと呟くようだし、生き生きとした顔をするものだから、あたしのメイクよりもそっちの方が引くんだけど。なーんてついつい思ってしまったのである。

だがわたしももう高校一年生。それに加えて空気を読むサイドエフェクトとやらもあるという事になったので……まあ、いつも通り空気を読んで茶々を入れないでおいた。そーいう方面でのめんどくさい空気ではないし。どういふ方面かって言うと……修羅場じゃない方。

その後正気に戻った先生に「忍田さんにはこっちから伝えておくから」と背を押されてランク戦のロビーへと赴く事にした。昨日は説明を受けただけで、わたしは寄らずにから帰ったからどんなものだろうかと辺りを見回す。

昨日も見た顔にまたうわつとでもいう顔をされつつ、入口のランプの灯ってない部屋をひよいと覗き込んで人がいないのを確認する。いないブースに入ってパネルを操作してみると、皆わたしよりも頑張っているのか数人1000ちよつとがいるくらいで、後はわたしよりは上だ。とりあえず何度か戦ってみよう。

そんな軽い気持ちで適当にできるだけ自分に近いポイントの人を選ぶわたしなのであった。

高身長許すまじ

6戦ほどしたあたしの感想は、弱い、だ。昨日太刀川センパイと戦ったせいかな、おかげか、攻撃は大振りで考えなしと見える。弱いと言わずなんと言うべきか。

一応と観察してみたが、センパイの剣筋を基準にしてしまっているのか血を吸った蚊みたいなものだから、つい我慢できずに反撃をくらわせてしまった。これは少し上の人を狙うべきかと思っただが、なんか違う気がしてブースを出す。

それから飲み物でも買うかという発想に至ったため自販機に赴いたところ。

「お。昨日ぶりだな、雪原」

「……太刀川センパイ。どーも」

ばったりとセンパイに会ってしまった。何でこのタイミングなんだ。これは違うでしょーよ。と自分のサイドエフェクトやらに文句をつけつつ、「後輩に何か奢ってやろう」と胸を張るセンパイにお礼を言っただボタンをプッシュ。

ガコン、と排出されたミルクティーを開封。うん、美味しい。

「どうだったんだ？」

自分のお買い求め品を買ったセンパイに勧められるがまま自販機横のベンチに並んで座り、うーんと唸る。

素直に答えるべきなのかどうなのか悩みどころだ。だがしかし、サイドエフェクトについて言い出したのはセンパイだしな。

「センパイの予想通り、サイドエフェクトらしいですよ。先生は空間感応能力だっけって言っていました」

「……ふーん。名前からして、なんかこう空間のなんかを察知するかそんな感じか？」

「たぶん、簡単に言えばそうなんじゃないですかね」

そう言われたらそうなんだけど、センパイのアバウトな理解であっているかはわからない。適当な相槌になったのを気づいているのかいないのか、センパイは何故か得意げに「やっぱりな」と言っている。

この人、なんでそんな自信満々なんだろう。一周回って尊敬するわこんなの。いや、剣の腕は昨日の段階で十分凄いなと思っただけだ。」「で?」

「……………で、とは」

そんな単語だけで反応できるわけがない。なんだ、この空気。ほれ言ってみるとばかりの、なんていうか期待してる、みたいな。何?

——期待、されているのだろうか。

「いや、来るのかって話だよ。正直、こんなうまい話どこにも転がってないぞ?」

「…………そりゃ、そうっすね。忍田さん、めっちゃくちゃ強い空気してますし、そんな人に教わる機会なんてないでしょーけど」

「だろ? ちなみに俺はどんな空気なんだ?」

好奇心しか感じねえ。この人、ほんところ、なんでグイグイくるわけ? 一回見かけて戦ってみただけの後輩に対する距離感じゃないよ絶対。頭バグってんじゃないの?

それかあれか…………距離感が小学生くらいのままとかか。たまに居るよね、女子にもさ。あたしもめんどくさい事にならないよう適度には話に乗っかるけども。

「どんなって……………なんかすごいセンパイ、楽しそうっすね…………。すげー今更感ありますけど、あたしに構って変に言われても知らねーですよ?」

「変に、って何だ。お前見た目の割に真面目そうだし、普通に顔いいし、悪い事ないだろ」

「は、…………」

はあああああ? えっ、なにこの人マジで。いや、えっ?」

「センパイって…………」

もしかや馬鹿なのでは? 不良と言っても差し支えない人間だぞこっちは。いや確かに茶化した言い方をしたあたしも悪いかもかもしれないけど。

でもさ、ちゃんと真面目な学生してるならあちこちから何か言われるってわかるもんじゃん? いやセンパイが真面目かどうかは知ら

ないけども。

実際、通りかかろうとした人もあたしの顔を見るなりそそくさと逃げてくしき。や、あたしに威圧感とかはないはずだからこの化粧を見て逃げてるんだと思うけどさ。

「先輩って、の続きはなんだ。言ってみろよ」

「いや。……うん、センパイって変な人だと思って」

「ふむ。なるほどな」

あたしの呆れを感じたのか、センパイはまたガシツと頭を掴み、にぎにぎと軽く握ってきた。いた、くはないけど何をするんだ一体。

「というかそんなに押さえられると、身長、身長が！ 背が低くなったらどうケジメをつけてくれる！ 自分が高いからって調子に乗らないでほしいんですけど!!」

「太刀川さん、何してるんですか？」

「あ？ ああ、嵐山か」

パツと手を離れたセンパイにため息を吐いて、髪を直す。今はトリオン体じゃないから、髪のはれは後に響いてしまうのだ。

チラツとやってきた人を確認すると、何時も通りに驚かれ、しかしニコツと笑われたのでとりあえず会釈だけを返しておく。普通だったらあたしを避けるのが殆どだが、センパイと同じく変わってる人なのかもしれない。

あたしががつつりメイクするの、変に人と関わりたくないからなんだけど。ボーダーだとそれが通用しなくなる可能性があるなこれだと。ボーダーに入ってる人であたしを除外した不良今んとこいなさそうだからあり得る？ かもしれない。

「コイツ、妹弟子ってやつ」

「え、ちよつとセンパイ」

「妹弟子？ それは羨ましいな、忍田さんの教えを受けるなんて。大変だろうけど、頑張れよ」

邪気なく笑う誰某さんに、違うと否定しようにも確かに迷ってるしな、と否定しきれずに返事を迷う。センパイの強引さに負けてる気がするが、どうしたものだろう。決定でいいのだろうか。

なんかこの人いい人そうだし、こういう人の方が向いているのでは？

「雪原、コイツは嵐山。学校は違うがお前と同じ年」

「同じ年……？　そうか。俺は嵐山准。よろしく！」

「は、あー……あたしは雪原色。まあてきとーに、よろしく……」

センパイの紹介の元、片や笑顔。片や無愛想に挨拶をかわす。あたしの笑顔は現在避難中なので仕方ない。目つきの問題で機嫌悪いか思われる事は数え切れない程あるが、問題ない。

「訓練生って事は、雪原は昨日入隊したのか？」

「ん、まあ。そーだけど」

タメ以下年下には敬語は使わない事しているため、同じ年とのことなので遠慮なくタメ口で頷く。嵐山はさして気にした様子はなく「わからない事があつたら遠慮なく聞いてくれ」と朗らかに笑つて。

「ちよ、なにすんの！」

頭を撫でてきた。何だコイツ。……何だコイツ！　あんたも背が高いからって馬鹿にしている?!　小学生にでも見えてるわけ!?　今年だつて話があつたじゃん！

「ハツすまん、妹と背が近いとか思ってたらつい」

「……………」

「ブツ！　フ、フ、クク……」

「……………」

悪気はなかったんだと謝る嵐山に、肩を震わせて笑うセンパイ。思わず無言になつてしまふあたしは悪くないはずだ。

いやこのメイクがなかったらあんたら二人ともか弱い女子に絡んでるように見えるんだからね？　わかってないかもしれないけど！

あーもう！　今までこんなに身長が低いのを恨めしく思う事なかったんですけど!!　多少気にしてても、こんな、こんな屈辱う……ううう……。

「…………嵐山は、休憩？」

「あ、ああ。……うん、防衛任務が終わったから。ついでにこの後ランク戦でもしようかと思つて来たんだ。で、太刀川さんが見えたから声

をかけた感じ」

「そ。センパイは？」

「俺か？ 忍田さんの稽古前にお前がいたら回収しようと思つてな」

「丁度よく居て助かった」となんてことないように言うけど、センパイの中ではマジで妹弟子にされているのだろうか。いや、確かに嫌だとは一言たりとも言つてはいないし、どつちかといえば領きかけてるところだけだ。

嵐山は全然妹弟子つて話を疑つてない様子で「それじゃあ」と爽やかに手を上げて去つていった。残されたわたしは静かに飲み物を飲んで、空にした容器を近くのゴミ箱へと捨てる。

「じゃ、俺らも行くか」

「……了解です」

立ち上がったセンパイはついてこいとばかりに背を向けて歩き出すものだから、ほんの少しだけ迷つて、でもすぐに追いかける。コンパスの差をわかつていないのか気づいていないのか、先々行くセンパイにキレそうだ。行くかつて言つた割にそーいうの、よくない！

ここでも身長差が響くという事実にすつごい腹が立つ。けど身長は、これ以上伸びるかは正直微妙なところで……。クソ、父親は高身長なのに何であたしは低いの！ おかしいでしょ……！ 継母もそこそ背があるし、たぶん弟クンは程よく身長高くなるんだろうなはー羨ましい！ そこだけはほんと、羨ましい。……それ以外は正直、可哀想な気がしないでもないけど。でも継母は母と違ってヒステリーでもないし、大丈夫だろう。というかわたしの存在が邪魔になるだけか。

………何で今こんな事が考えてるんだろ。バカらしい。

「どうした、雪原」

「は。……別に、何でもないですけど」

訓練室の扉を開ける直前に振り返られて、首を振る。生身のままで追いかけていたから息が上がっている他は、特に何も無いのは本当だ。

まあちよつと考え事に思考リソースが割かれていたのは間違いな

いけど。そんな事をセンパイに言ったって仕方ない。あたし以外の誰にも関係ない話だし。

「そうか？ まだ忍田さんは来てないな」

「そーですね」

訓練室を使っている人が誰もいない事を確認して、センパイはふむと何やら考え込んで。それからすぐにわたしを見下ろして、やけに楽しそうに「やるか？」と言った。

めちやくちや言葉足らずにも程があるけれど、たぶん昨日と同じく模擬戦やるーぜって事だろう。模擬戦というか訓練だろうけど。

「……いいですよ」

でも、まあ相手してくれるというならありがたく受けよう。さっきの個人戦、正直不完全燃焼感がすごくて不愉快だったのもある。それくらいならセンパイくらいこてんぱんに打ちのめしてくれる方がいい。別にマゾっ気があるわけではないけど。

なんとというか……そっちの方が、観察しがいがある？ ということか。ずっと見ていると強くなれる、気がする。……気がするだけかもしれないが。

「そうこなくっちゃな！」

ニヤリと笑うセンパイに、何かちよつと後悔してきたかもしれない。なにこの人、ほんと怖い。昨日もそうだったけどなんでそんな常に楽しそうなの。こわ。

そう思いはしたが忍田さんが来るまで何回も真面目に戦って、その度何回もボコされたわたしなのであった。手加減というものをセンパイはしてくれるつもりは端からないらしいです。

笑みを返す人たち

トリオン体は、疲れを感じにくい。だが、疲れを感じないというのは肉体だけで、トリオンを使えばそれ相応に疲れるらしい。

そして今回の場合は、トリオン無制限の訓練室における疲れ。即ち、精神的疲労なのである。訓練室の仕様はいまいち知らないけど。

「……センパイの鬼」

訓練室の外にある観覧席にもたれながら呟く。センパイはやってきた忍田さんと話し始めてるし、聞こえてはいないだろう。聞こえてたとしてもこの人聞き流しそうだけど。

かつてない疲労感にノロノロと起き上がり、二人の会話に耳を立てる。最初は防衛任務の事とか話してたけど、今はわたしの事になってるようだったから。

「——迅の未来予知と違って、彼女のは感覚によるものだ。慶が言っていたのはその事だろう」

「なるほど。たぶんそうですね。色々納得です」

「ああ。それで、さっきも模擬戦していたようだが」

「いやー、雪原、面白いですよ。サイドエフェクトもあるからか動きがたまに予想外で。風間さんとか迅とかと戦る時みたいなワクワクです」

「またも頭を掴まれてわしわしと撫でられる。もしやあたしを犬か何かと勘違いし始めてない？」

文句を言うのも億劫でされるがままになっていると忍田さんはちよつと大丈夫だろうかとも言いたげな空気をした。が、あたしとセンパイの顔を見て何かに納得したようにその空気を収める。どうして。

「雪原くん、まだ動けるか？」

「はい……だいじょぶです。あの、忍田さん」

「何だろうか」

センパイの腕を掴んで押し上げ、ようとして若干押し負けながら忍田さんを見上げる。背が高い。どうして皆そんなに背が高いの。首

が痛いですよ、あたしは。

「よろしく、お願いします。あたし、剣の才能とかなと思いますけど」

「ああ——よろしく。たとえ才能がないとしても、悲観はしないでいい。それを糧にして強くなればいいのだから」

「は、はい……！ 忍田さんマジカッコいいですね！」

「えっ、あ、ああ。そう、か？」

あからさまな尊敬と好意をぶつけられて戸惑っているのか、忍田さんが微かにたじろぐ。いや〜そういう反応されるの新鮮。自分でも言う事のない類の言葉だけに若干声が上ずってしまっているのは汚点。

センパイは意地でもわたしの頭を掴もうとしてくるのだけは意味わからないが、まあプラマイどっちかといえればプラス収支としておう。センパイだけはほんとのほんとに謎だけど！

「俺にはカッコいいとか言わねーの？」

「センパイ、催促とかカッコ悪い」

「は〜？」

「ちよっ！ もう、掴むのやめて、もらえます?!」

よくわからないうざ絡みをしてくるセンパイと子どもじみた攻防を繰り返す。まるで昔からの知り合いのようなやり取りだが、一切そんな事がないのが不思議な話だ。この人がそーいう、なんとというか終始楽しいな空気をしているからだろうか。

小学生の頃の男女の垣根が低い頃にあったやり取りを思い出させるのかもしれない。それが心地良いわけでは、なかったけど。

微笑ましいと見守っていた忍田さんに促され、センパイと訓練室に入る。今日のわたしは見学してたらいいと言われて、片隅で見えていたのだが。これがまた凄い。

一応あれで手加減されていたのか、それとも忍田さんが強すぎるのか。本気で打ち込むセンパイの動きは目で追うのもやっと。でも、あくまで大きな動きまで。その太刀筋を追いかけるなんてできない。忍田さんの方なんでもっと追いかけれない。

鋭く、速く、的確。傍目からも空気の揺らぎが少ない。揺らぎというか、なんだろ。隙間？ 太刀川センパイは強いけど、それよりもととずつと、強い。

いつの間にか、強く手を握りしめていた。訓練室だから跡にならないけれど、わたしにしてはとても強く。

無意識だったからその理由を正確にはわからないけれど、たぶん見入っていた、んだと思う。その強さに、その空気に。圧倒されながら、瞬きを忘れるほど。

「……………」

すごい。食らいつこうとするセンパイも、すごい。

強くなるって意思が、空気が、バチバチと伝わってきて頭を揺らされるみたいだ。それに劣らず楽しいという空気があつて、ほんと、同じ人だとは思えない。

——あたしはたぶん、センパイみたいにはなれないって見てるだけではつきりわかる。……でも、勝てないなりにセンパイみたいに楽しめるようには、なれるだろうか。

自分を偽るために覚えたメイクは楽しむようになったけど、それ並に……楽しめるものに、変わってくれたのなら。

強く……なれるかな。何も無い、空っぽな人間でも。何もかも諦めてばかりの人間でも。少しは何かに、なれるかなあ。

それから数日。センパイが対シミュレーションで訓練をする間、その片隅で忍田さんからわたしは教えを受けていた。

その前後には個人戦に赴き、少し点が上の人と戦ったり、センパイと模擬戦したり、割と戦闘については充実している、と思う。

まあただ問題があるとすれば、あたしが目立つから嫌な空気を感じるという事だけだろう。あと、友人の青葉が若干沈んでる事か。でも今は少し距離をとった方がいい空気を感じるため、彼女とは適度に話すくらいに留めて家には赴いていない。一応連絡は来るので、帰ってから返事を返して寝る生活になりつつある。

健康的、といえば健康的か。生身の体を意識して動かすようにした

らしいというありがたい助言も頂いて、風呂上がりはストレッチもしているし。うん。

「あなたが、忍田さんの新しい弟子……？」

本日の指導も終わり、個人戦で正隊員にあがるためのポイントを稼ぎに来たところ、雰囲気的に年上らしき人に声をかけられた。ふむ、鋭い目つきをしてはいるが、悪意らしきものは感じない。という事は、とりあえずは大丈夫か。

絡まれる事はそれなりに慣れているため慌てず騒がず「胸を張って弟子とは言えないけど」と返す。弟子というには目が浅いし、弧月の振り方とか基礎的な事とかしか教わってないから違うといえは違うだろう。いや、個人的に教えてもらってる時点で大多数の人からはブーイングものかもしれないが。

「私は沢村響子。あなたは？」

「雪原色つす」

「そう、よろしくね」

「ポイント争いはできないけど、お手合わせ願える？」と真剣な表情をした沢村サンにとりあえず頷いて、ブースに入る。

指定された番号を選び、しかし戦闘に入るなり真っ直ぐに突っ込んでこられたため横に避け、こちらも弧月を抜く。連日見ている動きよりは遅いが、それでも訓練生とは段違いの動きだ。やはり実際の防衛任務を行う人はトリオン体の使い方が慣れている、と言ったほうがいいのか。弧月を振る動きも迷いが無い。

でも――。

「……もうちよつと慣れたら二、三回くらいは勝てるかな」

ここ数日もつと速い人を見ているから、目が慣れれば勝ちの目は出てくるだろう。沢村サンがどういう戦いを好み、使ってくるのか。それをじっくり観察する。一戦は二度切り結んで負け。二戦目は背後を取られて負け。三戦目は一度目に比べて距離をとったりとられたりしつつまた負けて。

肌を感じる空気に混じる感情めいたもの。そこに疑問とキリリと糸の張った緊張が紛れ込む。

そうして四戦目。背後の隙を縫う刺突に、対処する。「っ!？」

振り返り際にわざと大きく開けた脇と腕の間に弧月を貫かせ、体勢を整える前に背からトリオン器官を狙う。だが、センパイのように上手くはいかない。もう少し試せばズレる事なく出来そうだけど。

続く五戦目では警戒され、上手くないなされて負けてしまった。ここまでで一勝四敗。しかし、十戦した結果は。

「三敗、か。雪原さん、やるわね」

「あはは、どもども。いや、沢村さんも強いっすね」

朗らかに笑いかけられ、空笑いで応じる。そう。結局三勝したのである。とはいえ最後の二戦でかろうじてとった勝利、ではあるが。

でも、センパイが初日から相手してくれていたからか、動き自体には追いつけてはいたかな。……いやこれ、センパイに言ったら得意げに「そうだろ」とニヤつきそうだ。というかここ数日のやり取りで既に何度かされている。そんな人に面倒見られてるとか思いたくないだけど。

「いや、私なんてまだまだよ。ね、晩ごはんはどうしてるの？ 雪原さん、昨日も夜までいたでしょ」

「んー……食堂で食べてから帰ろうかと。コンビニで買うのも面倒だし」

「そっか。じゃあ一緒に食べない？ 折角だし、さっきの戦闘について話しながら」

聞きたい事があるみたいな期待と、善意の声。この人も変な人だ。年上、だからだろうか。

余裕を残す沢村サンに、何だか無性に胸を掻きむしりたくなかった。何でだろ。別に、嫌なことされてるわけでも、そんな空気を向けられてるわけでもないのに。

そうして先程の戦闘におけるこうした方がいいとかどうしてそんな事をしたのかとか、そういう反省？ 反省会、的なのを開く。

正隊員になると、もっと頻繁にあるらしい。特に、近界民ネイバーと戦いになった後とかはそうなんだとか。一緒に組んだ相手との協調だとか、

そういうのを焦点にしてるらしい。

そういえば、今後チームを組んでランク戦などを行っていくようになっていくだろうって、忍田さんが言っていたな。正式な隊員がもう少し増えたら出来るだろうとも言ってたし、なるほど。こうしたやり取りをするのは悪くはないのだろう。情報整理、というのは必要な事だ。

たとえばだけど——振り向かれなくなっちゃって、好かれなくなっちゃって、次の手を考えるためにはその前後の情報をインプットし続けなくてはだから。その先に待ってるのが望むものではないにせよ、失敗のラベルが貼られたそれらがわたしの中に残る限りは……間違いにはならない。そう、するために。

なんて。何考えてるのかわからなくなってきたや。

やめやめ。どーでもいい事なんか、押し込めて隠しちゃわないと。

「何かあったらいつでも頼ってね、雪原さん！」

力になると言って笑う沢村サンに、そうして何となく自分の心の正体に気づく。もしかしたら、ではあるけど。

わたしと、全然違う人だったから。ちよつぱり、羨ましかったのかも。こういう人だったら、真つ直ぐに言葉を言える人であれば。サイドエフェクトなんて、なかったら。

——母と一緒に、死ねたのかな。

なーんて、さ。我ながら意味のわからない思考だ。

この人とは母と、その死に因果はないのに。なんであたし、そんな事考えているのだけか。

「ありがとーございませす」と笑みを返したわたしは、そうして沢村サンと別れて重い足取りでアパートへと帰った。

同族嫌悪に近いのかも

あれからまた二週間程が経つ。沢村さんとは何度か食堂で一緒になったりして知ったのだが、どうやら忍田さんの事が気になるらしい。だからわたしの事も気になっていたのだとか。なるほど、流石忍田さん。モテる人だろうと思った通りだ。

そんな沢村さんの紹介で同い年のオペレーターだという月見を紹介されたり、他の同性正隊員を紹介されたりした。名前を上げた月見はあたしと違って品行方正という言葉が似合うのだが、彼女は太刀川センパイの幼馴染みだとかで、迷惑してないかと聞かれた。

センパイ、幼馴染みにもめんどくさいやつと思われているのだろうか。めんどくさいというか、グイグイいくからとかいうか。月見が言いたいのはそういう事なのだろう。だがまあ頭を掴まれる以外は迷惑という迷惑はまだ起きていないため、とりあえず首を横に振っておいた。

沢村さんの紹介だったからかこの派手な見目でも警戒がすぐに解けたので、ありがたいような、困るようなという複雑な感情だ。他の連中みたいに遠巻きにされるのは特別何も思わないが、へーいい子なんだくみたいに扱われるのは地味に居心地が悪いのである。

「よろしく〜」

そうして本日のわたしは、目標ポイントに到達した事で晴れて正隊員の一員となった。ので正隊員用のブースに顔を出してみたところ何故か初対面の相手に挨拶をされていた。それも、個人戦の中で。

いや、原因はあるし、相手の名前を知ってはいるのだ。原因というのは太刀川センパイが「お、正隊員になったのか。じゃ、ちようどいからこいつの相手してみるよ」と祝福も何もなくブースに押し込んできた事で。相手は「いやおれ、良いとは言っていないんだけどな」なんて言いながら隣のブースに入って、戦闘開始となったのだが。

「あんたが迅悠一？」

あたしは、端的にそう尋ねた。

迅悠一、というのはわたしのサイドエフェクトと比べる対象として

よく名前があがっていた。センパイからはしょっちゅう迅、という単語が出たし、忍田さんも機会があれば聞いてみたらいいとか言っていたし。

でも、ちよつとイメージと違ったな。あたしと似てるところもあるとか言われたから、もうちよつと悲観的なのかと思っただけ。思っただけは、真つ当だ。

「そうそう、おれは迅。迅悠一。君の話はあちこちから聞いてるよ、色」

「……馴れ馴れしいからやめてくれる？」

「ハハ！ 悪い悪い。太刀川さんからかうと面白いって聞いてたもんだからつい」

からからと笑う迅に、無言で弧月を振る。しかし、ほんの少し後退する事で避けられた。まあ、見える位置なのだしそんなもんか。

それに、こいつのサイドエフェクト。未来予知だとかいうそれには、視えていたのかもしれないし。

「おーこわいこわい。折角なんだし、もうちよつとくらい話さない？」

「嫌。話があるなら戦った後にして」

「つれないな」

なんかムカつくな。そう思いながら、とりあえず近づいて攻撃をしかける。スイスイと避けつつも笑う迅は、しかし反撃してくる空気をしていない。その余裕とかすかした笑みとか、わかってますな空気が無性にムカつく……！

ここまでムカつく相手ははじめてだ。センパイはムカつくより先にまたこの人は、という呆れを覚えてしまう相手になってしまっている。あと未だに意味わからない人。

「おっ、とー」

「……いい加減、反撃してくんない？ ムカつくんだけど」

「ええー？ ……いやまあ、そうだな。うん——それじゃ、遠慮なく」

何かに納得したように頷いて、ニヤリと笑った迅悠一は。そうして、わたしの攻撃を一切受けることなく一戦、二戦。……九戦と軽やかに勝利していく。

そこまで戦った感想としては、やりづらい。その一言に尽きる。未
来予知っていうのは厄介だ。あたしがまだまだ弱い、というのもある
だろうけど。冷静なつもりの一撃も簡単に避けられてしまう。

——でも、だとしても、少しだけ見えてきた。

「っ……!?!」

最後の十戦目。互いに一気に距離を詰め、それから、弧月をあらぬ
方向へと流す。そうして生まれた一瞬の迷いの前に身を屈め、弧月を
振り下ろされる瞬間を感知して切り上げる。

いや……だめか。ちよつとミスったかもしれない。

「は、やるなあ、色。今のはおれのサイドエフェクトでも読みきれな
かった」

「そう、そりや良かった。あと名前、馴れ馴れしいって——」

言ったでしょ。そう伝える前に、個人戦が終了する。とはいえ、
さっきの十戦目は引き分けになっていた。お互いトリオン漏出過多
による引き分けだ。

どちらもが先を読み違えた。それだけである。迅は間違いなくわ
たしを切りつけたし、わたしも同じように切った。けれどどちらも、
一手早かっただけだろう。あるいは、遅かったのか。

ため息を吐いて起き上がり、ブースから出る。と、センパイが待ち
構えていた。

「よーし、よくやった雪原」

「うわっ……ちよ、やめてよセンパイ！ 髪直すのめんどいって毎回
言ってるじゃん！」

「そうだっけ？」

最早恒例かの如く頭を掴まれてぐにぐにと握られる。痛くはない
絶妙な力加減ではあるが、鬱陶しい事この上ない。でもセンパイは毎
回訴えても止めないので若干諦めつつあったりなかったり。

隣のブースから出てきた迅はそれはもう楽しげな顔でこちらのや
り取りを見ているのがまた腹立たしい。見学料取るぞこら。

「どうだ、迅。俺の妹弟子はお前のサイドエフェクトに負けてねーだ
ろ。実力が足りてねえからあれだが」

「あはは、いやー最後はしてやられたよ。あれで引き分けにもっていかれるとは思ってなかった」

「……次は絶対殺す」

「物騒だなあ。おれ、そんなに嫌われてるの？」

「会ったばつかなのに」と泣き真似の仕草をする迅を一度睨みつけ、ため息を吐き出す。落ち着けあたし。センパイみたいに調子に乗せられると今後何度も頻発するぞ。だから落ち着け、落ち着け……よし。

「ウザい」

あ、間違えた。いや間違いではないんだけど。

「太刀川センパイは割と本気すぎて困るけど、あんたは本気じゃなさすぎてムカつく。よく言われるんじゃない、そーいうの」「ん。……なるほど、手厳しいね。次は気をつけるよ」

苦笑いで頭を掻いた迅が、じつとあたしを見つめてそれからセンパイに戦うぞと誘われたのに頷く。微妙なその間が気に障ったけど、でも聞こうとは思わず「それじゃあまた後で」とセンパイに声をかけてもう一回ランク戦に挑む事にする。

今度は、もうちよつと実力が近い相手がいい。正隊員になりたてのあたしじゃ、まだまだ全然弱すぎる。迅に一泡吹かせたいと思っってしまったし、頑張らねば。

いつも真面目にやってるつもりだけど、それでももうちよつと強くなりたくなる。何のためとか、誰のためとか、そういうのはない……つもりだけど。こう毎日訓練に明け暮れていると、よくわかんなくなっていく。

以前までのあたしだったら、絶対にどこかで手を抜いていたはずだ。気づくのが遅れて荒れちゃった小一の苦い思い出が、いつだって過るから。いや、殆ど皆ころつと忘れたように過ごしているけど、けっこうなものだったのだ、ほんとマジで。

詳細の記憶は薄らいでるけど、物が宙を行き交う小学生にしては少々派手な喧嘩に挟まれたのだから、うん。なんだっけなあ。恋情云々ではない事は確かなんだけど、いつの間にか広がった怒りの空気が

を宥めようとして、宥めきれなかったのだけが確かな事で。親がわたしに無関心だったのをどうにもできなかったように、ぶつかり合った怒りのコントロールが難しいのはその頃に理解したのである。

年齢が上がるごとに自分と違う些細な事をあげつらつてイジメをしている子を見てからは、嫌だなめんどくさいとは思って……でも、何でかは忘れたけどそれならコントロールできるって気づいたから。空気がぶつかり合わない程度に、適度に声をかけたり離れたりしてきた。やり過ぎたらだめだって、あたしの何かが……もしかしたら、サイドエフェクトがそう訴えていたのかもね。

だから、常に手を抜く時は抜いてきた人生だった。

今だって、ボーダーの事にかまけて、友人から適当に離れていたけれど。それがたぶん、良くない方に転がっていったのだろう。

梅雨の憂鬱な空が雨を落とす中。わたしは小さく、そう思った。

携帯を握りしめる手に、力がこもる。表情は、どうだろう。半笑い？ それとも、驚いているのか、どうか。

もう全然、わからない。目の前に広がるそれも、全部。

「……青葉」

声をかけたって無駄だって、わかっていた。

湿気を孕んだぬるい風が室内へと入り込んで、答えの代わりにぷらりと揺れる影。

それを見て、納得する。——ああ、なんだ。数日前に迅が言ったの、こういう事ね。

『おれには、未来が見えても変えられないものもあるんだ。……だから、後で殴つても、いいよ』

いつもの訓練の後に声をかけてきたあんなには、あたしの未来が見えていたのだろうか。

友人の——青葉の死に追いついたわたしの姿が。

「……………ムカつく、なあ」

彼女が死ぬ事を明かさなかつた迅にはない。この苛立ちは、自分に向けたものだ。

ここ一ヶ月と少し。青葉からは常に沈みきつた淀んだ空気があった。それでもあたしとか友人の前では普通に振る舞おうとしていたから。だからあたしは、距離を保っていたのだ。変に思いつめないようにって、さ。結局、無意味だったわけだけど。

手のひらの中で鳴ったヴァイブレーションに、ゆっくりと携帯の通知画面を開く。

「ちくしょう……」

知らない名前からの、通知だった。けれど、それは青葉からのものだと確信が持てる。

だって、アイコンが彼女と一緒に撮った写真、だったのだから。そうして目に入った一文に、唇を噛む。

『傷になってほしい』

足を踏み入れたその場所に、その言葉に、血の味が口の中に広がる。唇、噛みすぎて切れたのか。思考の端でそんな事を思いながら、眩く。「あたしに、何を求めているの。そんなもの、求められたって」

わたしにその死を、背負う事なんて出来ない。出来ないのに、どうして。どうして、今になってわたしを揺るがすの。

その距離を、見誤っていたのだろう。離れるタイミングを、間違えてしまっていたんだ。家を、母を無くしたあの後に、落ち込む彼女を助けなければ。一緒にいなければ、こんな事にはならなかつたはずなのに。

「……………きゅーきゅー、呼ばなくちや」

死体を発見した時の対処を調べて、連絡をする。

心に広がった波紋は、おさまる気配をみせてはいなかつたけれど。今だけは、見ないふりをする事にした。

逃げだつて、わかつている。でも、今のわたしにはまだ何も、考えられなかつたから。

期待

友人の死から三日。ボーダーには連絡をつけ、予定となっていた防衛任務も休んだわたしは、諸々の確認云々を終えて。なんとはなしに放棄区域となった場所へとやってきていた。放棄区域とは、ボーダー本部を中心に近界民のやってくるゲートを引き寄せる範囲となる警戒区域の周辺部を指す。

その中でも外縁部に近いところではあるが、それでも人の気配は遠く、静かに錆びつく町並みがそこにはある。

今のわたしは落ち着いている、わけではない。考えるべき事がぐるぐると頭に駆け巡って言葉を残り残しているだけだ。そもそも警察に事情を話した他は、暫く言葉を発していないけど。

「……………」

雲間からこぼれる太陽が、じわじわと蒸し暑い熱をうみだしている。来たことのない公園のベンチでそれを見上げて、わたしはただただ茫洋とするばかりだ。

——傷に、とは。どういう意味か。思考の最後がそこに行き着いて、また堂々巡りがはじまる。

そもそも何故青葉と仲良くなったのか、とか。……中二の時同じクラスだったから話してただけだ。

友人として特別仲良かったの、とか。……割と仲良くはあったけど、第一次近界侵攻があったのが主な要因だったろう。

彼女はあたしをどう思っていたのか、とか。……死人に口はないけど、恨みではなかった、と思いたい。あるのはきつと、仇に対して何もできない事に……いやでも、恨んでる可能性はあるか。自分と似てる境遇の癖に、ボーダーに入れたわたしに対して。

だから、死でもって傷にしたかったとか？ ……どう、だろう。やはり、わからない。彼女に残された言葉は、何かの感情だけを示しているはずだけど。

わたしは空気を読めても、人の感情を重んずる事はたぶん出来ない。自分の事しか頭にない、自己本位のさいてーな人間だから。……

たぶん、そこはきつと、父に似てしまったのだろう。

あの人は、価値のないものは捨てられる人だもの。そんな人の娘が、どうして他人の死を思えようか。

実際、悲しいわけではない。苦しいとか、寂しいとかも、違う。こう考えるとなんて冷たい人間だ。

「……何か用？」

からからに乾いた喉を無理矢理動かして、目の前にやってきた男を見上げる。かけていたサングラスを下げて、彼は少し困った顔で、空気でわたしの隣に座った。何だよ、もう。何か言いなさいよ。

「…………ごめん」

「は」

言うに事欠いて、それか。よっぽど殴られたいらしい。

「うっぎ」

でも、決して殴ったりなんてしてやらない。そんな事したら、誰かのせいにしてるみたいじゃん。誰かの、迅のせいになんてしても、何も変わらないのに。

バカみたいでしょ、そんなの。あたしが彼女の死を背負おうとしないのより、もっと質が悪い。

「……あんたのせいにするつもりなんて、ない。ほったらかしにしていたツケが回ってきただけだし」

「それは、でも……色は悪くないだろう？」

「名前……いや、もういいか……。……悪いとか、悪くないとかじゃ、ないでしょ。結果が全てだよ、あの子があたしに何かを求めて死んだって結果が」

あたしの何の傷になりたいのかはわからないままだけど。一生覚えてるとか、忘れるとか、そーいうのじゃないの。もしかしたら深い理由なんて、ないかもしれないが。……それは希望的観測というものだろうか。

またも無言になる迅の事は無視して、またぼけっと空を見上げる。あの日の曇天が、今日は遠い。この調子だと、夕立も降らないかもしれないな。

それから数分。いや数十分？

「もう十分、背負ってるだろ」

「……………何、急に。何か視た？」

「ん。…………いや、うん。おれのサイドエフェクトが、そう言ったら良
いっていった。なあ、色」

歯切れ悪く言った迅が、横から顔を覗かせる。ゆらりと揺れる瞳
は、何をみているのだから。

本当に、他人の事は何もわからない。

「——おれと、部隊チームを組まないか？ ずっとじゃない。色がもう
いって言うまででいいから」

「チー、ム…………？」

「ああ。一昨日、正式に部隊チームを結成できるよう細かい規定が決まった
んだ。部隊運用自体はもっと人数が増えてからになるみたいだけど。
で、それに伴ってチーム組んでの戦いも解禁。…………そこで、おれと一
緒に上まであがってほしい」

じつと覗き込んでくるその瞳に、ああそういえばと思い出す。忍田
さん、近々そういうのができるって言ってたけど…………それが今なの
か。タイミングが、いいのか悪いのか。

「今度、また新しい訓練生が入ってくる。そのくらいから、ランク付け
の方式も変わるんだ。細かい事は…………そうだな、うちにきたら話そう
か」

「だから」と立ち上がって、目の前に立った彼が片手を差し出してき
た。

小さくて丸いわたしの手に比べて、長くて大きな手をしている。

「雪原色。おれは、本気だ。おまえとなら、誰にも負けないうって、そう
思ってる」

何それ。そんな口説き文句…………ある？ 口説くにしても、もつとマ
シな言葉があるでしょ。そもそも、あたしにそんな期待を、するなん
て。

「バカじゃ、ないの」

——期待。期待、か。

ボーダーに入ってからというものの、今までのあたしがしよぼくれていくのを感じる。何の期待もできず、何の期待もされなかつたあたり。それが、ボーダーに入ったらよくわからない期待を向けられて、求められて。……もしかしたら、ああ、期待してもいいのだろうか、勘違いしてしまいそうになる。

求められているものが捻くれたわたし自身ではないのかもしれないけれど。

「あなたのサイドエフェクトがどう視てるのか知らないけど………あたしが足引つ張つても、いいんでしようね」

「あはは、そこは大丈夫。忍田さんとは違う方式で、おれ並に強くしてやるから！」

「そーいう自信過剰なところ、めちやくちやムカつく」

「アラ、もしかしておれ、信頼ない？ 色に勝ちすぎてるせいかな」
「うつつつぎ」

ほんの数秒だけ手を掴んで、すぐに離して立ち上がる。安心したように笑う迅は無視。だって、今のわたしには言うべきだろう言葉が何も出てこないから。

でもいつか——いつかもう少し、自分の感情が、彼女の意図が、わかる日がきたら。何かを伝える事は、出来るだろうか。……できるまで、時は待っていてくれるのだろうか。

待つてはくれないのはわかっていて、願ってしまうわたしこそ、バカだな。

そんなこんなで迅の先導でやって来たのはボーダー旧本部だったという場所。そこは、川の真ん中に建っていた。

「ここにいる人は今は少ないんだ。一部は遠出したりするし、帰ってきたらその時紹介するよ。で、こつちが訓練用のブース。本部と違って観客もいないし、やりやすさはここのが上だよ。ま、人がいないからんだけど」

旧本部は見た目の通り現本部に比べてかなり小さい。だからか案内される場所も説明も手短に終わった。普段は誰かしらがいたりい

なかつたりだそうで、今日のところは全員出払っているようだ。

今メイクも全然決まっていなくて、誰かに会うよりは会わない方がいい。とりあえずさっさとトリガー体になって、と。

「じゃ、とりあえず軽く戦う？」

「おっけ。この三日サボったから、動けるかな……」

小さくぼやきながら、ブーツのひとつに入る。先程迅が設定を弄っていたからか、シンプルな訓練室ではなく市街地の設定になっているようだ。

悩みを振り払うようにがむしゃらに飛び込んで、何度も切り結ぶ。手加減されてるのはわかるが、不思議とムカつきはしなかった。

そうされるだけ、調子が出てないのが自分でもわかるから。でもその分、何だか思考が冴えていた。

「……、……」

空気が動くのがわかる。狙いは右。いや、上。狙ったらいいのは下。弧月の下をくぐりぬけて、背後をとって振り返りざまに一閃。凌がれたそれを牽制に、距離を離す。

次に攻撃が来る場所を、把握。迅を相手にすると数秒で切り替わるそれを、しかし自身が攻撃してみる事で断ち切る。

「っ、ハハ！」

楽しげな顔が、視界に入る。それを見上げながら首めがけて弧月を振るい、切り替わった空気が防がれる事を伝えた。やりにくい。……いや、やりやすい？

相反した考えを片隅に置きながら、直感が示す道を穿つ。そうして。

「相打ちか〜」

「……は、……つかれた……」

はじめて戦ったあの日の最後の勝負と同じように、引き分けになった。しかし、あの時よりもずっと、確かに見えるものがある。それはきっと。

「色のサイドエフェクト、おれとは相性良いけど悪いなあ。本当に未来としては見えてないんだろ？」

「……まあ。こうしたらこうなる、みたいな明確なヴィジョンじゃないよ。感覚的に理解してるだけだし」

サイドエフェクトを少しは理解したから、なのだろう。そうと知らぬものを扱っていた時とは違って、そうだという意識があるのだから。

「それ、もつと鍛えてこーか。あと、弧月以外の武器、試してみない？ 色なら出来るだろ」

「他の？ いや、今あるの遠距離の狙撃銃だけじゃん。あたしに向いてるかは微妙じゃね？」

「いやいや、実はトリオンをこー、弾みたいに飛ばす中距離タイプのトリガーがあるんだよ。一回……と言わず、この際だ。両方試そう」

ジェスチャーで伝えようとしてすぐに諦めた迅は、訓練室を出て狙撃銃とふたつのトリガーを持ってきた。これを使って試せ、という事だろう。

休憩させてくれないのかと思ったけど「あれれ、もうへバツたのかあ。カワイイもんだな」とか言われてムカついたのでその手にあるのを掴んで、それぞれ使ってみる。その間も後ろで囃し立てるものだからムカつきが止まらない。

わざと煽っているのだとわかっていても、なんかこうめちやくちや腹が立つ。さつきはそんな事なかったのに、なんでだろ。

とりあえず試すだけ試して後は実戦形式でやっていこうとか言うこいつは一回シメてもいいだろうか。いやいいはずだ。

人間ね、慣れてないものをすぐに使えるわけじゃないんだよ！ あたしは天才じゃないってわかってるから、できたら弧月で苦労してないつつの！ ……いや忍田さんと太刀川センパイの教えがあるから同じスタートラインだった奴らよりは苦労してないかもしれないけどさ。

——それが恵まれた巡り合わせだっていうのは、わかってる。

うん。わかってるから……青葉。あんたの残した傷を、この巡り合わせの中で見つけてあげる。すごい傲慢な言い方かもしれないけどさ。

今のあたしではあなたの期待も、他の期待も全然応えられないし受け入れるのはまだ難しい。だからやっぱり、待っていて。

わたしは、あたしは……自分のために。あなたに答えるために。強くなるから。

青春とは

訓練が終わった後、ここにいるあるいはよく来るのだという林藤さん、木崎さんと小南と挨拶をかわした。

その流れで訓練を行う時に泊まっても問題ないと言われたから、もし泊まるならその時はちゃんと化粧ポーチ持ってくるようにしよう。他にも何人もいるらしいけど、今日はその三人だけだったらしいから、そういうのはまた明日以降だ。人見知りがあるわけではないが、顔を覚えられるかだけが心配である。

「明日は本部に行くのか？」

「……三日も休んだから、十分でしょ。あー……忍田さんにちゃんと謝らなきゃ」

「あはは、忍田さんなら大丈夫だよ。それよりは……うん。学校では気をつけておいた方がいいかな」

何を？ 問いかけてもはぐらかす迅の横腹に肘を入れながら、眉を寄せる。学校で起こることといえば、どうせ遠巻きな視線を寄越されるだろうけど。あとは、なんだろう。

疲れて何にも思い浮かばないな。急に休んだ事を謝る以外やる事？ ……いや、だめだな。なんか喉元まではきてるけど全然出てこない。

——そう思いながら適当に頷いた過去のあたし。バカ。

「雪原、お前何で来なかったんだ」

帰りの昇降口。そこで待ち構えていた仁王立ちの太刀川センパイに捕まったわたしは、脳内で自分をボコボコにする姿を浮かべた。

センパイなんか怒ってるんですけどお……なんでえ？

「いや……色々あったんで。ちよつと余裕がなかったというか」

「なんだ、俺には言えないのか」

「ええ、いやあ、別に……てかなんすか、そのめんどくさい彼女みたいなムーブ」

痴話喧嘩？ とでもいうような好奇の視線が集まったのをとりあ

えずボーダーに向かう事でどうにか凌ぎつつ、よくわからないセンパイの怒りを鎮めるべく言い訳じゃないけど、結果的に言い訳を試みる。いや、ほんと何なのそのめんどくさい彼女ムーブ。センパイは男なので彼氏と言うべきなんだろうけど、冗談なのであえて彼女と言っではみたけど。

えっ、更にめんどくさい空気になってくんだけど待って。ほんと何、何なのこれ。

「迅がお前と部隊組むって自慢してきたんだぞ。そりや気になるだろーよ」

「あ……—」

あの野郎くっ!! 絶対シメる。何がなんでも一回シメなくちやならない。めんどくさい事しやがって!!

気をつけろって言ったくせに何センパイ焚き付けてるんだよバカ!! ほんともう、迅のバカ野郎!!

「何で俺じゃなくて迅を選んだんだ? 俺の方が絶対カッコいいだろ」

「いやカッコよさ関係ないんで。というか、マジでそのめんどくさいムーブやめてくださいセンパイ。ウザいっす」

「はあああ? カワイイ後輩を心配してる先輩に向かって失礼だぞ雪原あ」

「うわっ」

いつものように頭をにぎにぎ握ってくるセンパイにどうにかこうにか説明する。嘘は挟まない。嘘を言ったって仕方ないし。迅とチームを組むの承諾したのも本当だし。

でもセンパイがそこまで言うなんて思ってたし、なんならセンパイと組むとか考えてなかったのだから仕方ないじゃない。あとわたし、センパイの連絡先知らないもん。訓練室で毎日会ってたから交換とか必要なかったから。

「じゃあ連絡先教えろ。で、なんかあったら真っ先に俺に伝えるんだぞ。彼氏が出来たときもな」

「今度はめんどくさい父親ムーブじゃん、ウケる」

「父親というか母親じゃねーか？ いや、知らねえし正直ノリで言ったけど」

怒りの空気がからっと晴れ上がり、逆に今度は優しく頭をぼんと叩かれる。なんだかんだとボーダーに入ってからというもの、ずっとセンパイに面倒見られてるからかな。ちよつと落ち着く、かもしれない。

口が裂けても言えないけど。うん。言ったら絶対にウザいし。

「ほんとにごめんなさい、太刀川センパイ。……心配、してくれて……その、ありがとうございました」

返事がわりにわしゃわしゃと髪をかき回す手を、今日は黙って受け入れる。連絡なく休んだのは悪いと思っただけど、だって、思ったよりも心配させてしまったみたいだから。

その後何事もなく本部に着いたあたしはソツコーで忍田さんに謝り倒した後、いつもみたいに先輩の訓練に付き合ったり防衛任務に行ったり、あつちで迅と訓練したりとんやかんやと慌ただしい日を過ごす事になる。

ある日のわたしはランク戦に挑んでいた。今日は知り合いがいるだろうかと確認してみるが、見る限りは誰もいなさそうだ。いや、一人だけいた。

「嵐山、もう帰るところ？」

「ん、雪原。ああ、あと一回くらいやったらあがろうかと思っただところだ」

「ふーん」

「雪原がよければ戦わないか？」

いつもの明るい空気に安心しつつそのつもりで声をかけたと伝えれば、彼は一瞬きよとんとした後更ににこにここと笑う。いや、そんな喜ぶところあった？

センパイじゃあるまいし、戦おうと言って喜ばれてしまううちよつと引くわ。……嵐山が嬉しい理由はセンパイとは違いかもだけど。だってあそこまで戦闘狂じゃないし。

「へえ、それ……はっ、楽しみだ！ 俺も、誰と組むか悩むな……つと

！」

「柿崎と組めば、いいんじゃない……！ 仲、いいんだ、しい！」

「それはありかも、だなっ！」

戦いながらチームを組むのかどうするのかという話になったため、切りかかりながらも答える。と、嵐山からはそんな返答が返ってきた。

お互いに組み込んだ中距離用トリガーを使っているのだが、まだわたしも嵐山も慣れていないから中々狙いが当たらない。そのおかげもあつてか、けっこう拮抗した勝負が繰り広げられている。……ちよつと、楽しい。

「はは、引き分けか。手強くなったなあ、雪原も」

「お褒めの言葉をドーも。次こそ勝ち越すから、覚悟しといて」

「そう言われると俺も頑張らなくちゃな。先にボーダーに入った身としては負けられない」

ラウンジで先程の戦いについて振り返りつつ、軽く雑談する。同い年だからか、会話の内容はそこそこ遠慮ないものだ。まあそっちの学校はどうとか、授業がどうか、そういう話が主だけど。

「青春、ね。そーいえば嵐山、彼女とかいないの？」

ボーダーに青春を捧げる云々と、まあそういった話の流れからふと思い立ち、首を傾げる。きよとんと目を丸くした嵐山は、しかしすぐに首を振った。

「あんまり考えた事ないな。雪原こそ彼氏がいそうなものだけど」

「は？ そう？ ……嵐山モテそうだけど」

「ん。そっちこそ。いやつだから、モテるんじゃないか？」

「……いやどこをとってそうなるわけ？ どー考えてもあたしより嵐山の方がモテるっしょ」

よくわからない会話の流れにお互い困ったとでもいう顔をしているのだろう。横から笑うようにかけられた声に我に返った。

「二人とも、何の話してるの？ さっきから、聞いてて……ふふふ、若いっていいわね」

「沢村さん」

可笑しそうに笑う沢村さんだが、沢村さんも若いでしょ。そう返しつつ、椅子を引く。「ありがとう」と笑ったまま椅子に座って、彼女と嵐山とあたしで会話が続投される。

とはいえ内容はまた変わって、部隊^{チーム}についてに戻った。二人とも誘いがあつたりはするが、どうするか迷っているらしい。能力的にも性格的にもどんな人とも上手くいくだろうけどなあ。

「むしろ、オペレーターになってくれる人を探す方が難しかったですよ。結局迅が見つけたんですけど、あたしが声をかけると断られたし……なんなんすかね、あれ」

「ええ、なんでだろ。色ちゃん、可愛い顔でもした？　ほら、よく太刀川くんとか迅くん^にに声かけられた時みたいな」

「……あたし、そんな顔してます？」

「んー、たまにしているな。こわいというか、嫌そうというか」

そんな顔してるつもりはないんだけど。訓練室外でセンパイに話しかけられる時ってほしい個人戦しろって言われるからかなあ。全然勝てないのにポイントとられるから、別に個人戦はしなくていいじゃんと思うんだけど。センパイは危機感出るだろ？　とか抜かすし。

迅は、まあ単純に煽りがウザい。何か必要以上に煽ってくるんだもん。ムカつく。……いやそれでも領いた手前、部隊^{チーム}は組むんだけどさ。何で、って聞かれたら……うん。まあ、正直それはそれで面白そうなのかもとちよつとは思ったりもするというか、なんというか。いやあの時だ**い**ぶ疲れてたのもあるけど。

別に、戦うという行為自体を楽しんでるわけじゃない。でも一応、ボーダーに所属してるからには戦闘から逃れられないわけで。忍田さんもセンパイも強くて参考にはし難いけど、二人の訓練は意外と楽しいし、少しは強くなってる自信はあるし。

……だからまあ、いいかなって。やれる幅が広がりそうだったし、広がったし、実際。

「つと、そろそろ帰らないと不味いな」

「そ。個人戦と話に付き合ってくれてありがとう」

「お疲れ様、嵐山くん」

「お疲れ様です、沢村さん。こつちこそありがとうございます、雪原。じゃあまた」

「ん」

時計を確認した嵐山が慌てて立ち上がり、笑みを残して行く。軽く手を振り返したあたしは、さてこの後はどうしたものかと思案する。「色ちゃん、私、考えてたんだけどね」

どーしましよつかと話していると、沢村さんがふと声を潜めて呟いた。真剣な空気に思わず居住まいを正しつつ首を傾げると、ついといった様子で彼女は苦笑する。……いや、なんかわからないけど反射で。

「実は、その内本部の運営側に転向しようと思ってるの。ほら、その……ね？ あれがあれじゃない？」

「ああ……なるほど。沢村さんと戦えなくなると寂しくなりますが、それは応援しないとですね」

「ふふ。ありがとう。すぐのすぐ、つてつもりはないんだけどね」
ははあ、なるほどなるほど。ラウンジにいる手前細かくは言わない沢村さんだけど、あたしには十分すぎるほど伝わったぞ。

忍田さんがもう少し人数が増えて部隊が上手く回るようになったら、今のように人のいない時間は現場に出るのではなく完全に指揮側に回ると言っていたから決めたのだろう。一昨日沢村さんと戦った時にそれらしい話をしたから、二日ぐらい悩んだとみる。

「まあ、いいと思いますよ。あたしは、チーム組んだっていつでもその後をどうするかなんてわからないし」

迅の目には、あたしが部隊を組んだままではないと視えているとみて間違いない。そこに至るまでに何があるのかなんてわからないけど。

とりあえず近い内にはじまるチーム戦の方を頑張らねばならない。でも、今の正隊員で最大何チームできるのかなあ。いやー、どうなる事やら。

とは言ってもあたしがやる事は変わらないか。とりあえず戦うだ

けだ。戦って慣れる。それが一番手っ取り早いというのが経験則、ともいえるし。

うん。まだ全然自分の中の答え？　というか、そーいのは出ないけど。ちよつとでも多く勝てるようになってやるよう頑張ろ。

テスト前の憂鬱

一月に一回くらいのペースで日直のノートは回ってくるらしい。防衛任務で空けていた授業について友人に聞きつつ書いてるあたしは、近くで騒いでいた男子からの言葉に手を止めては？ と息を溢した。

「だからさー雪原、付き合ってくれよ。顔いいしき、俺好きだぜ、お前の事」

「はあ？ こんなところで告白してくる時点でマイナス減点、お断りだよ松岳。公衆の面前で告白とか罰ゲームか何か？」

「ほれ見ろ言った通りじゃねーか」

「お前らが言えって言ったんだろ！ ……誰もいなかったらオツケーくれんのかよ」

あたしと友人の冷たい視線に負けず、ムスツとした男子。松岳が言い募る。何だコイツ。

たまたま午後の防衛任務がなかったから日誌をやってるだけなのになんて災難。めんどくさい空気が漂いだしたし、さてさて、どうしたものだか。

「悪いけどバイトで忙しいからムリ」

「……六見がいらないからって援交でもしてんの？ 泊まるところ転々としてるのか？」

「どこをどうとつたらそうなるわけ」

「そーそ。その考え最低だわ松岳」

「やっ、いやいや、ウワサだよウワサ！ そーいうウワサが流れてんの！」

ウワサ、ねえ。友人と目を合わせ、首を傾げる。確かに青葉の家にはよく泊まりに行ってたけど、そんな変なウワサになるような事があるだろうか。ボーダーに入ってから青葉の家に殆ど泊まりに行かなくなっただのが関係してる？ ……いやまさかそんなわけないでしょ。

友人が締め上げ、話を聞くとところによると。どうにも住んでるア

パートに夜帰ってるのを誰かに見られていたようだ。アパートに住んでる人は様々だが、まあぱつと見ただけじゃそこに暮らしてるかどうかわからないか。後はあたしの素行の問題？ いやあボーダーに入ってるの言っただけから確かにサボりが多いように見えるだろうし、先生に注意される程度にはメイクしてるからかな。地毛は元々明るい方なだけけど。

つまり、独身男の家に入り浸ってるというウワサが流れてると見た。転々としてる、の発言のところは最近旧本部で訓練してるのも関係してるかな。

「ありがとね、かおり。松岳たちには悪いけど、事実無根のウワサつかまされてんね。ウワサしたやつに違うって言っついてよ、そーいうのダルいから」

「お、おう……えーじゃあさ、雪原、二年の先輩とは付き合ってるの？

ほら前に一緒に帰ってただろ」

「それはアタシも気になってた！ あの先輩誰？」

「……………太刀川センパイの事？ そういうのじゃないね。何か知らないけど、犬とか猫みたいに扱われてるだけ」

めんどくさい話題だな。苛立ちを押し殺しつつ、肩を竦めて答える。皆くだらない事に夢中でバカみたい。恋愛のすべてを否定するわけじゃないけど、あたしに降りかかるそれはすつごくめんどくさすぎるにも程がある。

誰も彼もが恋だの何だのに現を抜かせるわけじゃないし、適性ってもんがあると思うんだけど。……ま、ボーダーに入らない限り彼らには関係ないだろう。

ボーダーが組織として発展途中の今、近界民ネイバーに襲われるような事があればまた話が違ってくるのかもしれないけどね。別に不幸になれと望んでるわけではないし、あんたたちはそのまんまでいいんじゃない？ あたしの分まで青春を謳歌してくれたまえよ。

忍田さんに初恋だなんだ、って言ってるのはラベリングとしてわかりやすいようにというだけだ。実際ふつうに好きだし。尊敬しかないし。

「よし終わり。付き合ってくれてあんがとね。明日のお昼、なんか飲み物奢るわ」

「おつかれー。ノートの分の奢りも忘れずにね」

「あはは、おっけ。じゃ、今日もバイトだし帰るね」

「毎日大変そうだね、がんば」

筆箱を鞆に入れて、脇に日誌を抱えて教室を出る。男子たちも別の話題に変わってるみたいだし、友人は部活中の彼氏のところにこの後は行くらしいし、うん。問題ないでしょ。

「せんせー居ますかー」

コンと職員室のドアを叩き、顔を覗かせる。担任はすぐに気がついてらしく、すぐに立ち上がってこちらへと近づいた。

目の前にやってきた眠たげな顔の先生に日誌を渡すと、前回と同じくダルそうにメイクの事を注意される。それ今言うの、とは言ってはだめだろう。防衛任務あったから今日会うの一回目だし。

「はあ……ボーダーの仕事にかまけて期末赤点とるんじゃないぞ。赤点の補習はなくならないからな」

「うっす。気をつけまーす。あとこれ宿題の提出っす」

「はいはいじゃあお疲れ」

「はーい。失礼しまー」

ふむ、期末か。そろそろ本当に期末テストが近いし、流石にちよつと勉強しなくては不味いだろうな。さつき先生も赤点は補習あるって言うってたわけだし、どうするか。

………センパイは聞いている話全然ダメそうだし、誰かに教えてもらうにしても誰かいるかなあ。いるといいけど、いなかったらラウンジで適当に勉強するか。アパートだと雑誌とか読みだして止まらないし。

同じように考えている学生は多いのか、中間テストの時よりもラウンジで勉強してる人がチラホラと見える。

ノートの写しもしなくちゃだし、個人戦も軽く終わらせたから後は適当な時間までやるだけだ。こーいう時誰かきてくれるといいけど。

しかしそう簡単にそんな事が起きるはずもなく。まったく進まな

い宿題にげんなりとため息を吐き出す。テスト前に宿題増やす先生は鬼畜だ。

「お前も勉強か」

「ん。……あ、風間先輩！ お疲れ様です」

防衛任務終わりなのか、トリオン体のままの風間先輩に目を輝かせる。風間先輩はセンパイと違って先輩らしい先輩なので、わたしが一方的に懐いている？ 人である。先輩はわたしの事を最初から特別何も思っていない空気をしているため、あまり話さない間柄でも悪くない空気だ。正直太刀川センパイよりは気楽である。いや、風間先輩も割と発言が飛ぶからたまにわけわからないけど。まあ太刀川センパイがいなかったらあんまり関わってないかもな人ではあるかな。

「お疲れ。手が止まってるが、解けないのか？」

「あは、正解です。いやあ、中間は一年の初テストってことでどうにかなったんですけど、期末はそうも言ってもらえなくて」

「そうか。……向かいの席使うぞ」

「どうぞどうぞ」

脈絡があるようでないようなあるような先輩の言葉に頷いて、もう一回プリントに視線を落とす。数学、苦手なんだよね。

中距離トリガーのアステロイドを最近上手く使えるようになってるけど、計算じゃなくて直感と感覚が八割を占めてるくらい。計算なんて殆どしてない。けど、曲がる弾になるやつができそうという話があるし、ちよつとはできた方がいいんだろうけどなあ。

「そいえば、迅が開発部と協力してできたあれ……スコープオン。風間先輩は使ってますか？」

「ん、ああ。弧月より自由の幅が広いからな。まだ完全に馴染んではないが、メイン使いにするつもりだ。チーム戦がはじまるまでには慣れる」

「テスト試用もしたんでしたっけ」

「そうだな」

頷いた先輩がじつとこちらを見てくる空気がする。何だろ。今日は特別アイシャドウ変えたりとかもしてないはずだけどなあ。……

いやでも風間先輩割と鈍いからメイクちよつと変えてもわからなそうなんだよね。見当外れなんだろうな、その考え。

「そこ、違うぞ」

「えっ……えっ……？」

話しながら解いてはいたけど、そこってどこですか？ どこからどこまで違うの？ え、こことここと……えっほぼ全部ですけど先輩!?

「公式を間違えて覚えてるんだろ」

「風間せんぱあい……！ 先輩に余裕があればもうちよい教えてください……!! いや受験生に頼む事じゃないのは承知の上なんすけど」とん、と教科書の一文に指を置いた先輩の手を捕まえるように握って頼み込むと、ちよつと呆れたように「少しならな」とのお言葉をいただけた。先輩あなたが神か。

そして太刀川センパイよりは教えやすそうだと呟いてるあたり、先輩とセンパイの格差よ。と思ってしまうわたしは悪くないだろう。やっぱ太刀川センパイはセンパイでいい。

そうこうして教えてもらっていると、あたしが勉強してるからか通りがかった学生諸君らも焦ったような空気を出していた。不良が真面目に勉強してるという絵面の問題か。あと風間先輩に教えてもらって羨ましいみたいな視線も感じるな。

羨ましいなら直接言ってこい。風間先輩マジ神だから余裕があれば教えてくれるはずだぞ。まあ今はあたしが居るんで控えてもらってけっこーですけどお！

「先輩、ありがとうございます！ また勉強見てもらったりしてもらえますか？ 風間先輩のお暇があればいいんすけど」

「ああ、構わない。お前の兄弟子と違って勉強する気があるしな」

「アハハ、どもです。なら風間先輩に見捨てられないよう頑張りませす」

薄っすら微笑む風間先輩にお礼に飲み物奢ると言えば、それくらいなら受け取ろうかという反応だったのでノートとかプリントとかをしまいこんで立ち上がる。

時間も少し遅いし、さくつと奢ってさくつと帰ろう。

「いや、送っていく。女子一人で帰すのは危ないだろ」

「えー風間先輩やっさしい……太刀川センパイにその優しさ見習ってほしいですね。じゃ、お言葉に甘えて送ってもらおっかなあ」

なんか変なウワサも流れてるみたいだし、と心の中で付け足して「行くぞ」と促す風間先輩を追いかけた。先輩、引っ張ってくれるのは嬉しいんですけど、あんまり先に行かないでくださいよ。先輩歩くの早いんですから。

「そうか？ 悪いな」

「む。謝られたら許すしかないからズルいつすよ先輩」

「そうか」

カラカラと笑うわたしに、いつも通りクールな風間先輩。一見すると不良女子にまとわりつかれてるようにしか見えないだろう。でも先輩気にしてないというかそういう考えしないだろうとは思ってる。

だからまあ安心していたわたしであるが、何やら家の周辺で嫌な空気が立ち込めている気がした。肌にとわりつくような、不快な空気が。

しかしすぐに何かが起こるわけでもない感じが、ひどく鬱陶しい。先輩は特に何か気にした様子もないから、たぶんサイドエフェクトで感じられるなにか、なのだろう。

はたしてそれは、そういう予感というのは忘れた頃にやってくるものなのだ。だがそれはまたその内の話である。

加古と化粧と東隊

コトン、と目の前に置かれたカフェオレの缶に、思わず首を傾げる。視線を上げた先には東隊の加古サンが立っていて、なおさら何だろうと思ってしまう。

何度か戦った事はあるけど、特に話した事はなかった気がする。入った頃と比べて最近は本部で戦う時は後が立て込んでるし、チーム戦の後も戦術面の話しかしないしなあ。それも時間がなくて簡単なものだし。

「ね、雪原さん」

「なんでしょーか、加古サン」

そのまま向かいに座った加古サンはすす、とわたしの前にカフェオレを押し出してにつこりと微笑んだ。

随分と親しみのある空気に対し戸惑ってやや素っ気ない返しをしてしまった。こういうのは気をつけた方がいいのだろうか、中々直せないな。性分だと開き直つちやえば話は早いのかもだけど。

「お願いしたい事があるの。このカフェオレはいわゆる内金ね。遠慮なく飲んじやつて。ちなみに嵐山くんチョイスよ」

「はあ……お願い、すか」

何をだろう。ランク戦以外の共通する項目が浮かばず困ってしまう。いやでもなんかそういう真面目な空気、とはまた違うようだし。

うーんと眉を寄せて考えてるあたしの顔つきは、たぶん悪い。機嫌悪いとか思われそうだなーとは思うが、加古サンは相変わらず笑顔だ。

「ふふ、簡単な話よ。私、あなたに化粧を教えてもらいたいと思って」
なんでも、あたしが乞われるがまま沢村さんとか沢村さん経由でオペレーターの誰かしらに教えた事があるのを噂で聞いたのかなんとか。頻度はそう多いわけでもないし、トリオン体になってしまえば化粧してるかしてないかはわからないものだが、まーテンションが違うといえは違う。メイクが上手くきまるとテンションが上がるものなのでわたしもその気持ちはわかる。

ちなみにわたしのトリオン体はメイクしてる時のを基準にしてあるからどっちにしろ一緒だ。たまに変えてるところがあるから差があったりするけど、それもまた楽しい変化と個人的には思っていたり。

「いいつつけど、今日は道具の持ち合わせないんでまた来週でいいです?」

「やった、それくらい構わないわ! 場所は……うちの作戦室でいいかしら。東さんには許可もらっておくから」

「ん。了解です」

連絡先教えてと言われるまま教えて、送られてきたスタンプにスタンプで返す。クスクス笑う加古サンは楽しそうだ。

「ところで、誰か待つてるの? 十分くらい前からいる気がするけど」「ああ、迅が本部に来るの待つてる感じですよ。ランク戦はしようかと思っただんですけど、今日はテンション上げられなくて。だからちよつと休んでるんですよ」

「なるほど。トリオン体のままなのもそういう理由ね。じゃあ暫くお話ししましょう。場所変える?」

「そうっすね……じゃあ移動します」

わたしの様子を伝わるものがあつたのか、加古サンの言葉にありがたいと頷く。基本的に一人だと遠巻きにされてる事が殆どで、曖昧で雑多な空気を感じるだけだ。稀にあんま好きじゃない空気とかもあるけど、それなりに親しい人がいたら気にならない。だがこの場合、加古サンはやや親しいとは言いがたいから……うーんでも、割と好きなタイプの人だから安心はできるな。

加古サンは加古サンで視線を集めるタイプの人だが、朗らかで影がない空気があつて。それが好きな空気だな、と思う。友人も何人かはこんな空気だし、親しみやすいというのがしっくりくる。

だからまあ、ラウンジの中心で見られるよりは移動して少しは減る方が楽というものだ。

「こないだ風間さんと帰ってるの見かけたけど、付き合ってるの?」

人の少ない角に移動してそういえば、と前置かれた言葉にはと一

瞬戸惑う。そんな事を言われたのははじめてだ。

どこをどう見たらそういう考えが出てくるのか不思議なところだ。いやでも前に太刀川センパイと付き合ってるのかとか聞かれた事あったし、親しくするとそーいうつもりがなくてもそーいうふうに見られるものか。どうでもいい話で自分には関わりの中かつた事柄だけにやはり変な感じだ。でも。

「いえ。風間先輩はほら、優しくして真面目だから心配してくれたらしいっす。先輩からしてもあたしがちっこいからかもですね」

「あーなるほどね。確かに、雪原さん可愛らしいから心配はしちゃうかも」

「ほんとは加古サンくらい……とは言わないでも、もうちよい身長欲しいんですよ。マジで」

そのままでも可愛いと友人からも言われるけど、欲しいものは欲しい。だって着る服に困るんだもん。ワンピースは丈が合わないし、スカートも長くて可愛い履きたいのに地面についちゃうし。上も胸がある分小さくても目立つし、大きめの買っちゃうと肩とか合わないから困るし。背がある人向けの服が多いからほんと困っちゃう。

だからこそあたしは化粧で可愛いから脱却したいのだ。加古サンみたいに美人系が理想。でも理想はあくまで理想なので出来てるかと言われたら微妙……。

でもでもでも、他人から教えてと言われる程度にはメイクできるから！ それでもじゅーぶんでしょ！

それはそれとしてやっぱ加古サン背が高くていいなあ。羨ましい。「ふふ、私的にはそのままでも十分魅力的だと思うわよ。気にしてる本人には嬉しくないかもだけど」

「んー……そりゃまあ褒められるのは嬉しいよ。最近は可愛げがないとしか言われないので」

「あらま。風間さんはそういうの言わなさそうだし、太刀川くんあたりかしら」

「ですです」

クスクスと笑う加古サンにあたしは肩を竦めて返し、暫く男性陣の

誰が気が利くかとかそういうった類のなんていうの。陰口とかではなくて、評価？　というか、なんというかを続ける。まあ隊員の中で一番気が利く人は東さんだろうという事に落ち着いたけど。

そうして話しているとあつという間に時間が過ぎて迅がやってきたから加古——なんか呼び捨てにしてみても言われたから加古、と呼ぶのだけど——とりあえず加古とは分かれた。うーんまあ本人がいなら良いのか。呼び方をそこまでこだわる必要もないし。

……迅が無駄にニヤニヤして鬱陶しいのはスルーだスルー。あんなのそういうところが嫌いだって言ってるの。あたしの何のつもりなんだかまったく。

という事であくる週。

連絡を取り合って互いの都合をつけたあたしは、東隊の作戦室を訪れていた。

「いらつしやい！　こっちにどうぞ〜」

案内されるまま座り、とりあえず適当に買ったお菓子を渡してメイク道具を出していく。加古の好きな色とかを聞いたり他にも色々話をしつつ早速メイクをはじめめる。途中途中雑談とかも交えたり交えなかったり。

「おー！　私がやるのと全然ちがーう！　面白ーい」

「一気にテンション上がりましたね」

「そりやそうよく」

飛び跳ねそうなくらい楽しげにするのを見て悪い気はしない。友人とか沢村さんとか本部のオペレーターの人たちだとかも似たような反応をしてたし、まあ見慣れてるといえば見慣れてる光景だ。いやもちろん喜ばれれば嬉しいけどね。

「ああ、いらつしやい」

「ども。東さん、と三輪。おじゃしてまーす」

「おかえりなさいーい」

「……………」

あれやこれやと話している内に時間が過ぎたのか、東さんと三輪が作戦室にやってきた。歓迎してる空気で笑って応じた東さんとは対

照的に、三輪はチラツとあたしと加古を見て奥の方へと消えていく。

あまりに無愛想を貫くからか東さんが苦笑しつつ謝る。加古も「ごめんねー」と言うけど、あたしは別に気にしてないと返す。三輪は割と誰にでもツンツンしてるからこんなものと思ってるし。もしかしたらあたしみたいなタイプが嫌いなだけなのかもだけど。

「ところで東さん、どーですか？」

「ん？ あー、バツチリ。決まってると思うぞ」

深く頷いた東さんはやや困ったような空気だ。言うなればたじたじしてるって感じ？

「東さんたちが戻ってきたなら、そろそろ帰りますかね」

「えー、もう帰るの？ もう少しくらいいてもいいのよ。ねっ東さん」
「そりやもちろん。暇なら訓練に付き合ってくか？ 二宮は少し遅れてくるらしいし、それまで」

「どうだ？」と聞かれたからまあいいかと思つて頷く。別にこの後どうせランク戦やって帰るだけのつもりだったし、折角誘われたならば乗ろう。

これが太刀川センパイだったら嫌と言うところだけど、東さんの隊の人とは正直戦う機会が少なかったから、この際だから色々参考にしたと思う。木崎さんも東さんは凄いやつてるし、実際よくヤバかったとか小耳に挟むしね。

「という事で少しだけよろしく、三輪」

「……………」

シカト。そして嫌そうな空気だ。わかりやすいな、三輪って。

隊長からのお咎めされてやつと頭を軽く下げてきたものだからちよつと笑えて加古と顔を合わせてしまうというものだ。彼女もちよつと可笑しそうに笑っている。

「それじゃ、じゃんけんして順番決めるぞ」

「はい」

「……………了解です」

「はい？」

東さんの掛け声に従つて手をグーで出し、三人に負けた。残念。と

いか順番ってなんのдар。そう思いつつ二人の決着を待ち、決まったところで説明されたのは。

二対一のシミュレーションをするとの事だ。東さんからはひとつ、積極的に支援をしてくれと頼まれたので素直に了承する。東さんの時は逆にアタッカーとして動き回ってほしい、と。なるほど。

「最初は三輪と雪原だ。相手は加古。準備してくれ」

「はいはい」

そうして何度か戦わせてもらったわけだが、中々楽しかった。普段は迅との連携だから立てられる作戦もまったく違うし。……あたしと迅は自分たちのサイドエフェクトに基づいた判断でそれぞれ動くから作戦という作戦を立てないのが特徴なので。だってお互いの攻撃も避けつつ利用する事もあるし……いやこの話はまた改めて。

やってきた二宮さんとも折角だし、と一度組んでやったけど物量押しだったのでやれやれと苦笑した東さんが大変印象的でした。でも普段わたしは全開で全弾を撃たないからそれはそれで新鮮だった事だけは確か。

また今度教えてね、と最後まで楽しそうだった加古に見送られつつ、東隊の作戦室を後にする。そして夜までの時間をわたしはランク戦で過ごすのだった。

ストーリーカー事件

八月某日。今日の午後は本部で訓練をしまくって精神的に疲れた。そんなある日の事だ。

「今日も遅くまでいるんだな」

「んー、風間先輩だって。……いやでもあたし、今月本部に来るの週一か二ペースですけどね」

「ああ。そうだな。一戦やって帰るか?」

「……じゃあそうします」

帰りたくなくてうだうだしてたけど、先輩が戦ってくれるならいい時間潰しになるだろう。うん、よし。頑張るぞ。

そう気持ちを切り替えて十回勝負を結局二本して、終わったら時刻は午後九時を指していたためいつぞやと同じように先輩が送ってくれると言ってくれた。からありがたく付いてきてもらおう。

最近では旧本部、所以は知らないけどとりあえず玉狛と呼ばれるそこに泊まっているが、たまに戻ってはどうもこうも……得も言われぬ嫌な空気が近づいている気がして落ち着きが悪いのだ。だから風間先輩がいてくれるなら安心してアパートの方に帰れる。……いや、どうだろう。帰ってしまったら何か起きるかもしれないし。起きない可能性の方が高いとは、思うけど。

「送ってくれてありがとうございました。ではまた来週、会えたら」「ああ」

入口の前でお礼にぺこっと頭を下げて、部屋までの階段をあがる。………なんだか、今日は、変だ。変な空気。

「ん〜……ん?」

そうして部屋の前で立ち止まり、嫌な感じと肌にまとわりつくような空気に、眉をひそめる。鍵は、閉め忘れてない。ちゃんと回る音がある。でもやっぱり、この空気は家の中から感じる。

気持ち悪い、空気だ。あまり感じていたくない類の。気味が悪いとも言えるだろうか。ゾワゾワとした悪寒がする感じで。

「……あー、ご飯買うの忘れちゃった。コンビニに戻るかな」

玄関の扉を開けたままそう独り言を発し、もう一度鍵をかける。そうしてゆつくりと平静を装って部屋から離れ、静かにかつ急いで階段を下りていく。

「雪原？ どうした」

「ちよつとコンビニまで付き合ってください、風間先輩」

わたしが部屋に入らなかつたのを不思議に思ったのか、どうやら先輩はまだ居てくれたらしい。その事実安心してながら、微かに震える手を押さえつけて小さく深呼吸。大丈夫。風間先輩は頼りになる人だから。

言い聞かせるようにそう考えながら、眩くように交番に行く事を伝える。それだけで察したのか、わかつたと言った先輩は「腕でも掴んでおけ」と手を浮かせわたしへと差し出した。

「……先輩がそんな事言うなんて意外」

「そう、か？ 不安そうだしいい手だと思つたんだが」

「んー、いや、しよーじきちよつと、気味が悪くてアレだつたんで……ありがとうございます」

手を繋ぐ、という可愛らしい真似をすればいいんだろうけど、安定が欲しくて腕を両手で掴まえる。腕を組んで胸でも押しつけてしまえばいいと友人あたりは言いそうな状況だが、そんなつもりもない。あたしが求めているのはそういうのじゃないのだ。安心感が欲しいだけである。

先輩は普段と変わらぬ空気なのもあって、先程感じていた空気が薄れていく。完全には消えてくれないのが意味わからないが、警察に相談すれば少しは変化するだろうか。

そうして交番に赴いたわたしと風間先輩は、アパートに空き巣が入つたかもしれないと訴えてもう一度来た道に戻つた。今度は人が増えたので先輩の腕はもう掴んでない。ちなみに警察はアパートの下で合流したのだが、計四人きてくれた。

最初は高校生の言う事だし、あたしがこう派手な化粧なものだから反応が悪かつたが、風間先輩もいたおかげである。先輩には足を向け

て寝られないね。

部屋の鍵を開けて無言で部屋に入ったわたしは室内にある嫌な空気にまだ何かがある事を確信して、目を細める。警察が手分けして扉を開けるが洗面所ではない。……部屋。部屋だ。

ベランダを確認しようとした警察とは別の一人の袖を引っ張り、クローゼットを指差す。ベッドの下も薄っすらと嫌な感じがするが、それよりもそっちの方が強い。

「雪原！」

カラ、と薄く開いたクローゼット。その、隙間から一気に嫌な感じが広がって、わたし目掛けて線のような空気が結ばれた。

後ろはベッド。——でも、逃げるなら……！！

「っ……！！」

咄嗟の事に驚いて止まっては、ボーダーの隊員としてやっていけない。それは先輩だってそうだし、警察だって同じようなものだろう。だからその結末はひどく当然の帰結を迎えた。

わたしは先輩と警察さんとは別の、テーブルの方の空気の間隙に身を捻り逃れ。部屋の入口近くにいた先輩は飛び出してきた誰某の足を掴み。そうして最後に、警察二人が倒れた誰某を押さえつけた。

一分もない攻防は、常の戦いよりも呆気ないものだ。いや、ドスツと鈍い音のしたベッドを見るに、割と危なかった感じはあるけど。

「大丈夫か、雪原」

「……大丈夫です。近^{ネイバー}界民をはじめて見たときより、怖くないので」

「そうか」

取り押さえた誰某を挟んで色々話した警察の影で、こっそりと先輩が近づいて耳打ちをした。うん、心配してくれた風間先輩には悪いけど、こわくは、なかった。全然、大丈夫だ。

それから警察が誰某との面識があるかとかを確認し、しかしまったく知らない男に手錠をかけて連行していく。残った警察の二人に現場検証として被害状況を確認したけれど、漁られたような形跡というより、なんか、隠れ潜んで待っていたような形跡の方がしつくりくる感じ。……それにはちよつと、恐怖を覚えた。あと、なんか、部屋

についでるポストに盗撮写真が何枚も入ってたし。……二十八枚も。気がつかなかったわたしを風間先輩は叱るけど、でも、仕方ないじゃないか。いや、ストーカーかは知らないしホントに顔も見覚えないんですけど。……鍵は、変えます。はい。流石にそこはします。わかってます。

いやでも、本当の本当にストーカー、なのか……？ 確かに家の周辺嫌な空気しかないなうとはここ一ヶ月弱思っていましたけども。でも、郵便受け基本的に見ないからこんな事になってとは思ってなかったわけでして。

「気がついた時に言え。機会はあっただろう」
「う……」

確かに先輩に送ってもらった日も感じましたけど、でもストーカーとか、そういうのされてるとは思ってなかったんで……。あ、いや、風間先輩が言いたい事はわかるんすよ？ 事が起きてからじゃ遅いつていうのも。だから最近玉狛に泊まる事が多かったわけでして。

「なら鍵を変えるまでは玉狛に泊まれ。それか本部に。女の一人暮らしよりはマシだろ」

「……はあい」

「自分で言えるな？ 林藤さんには俺から言っておこうか」

「ん。そこまで風間先輩にお世話になれないんで、大丈夫つす。ちやんと自分で話します」

でも今日は、流石に無理かな。あんまり遅くに行くと寝てる所を起こしちゃいそうだし。それにまだ検証とか話終わってないし。

「先輩は、帰っていいんですよ？ 心配されるでしょ」

「いや、お前が心配だからまだいる。だから安心しろ」

いや、そうじゃなくて。……はあ。先輩には敵わないなあ。

ポソポソ話してたのを聞かれているのはわかっているが、疲れが一気に押し寄せてきたからどうでもよくなってきた。もう先輩も好きにしてくれたらいいですよ。お茶とか今出せないからあれだけ。

でも風間先輩のおかげもあってすんなりと現場検証と他にも色々刑事手続？ だとかの説明をされたのも飲み込んで、とりあえず終

わり。らしい。のだが。

「雪原、親にお前の状況を説明したらうちに泊まらせろと言われたんだが来るか？」

「え」

だがしかし。いきなりその提案は非常に困ってしまうというものだ。まずもって異性の家にあがる事なんてない。ましてや風間先輩の家。玉狛は林藤さんたち何人かが居る場所なので誰がいようがいまいが関係ない。

そして先輩との関係はボーダーの隊員同士というだけで、特別何もない。のにそんな事したら勘違いどころではないのでは？ あたしこんなだし、先輩にめちやくちや悪いからお断りしたいのだけでも。

「そうか。なら俺が泊まるか」

「えっ」

いや、え、まつ、えっ？ 風間先輩、え……なん、なんて？

「？ 別に、何かをするつもりはないぞ」

「そ、そーいう心配は……風間先輩だし、しない、すけど……や、あの………何で？」

風間先輩に限っては無いだろうとは思うけど、いやほんとに何故その発想に至ったのだろう。先輩、マジでたまに思考回路が謎すぎて予想がつかない。自分ではわかりやすいと言うけど、感じる空気はいつも通りの落ち着きぶりだから冗談かもよくわからないのが正直なところだ。

だから聞いた、ら。

「――震えてる後輩を見捨てる程薄情じゃない」

思いもよらぬ言葉は、しかし大マジだと言わんばかりの空気の重みがあつて、閉口してしまう。

参ったなあ。あたしの語彙じゃ、先輩を負かす事なんて出来ない。

「わかったらどちらか好きな方を選べ、雪原」

「……………さ、さすがに、先輩の家は……勘弁してくださいさあい」

絞り出した言葉は本当に情けない声音だ。しかし「そうか？」なんて首を傾げつつ、寝るスペースはあるだろうかと確認する先輩には肩

をすくめるしかないだろう。そーいうマイペースなところがらしいといえばらしいけど。

なんかもう、疲れたからいいか。メイク落とそう。すっぴん見られるのめちやくちや恥ずかしいけど、恥の前に疲労が大きい。なんでもいいや精神になっちゃやう。投げやりというか。

「……風間先輩、ありがとうございます」

「ん、気にするな」

背中を向けて顔の見えない先輩の気負った様子のない声に、空気に目を閉じる。ずっと感じていた嫌な空気は、近界民^{ネイバー}を倒す時のように夢か幻だったかのように遠退いていた。

これなら指摘された微かな震えも、一晚経てばなくなるだろう。そうしたら、きつと、帰りたくないって気持ちもなくなって、睡眠もバツチリとれるはず。元々睡眠時間は短い方だけど、熟睡出来ないのが正直なところ辛かったから。

……今日は、ちよつと、熟睡まではできなさそうだ。眠れは、するだろうけど。

暑い日とアイス

暑い。トリオン体を解除したあたしはうんざりと呟いた。
ほんともちやくちや暑い。暑すぎて死にそう。

「あー！ 色、ずるい！」

ソファにだらつと寝転んでアイスを食べ始めたあたしに、小南が元
気よく指さしてそう言うが。そう言われると思って冷凍庫の中には
箱アイスがあるのだよこれが。まあ好みかは知らないけど。

「あ、ほんとだ。ありがとう〜！」

「どーいたしました」

むくれた顔を一変させて喜びいっぱいを空気にも押し出す彼女に
ちよつとだけ笑いつつ、シヤクと小さくアイスを頬張る。口の中がひ
んやり冷えて気持ちいい。

一人がけのソファに座った小南は幸せそうな顔をしている。あた
しももしかしたら同じような顔をしているかもしれないな。

「色は夏休みの宿題終わったの？ あと三日だけ」

「家帰って時間が余った時にちよいちよいやったよ。宿題くらいは提
出しないとただでさえ化粧でうるさく言われてるからねえ……ヤに
なっっちゃうわ」

担任は割と緩めなんだけど、それ以外の先生がね。ちよつとうるさ
い人が多いから。風間先輩に苦手な数学を教えてもらったのもあっ
て、期末は平均点とれてるおかげでちよつぴり見直された？ 感じは
するけど。

それはそれとしてやれ化粧がどうだのこうだの言われるからやっ
ぱりめんどくさい。あたしから化粧を取るとちよちやいしか言われ
なくなるから絶対にゴメンだ。化粧は昔から威嚇するものだって言
うし！ ……言わないかな？

「そうなんだ」

「そーなのそーなの」

聞いてきた小南はどうなのかと返すと、彼女も宿題は終わってるら
しい。えらいえらい。

褒めると得意げな顔をするものだから笑っちゃう。小南は本当に素直だ。あたしにもこういう素直さがあればいいのにと肩を竦めた迅が脳裏に浮かんだが、アイスを噛むことで消しておく。

暑いからイライラしてるのだろう。今思い出す事じゃなかったわ。「一休みしたらやるよー。今日一人だったから狙撃訓練だけしてたんでしょ？」

「おっけー。木崎さんがアドバイスをしてくれたのもあるからね。とりあえずも一個アイス食べてからで」

「えーお腹壊さない？」

「まあ大丈夫でしょ。トリオン体になったらとりあえずへーきだし」

確かにと納得した小南と一緒に冷凍庫を開き、奥に隠していたカツプのアイスを取り出す。はんぶんこにしようかと提案すれば、いちにももなく笑みが返ったのでやっぱお高めなアイスはまた別だなとしみじみ思う。いや箱アイスも割と高いけど。……その分量があるし納得のお値段だが。

「ごちそーさま！ 美味しかった!!」

「だね。また今度買うかな」

「その時はまた一緒に食べていい？」

「ん。じゃあ来週末ね。久しぶりの学校に疲れ切った後ならまた格別かも」

「やった」と無邪気に喜んで、そのまま小南がトリガー体へと切り替わる。やる気満々じゃん。アイスで元気出たからかな。

でもそれはあたしだってそうだ。冷めてきたし、訓練の疲れもちよつととれたし、いい具合のやる気。うん、このメンタルなら集中できそう。

夏休みが終わりなのもあって、訓練漬けの日々を打ち砕くように障害物多めの設定にした訓練室であたしたちはめっちゃくちゃ暴れた。そりやもう大暴れしてくらい、被害に目を瞑った暴れっぷりで。

小南はテクニクよりパワー重視だし、わたしは東隊の作戦室に赴いた折に二宮さんとやった弾丸の嵐の爽快感が忘れられなかったし、というのは言い訳か。でもマジで楽しかった。

今日の訓練は終わり二人してテンション高めに部屋を出て、証拠を無くすためにブースの設定を戻しておく。ログを見られたらバレル事だが、わざわざログを漁る暇人はそういないので問題ない。……いや、ゆりさんとかは見るとかかもしれないけど。

楽しかったねなんて言い合いながら、その後は夕飯を食べてわたしは使わせてもらってる部屋に。小南は家に帰って、他の人も休んだり帰ったりと様々だ。夏休みが終わるまでの後三日。そのままわたしは玉狛で過ごすのだった。

それから翌週の日曜日。時刻は午後三時。

今日も今日とて休憩としてアイスを食べ午後である。美味い。

でも迅がいなかったらもつと美味しくいただけただけだったけど。

「いや、おれのサイドエフェクトが視たからつい」
「つい、じゃない」

小南にあげたのとは別のアイスを食べていたのを横から掴んではくつと一口持ったかかれたのが先程の話。ジロリと睨みつけてもへらりと笑うこの男は本当にムカつく。人の大事なアイスを食べやがってこのやろー……………。

「迅って、なんか色によく……………なんかこー、くつつくわね。なんで？」

「え？」

「は？」

横のソファに座ってた小南が、唐突な発言と共にこてんと首を傾げる。「違った？」と彼女は言うけど。

いや、ええ……………？ そうかなあ……………？

でも確かに、からかうためか知らないけどよく斜め後ろくらいに立っては肩を叩いてきたり両肩をこう、巻き肩をなおすみたいにぎゅつと掴んできたりするけど。ウザいから無視してたの、そろそろ何か言うべきだろうか。反応したらつけあがりそうで嫌だったんだけどな。

でも、うん。次やられたら真っ先に両手切り飛ばそ。たまのハンデも許されるべきでしょ。

「そう、かあ……？ おれそんなにベタベタしてる？」

「はあ？ あたしに聞く事なの、それ。センパイと同じくらいウザいとは思ってるけど」

ソファの後ろから身を乗り出してマジマジとあたしの顔を見てきた迅に嫌な顔を返しつつ、アイスを隠す。もうこれ以上くれてやるつもりはない。というか冷凍庫に残ってる方を食べる。

「よつと」

「なんで隣に座るわけ？」

「体勢が辛くなってきたんだよ」

あつそ。隣でぼんち揚げを食べだした迅にため息を吐き出して、小南にこんなもんじゃないのと返す。決して考えるのがめんどくさくなつたわけじゃない。

「それもそっか」と小南はいつもどおり簡単に受け入れているので、それでももういいと思うし。

「ねー色、今日はどんな設定でやる？」

「ん。小南の好きにしてくれたらいいけど、障害物が多い方がいい気分ではあるかな」

「オツケーー！」

それ以外は特にないと伝え、残りのアイスをさつきと食べる。小南となんだかんだと話してたから割と溶けてきてるし、ここからは特にはやさが大事。

大事だけど、相変わらずよくぼんち揚げ食べるよね、迅って。毎日食べて飽きないの？

「不思議と飽きないな。色が化粧するのと同じくらい食べないとか考えられない」

「それだけ食べて贅肉つかないのは羨ましいわこのやろー」

「いてー！ ちよ、いきなり脇腹掴むとか酷くないか、って、イタタ！ 痛いって色〜」

謎に威張る迅の脇腹を抓むけど、うん。やっぱり贅肉なんてない。何故だ。あたしはこんなに食べたなら絶対変に肉つくから嫌なのに。痛いとか言う割に笑うところもムカつくし、どうしてくれよう。

……まあ、いいんだけどね。別に。たいして気にしてるわけでもないし。

「いやー、おれだつて一応気にしてるんだよ、これでも」

「一応つてなによ一応つて。ね、小南」

「え、うん。気にしてる割にはレイジさんみたいに鍛えてはないよねー」

「……レイジさんまでいかないにしても筋トレくらいはしてるって」

適当に話しつつ流れていく会話はまだ来てない人の事やら本部での出来事やら防衛任務についてやらと移り変わっていく。本当に内容なんてささやかなものだ。それは、平和に近いからこそ、なのだろうか。

もしあの日のような近界民ネイバーの侵攻が再び起きたら、その時のあたしはどうなってるのか、どうしてるのかも想像がつかない。迅の様子を見るにそんな事は……当分は起きなさそうだけど。いや、どうだろう。もし近い内に起きるとしても、迅はわたしに言うかな？ 言ってほしいとか、頼りたいとかではないけど、純粹な疑問だ。

他人に求められるに足る力量とまではいつてないように思うけど。うーん……いやでも、ちゃんと強くはなってるつもりだ。少なくとも正隊員になったばかりの奴らには負けるつもりはない。でも、いや、飛び抜けた奴にはまあ負けたりはするかもだけど。

ま、どうでもいい話か、それは。わたしは自分がまだまだ弱いのはわかってるし。うん。

「よーしー・じゃあはじめるわよー！」

小南の元気いっぱいな声に応じて、弧月を握りしめる。何ヶ月も握ってしっくりくるようになったそれは、その分だけ強くなれている証になるだろうか。

そうだと、いいな。弱くたつて、サイドエフェクト以外の才能なんてなくなつて、わたしに出来る事が増えているというなら、それで。期待に少しでも足るのなら、もっといいけれど。

なんて。なんか柄にもなくまた考え込んでたかな。集中集中中。

かける言葉は

迅と部隊チームを組んで早二ヶ月。わたしの戦い方はこの二月で随分様変わりしていた。弧月メインから中距離メインに、時々遠距離から迅を支援する形だ。防衛任務では中・遠距離で片がつけばそれでよし。近い位置にゲートが発生したなら弧月で切る、みたいな。どの距離でも迅は当たらないし、支援というよりは牽制の役回りの面が強くはあ
るけど。

器用貧乏だ、とは東隊の二宮さんからの言葉で。しかし東さんからは完全にものにしたら戦術の幅がぐんと広がるから迅とのコンビはもつと凶悪になるなど笑われ。太刀川センパイは兄弟子に内緒でポジション変えるなんてよくないと何故か怒られた。でも忍田さんは笑って許してくれたので最高の師匠すぎて好き。

他にもまあ色々言う人はいるし、どーでもいい事をあげつらう人もいたけど、あたしの心に響かないからなんでもオーケー。

「ちよ、今おれの腕を狙っただろ、色」

「狙ってないけど？ あわよくば当たればいくらか思っ
てないし。てか当たらないだろうし。そもそも、もう防衛任務交代の時間だからたまにはお遊びもアリでしょーよ」

「色のお遊びはたまにマジだから困るんだよな。なんでおれにはそんなに冷たいんだ？ ハッ、この二ヶ月の友情は嘘だったのね……！」

「うっぎゃ」

いや心底からウザい。あたしにその茶番を付き合わせないでほしい。……この悪ふざけを他の人にしてるのは知らないけど。

というか友情とか言うけど、そんな友情あるか？ ないでしょ。冗談くらいは言うけど、友情ではない。適度に離れたい同僚というのがいいラインだ。まあ部隊組チームんでる以上は近い位置にいるけど。でも、それだけ。競う相手、多少協力するくらいの相手、が丁度いいバランスか。

まあね。8月は宿題とか防衛任務を除いて殆ど玉狛で半分以上の時間を過ごしたわけだけど。その分そこらの隊員よりは迅と玉狛に居着く人たちの事は知ってるし、相応に軽口を叩く。が、だからといって迅と仲が良いというのはホントに違う。

「冷たいのが嫌なら、忍田さん並みにカッコよくなつてから出直して」「ええ〜おれじゅーぶんカッコよくない?」

「太刀川センパイと同じ事言わないでくれる? 自分で言ってるようじゃ世話がないね」

そう切り捨てて、周りを見渡す。嫌な空気はないし、今日は二体で終わりかな。あんまり数が出て困るけど、出ないのは出ないので稼ぎに影響するのが悲しい点だ。まあ別に構わないけど。お給料が少なかったら普段の食事のグレードが下がるだけだし。

「なあ色。今日この後どーする」

「本部でランク戦でいいんじゃない。太刀川センパイのメッセージが毎日毎日うるさいし」

「ああ……八月の間は玉狛に殆どいたからか。本部に行ってもチーム戦だったし、うん。確かに、ちょっと太刀川さんとサシで戦うのが減ったもんなく」

やれやれだと口だけは言っているが、その空気は楽しそうだ。どいつもこいつも戦闘狂かよと思わなくもないが、口に出してしまおうと何を言われるかわかったものじゃないから呆れた目で見ただけである。とりあえず、太刀川センパイは昨日ラブコールと言う名のランク戦するぞというお誘いをしてきたので今日はいるだろう。

あたしは絶対に戦いたくないから迅に押しつけて、アステロイドのポイントを取ろう。狙撃の方はコツコツとしかやりようがないから、次の訓練ではもう少しポイント取りたいな。木崎さんと東さんを越す未来は見えないけど。

「お! きたな!」

「よし迅、センパイの相手は任せた」

「はいはい」

期待とやる気に満ち溢れた空気をする太刀川センパイの目に、わた

しはげんなりと。迅は苦笑をした。それを意に介さずどっちでもいいしなんなら纏めてでもいいと提案してくるが。正直ガスを抜いてないセンパイと戦うとめちやくちや疲れるからやりたくない。から、なんだかんだセンパイとかと戦うのが好きな迅に押しつけておく。

「あたしは……と、柿崎。今暇？」

そうしてわたしは戦える相手を探して視線を巡らせ、どうしようかなど迷う空気をした柿崎を見つけて声をかける。柿崎は少し迷った後に「いいぞ」と頷いたのでさっさとブースに入って戦闘に入る。

そうして一回戦って、柿崎と同じ隊である時枝がやってきたので三人でもう一回戦う。センパイと迅とやるのは嫌だが、この二人なら楽しいものだ。何せ煽り合いがない。というか煽る必要がない、というか。

「やっぱり雪原先輩強いですね」

「そ？　ありがと。時枝も柿崎との息バツチりだから焦っちゃった」

「避けといてよく言うよ」

チーム戦というわけでもない個別の戦いだからどちらを狙ってもいいわけだが、時折位置の問題で協力する事もある。今回は三度そういうタイミングがあったから、まあ中々面白い試合になったのではないかと思う。うん、实际いい感じだったし。

「色、空いたならやるぞ」

「うわっ！　……センパイ、頭掴まないでって言ってるでしょ。ふっーに声かけてくださいよ」

「おーそうだな。柿崎、時枝、さっきのいい戦いだったぞ」

「ありがとうございます、太刀川さん」

いつものように頭を握ってくるセンパイに抗議するも、センパイはもとより見慣れている柿崎も聞き流してくる。時枝が唯一困ったようにしてるのが救いだが、まあうん。年下に頼るつもりはないし、嫌ではあるけど慣れてるし、手の甲を抓ってやりながら離されるのを待つ。トリオン体だしダメージなんてないだろうが、抵抗の意思は読み取られているはずである。

「じゃあまたね、柿崎、時枝ー」

「はい。また戦ってください、雪原先輩」

「おう。太刀川さんの戦い頑張れよ」

後ろから聞こえてきた「太刀川さん、やらないならまた後でいい？」という迅の声に機敏に反応したセンパイに肩を竦めて、二人に手を振る。それぞれ違う種類の笑みを向けてくるのを見つつ、わたしはそのままセンパイに引きずる……というか何故か脇に抱えられ、ブースに放り込まれた。

乱暴だと思わないでもないが、この扱いも悲しい事に慣れたものだ。それはそれとして女子の扱いを勉強してこいと言いたいが。後で月見に愚痴ろ。

「こないだのチーム戦じゃやられちゃったからな。今回は二対一でも負けねーぞ」

「いや、これ一対一対一で設定してあるからおれはどっちも狙っていきますよ?」

「ふーん。じゃ、あたしも遠慮なく二人の頭狙ってく」

「それはそれで楽しいな!」

どうせ迅が抜けてもセンパイと戦う羽目になるだろうし、と小さく息を吐いて二人へとアステロイドをぶちかます。ほぼほぼ真っ直ぐにしか飛ばないから、まあ避けられるのは承知の上だ。

だからこそ二人から距離を離し、適度にアステロイドを撃ちながらトリオンを削っていく。その内痺れを切らしたセンパイが迅を置いてこつちに来そうだが、想定内というものである。

何回も戦つてると時々変なタイミングで息の合う二人にキレてしまったりするが、割と必死に捌いて反撃したりやられたり、不意打ちに成功したり、普通に避けられたり。散々な戦いと爽快な戦いとが入り混じって混沌としている。センパイは引くほど笑ってるし。こわ。迅はいつも以上にニヤけてるし。うざい。

でも、それはそれで楽しかったのだろう、と。振り返れば思える。いや思い返すとその分ムカつく事まで思い出したりするけど、うん。嫌なわけでは、なかった。それだけは間違いない本音のひとつだ。

だからこそ、わたしは。

「じゃあ部隊^{チーム}解消ね。あんたなら黒トリガー？　だっけ。他の候補がどうあれ、そこまで本気なら解散でいいでしょ」

ブラックトリガー、とかいうめちやくちや強いトリガーを使う候補に選ばれたと真剣な顔をして言ってきた迅にそう返す。彼のことはどこまでいつてもムカつくしウザいし、めんどくさいやつだと思うけど。別に嫌いとはまではいかない。そうじゃないとここまで……半年近く？　ずっと組んでないでしょ。まあ利点もあったからだけだよ。

なら、悩むくらいなら突き放す方が迅のためってもんでしょーよ。あたしは別に、いつ解散したって構わないと思ってたし。

争奪戦になるとかいうそれに、迅が負ける事はないだろう。なにより太刀川センパイは選ばれてないらしいから。

「色は、どうするんだ」

「……本部に戻るわ。玉狛^{こま}は楽しいけどね」

「いいのか」と言う迅に「いいも何もないでしょ」と首を振る。部隊を解散するなら趣味に付き合う必要もなくなるし、悪い事でもないと思う。小南は寂しがりそうだけど、別に会えなくなるわけでもないのだから。

それに、本部に戻ったら忍田さんがいるし。センパイの訓練に付き合わされる確率は上がるのは嫌だけど、それ以外は特に悪いところはない。玉狛とは違ってうるさい視線とか空気とかはあるかもだけど、それだっていつもどおりだ。

「迅悠一」

「ん」

だからこそあたしは、それがいいと判断する。

「わたしはあんたを引き止めたりなんかしない。あんたが本気でそうしたい、そうするべきだと思っっているならやりなさいよ。特別応援はしないけど。ま、負けたら笑うくらいはしてあげる」

応援しなくなっただって、本気を出したあんたならどーにでもできるでしょ。内心でそう続けて、目を見開く迅の首を刎ねる。シミュレーション内だからすぐに戻ったが。

呆気にとられた顔をした迅は、すぐ様苦笑いを浮かべて頭を搔く。

「……敵わないなあ」

心底からそう思ってる、といわんばかりの小さな呟き。しかしあたしは、そんなものに反応を返さない。恥ずかしいとかじゃなくて、なんていうか、ふーんって感じだから。

「あつそ。ま、結果が出るまで解散はしないでいてあげる」

「ああ……ありがとう、色。おれが視た以上に長くチームでいてくれて——楽しかったよ」

笑う迅に「はいはい」と適当に流して、手元に弾を生成する。それだけでこの話を終わりにしようというのを読み取ったのか、はたまた未来のあたしに何か言われたのか。

迅は吹っ切れたようにひとつ笑い声を上げて、スコープピオンを構えた。今まで見てきた中で、正直一番ムカつかない笑顔だったと思う。

揺れる心よ

愛とか恋とか、正直なところあたしにはわからない。いや、どんな空気を向けるものかは知っている。

親から子へと向けられたあたたかな空気。子から親に全身で伝える喜びの空気。恋人に向ける執着に似た二人に渦巻く空気。その中にも怒りも悲しみも苛立ちと苦しみも、色々な種類があった。それを分類してラベリングした結果として。

わたしに残されたのは、愛のない家族というラベリングの冷たいものだけ。母から流れてくるのは氷でできた針の山みたいなのに、つんつんとげとげとして痛い、きらいという空気。父から流れてくるのは苛立ちに近い無関心で関わるなという凍えるような空気。

そんな両親の元で育ってこれなら、まーいい方なんじゃない？とは思わないでもないが、まあこんなチカラがあるなら、そういうものなのかもしれない。

もしかしたらそのチカラも持って生まれたから、愛される事がないのかも。……なんて言うのは、下らないたればの話。だってそもそも、二人の間にある空気は決してよくはないものだったもの。

少なからず母が父に向けていた空気には悲しみも混ざってた、と思うから愛の残り滓か、恋をしていた過去の残り滓でもあったのかもかもしれないけど。

でも結局、あたしに向けられた空気はどこまでも冷たく淀んでいたのだから、愛なんて理解できるものでないのは仕方のない事だろう。

「……………っ！」

だから。いや、それなのに。愛なんてない、愛もしない、子に向ける感情など無関心だと思っていたのに。

父は、父親は。あの人は。

「――」

こんな温かな空気を、こんな扉越しに感じさせる人なんかじゃない、はずなのに。キャツキャツと喜ぶ腹違いの弟の声に、掌がじくり

と痛んだ。

なんだ、と見下ろせば手が白く染まっていた。それだけ強く、握りしめているのだろう。いたのだろう。

「ハ、……」

唇から溢れた声は、どんな空気を持っているのだろう。あたしのサイドエフェクトはあたしの感情を、吐き出す空気を、読み取らせてはくれない。昔から、そうだ。そうだった。

ただ漂うそれらをわたしの脳は勝手に読み取っていくばかりで、それこそ本当に小さな頃は自他の境界は曖昧だった。けれど父と母の空気がわたしの境界を鮮明にしていたのだから、救いようがない。

こんな、こんな空気を知ってしまった事も。

どうしようもなく——救いがたい。

「……………」

くるとマンションのドアから背を向けて、エレベーターに向かう。ゆっくり、足音を立てないように。静かに、唇を噛み締めて。

そうして一階へ下りてマンションを出たわたしは、静かな歩みをやがて息切れするほどのスピードへと変化させる。

はやく、はやくはやく、あの場所から離れたかった。向かう先なんて考えず、ただ遠くへと逃げてしまいたかったから。

走って、走って、走って。疲れて、歩いて、ああ。ほんと。

「バカみたい」

自然と落ちた言葉は、自分にサイドエフェクトが使えなくなっただけの程度、わたしのの中の本音だった。

あれほど期待なんてしてない。どうでもいいと割り切ってる。なんて、思ってたくせに。

唯一残された繋がりも、父親に否定されたようだ。いや、否定なんてあの人はしてない。だってそもそも、肯定さえも曖昧なものなんだから。存在を認めていても、あの人にとってはきつと母が勝手に産んだ子供なんだ。……かつて母が、言ってたように。

「あたし、は……」

両親が望んだ子供ではないって、うん。わかってる。わかってる。

わかってる、から。

もう二度と期待なんてしない。もう二度と、父だって、パパなんて、呼ばない。もう二度とあの人たちの領域になんて近づかない。近づきたくない。近づけない。

だって、傷つくだけだって。わかってる。青葉に押しつけられた傷が色濃く残るこの心を揺らすんだって。わかっていた。

「……………トリガーオン」

いつの間にかやってきたボーダー本部の入口で、トリオン体に換装する。宵口の、学生が帰りだしたブースに無言で入り込んで、個人ラック戦へと飛び込む。

相手が誰だろうと、話しかけられようと、無視して切り込み、時にアステロイドを打ち込んで、更に弧月を振るう。

今のわたしに必要なのは無だ。無心。無我。無私。そーいう言葉が当てはまる程、戦う事で雑念を振り解く。

「—————！」

「……………」

耳に届くものはノイズだ。今のわたしには必要ない。サイドエフェクトが見つける空気の間隙に殆ど分割してないアステロイドを放つ。振りかぶられたスコープピオンの空気の揺らぎに弧月を差し込む。足りない。戦いが足りない。無には遠い。

まだ、もつと、心を虚ろで満たして。感覚を研ぎ澄ます。そうすれば、空気の色なんてどうでもよくなる。動く。動かない。狙いは上。後ろ。首。頭。

いつもよりも理解できる流れに、しかし間違はなく、躊躇わずひとつずつ潰していく。腕。誘いは避ける。首。弾が弾けた先を読んで避ける。まだ。足りない。

「雪原」

両腕が飛んで、視界に空の映像が映った。だめだ、今回のこれは負け。サイドエフェクトに頼りすぎだろうか。いや、でもそれはあたしの強みだ。あたしを構成するものなんだから、もつと利用しなければならぬだろう。

今回の場合は相手が一段早かっただけ。そうなると機動力が足りてないという事になる。開発部に聞けばそういうトリガーが出来るだろうか。

「雪原」

「……、……？」

しかし、何故。何故トリオン漏出を待っているのだろうか。

ぱちり。瞬く事で少しだけ我を取り戻す。

「……………風間先輩」

じつところこちらを見下ろしてくる知った顔に、首を傾げる。はて、何時から風間先輩と戦っていたのだったか。集中しすぎて、記憶がない。

「ブースを出す。話がある」

「……………りょーかいで——」

す。最後まで言い切る前に、視界が切り替わる。軽く腕を伸ばしたわたしは、やや落ち着いた心でブースを出た。……………そんなに暴れた覚えはないが、何時もより遠巻きに見られてる空気がする。

「あ、風間先輩。お疲れさまでーす」

「……………ああ。行くぞ」

「うつす」

いつものようにを意識して言葉を返す。大丈夫。うん、大丈夫そう。もうわたしは、大丈夫。あんなに乱れていた心がしんと静まっているんだから。

ただ、思うに。……………もうマンションには行かない方がいいのだろう。最低限、連絡を取ることは可能なんだから。それに、あたしだつて自分の事だけはちゃんと面倒見えるし。何にも、変わらない。変わりようのない話だ。

「何がいい？」

「え。……………あー、えっと、お茶で」

「わかった」

ガコンと取り出し口に落ちたペットボトルを差し出してきた風間先輩にお礼を言つて、受け取る。さて、話とは何だろうか。そう思っ

だが、まだ違うところに行くらしい。歩き出した先輩を追いかける。

「ん。様子が可笑しかったからな」

「はあ……えーと、ご心配おかけしました？　ちよつと無心になりたかったので、集中しすぎちゃってみたいで」

「そうか。じゃあ忍田さんの前でも同じ事が言えるな」

え？　なんでそこで忍田さんなんですか。風間先輩の思考、前からほんと意味分かんない。

「？　いや、簡単だろう」

どこがつすか。

「サイドエフェクトでわかるんじゃないのか？」

「いや、まあ」

そりや、心配してくれるんだなーとはわかりますけども。でもそこで忍田さんを出すとは思うわけじゃないじゃないですか。いやほんと。何故。

「思い詰めたような顔をしてるんだから、今度こそ大人に頼った方がいいかと思っただけだ。雪原は忍田さんの事を信じてるだろう？」

「ええ……そりやあ……お師匠ですから……」

「俺でよければ聞くが、手に負えない話の場合もある。それなら最初から大人に頼った方がいいだろう。俺もお前も、まだ高校生だしな」

そう言われましたら、ぐうの音も出ないというものだ。風間先輩は心からそう言ってるんだろうなっていうのもわかるし、実際先輩に話したところでどうにでもなるわけじゃないし。……だからって忍田さんに言っ解決する問題じゃないけど。

でも、まあ心配させてしまったのは、本当だ。それなら少しは、何かを返すべきなのだろう。

「失礼します。忍田本部長、少しお時間をいただけますか？」

「風間？　に、色。どうしたんだ、こんな時間に」

忍田さんが手を止めて、顔を上げる。あたしと風間先輩が一緒にいるのはテスト前とかで見られたので然程珍しいとは思っていないのだろう。驚いた空気は感じない。

そういう事に気がつくのと、やっぱり忍田さんって忙しいのによく見

てるなあと思ってしまうというもので。……嬉しい事、なんだな、とも思う。

「雪原の様子が可笑しかったので連れてきました。訓練に集中したいのかと思っていたのですが、少々度が過ぎているようだったもので」「ふむ。……何か、あつたか?」

詳しく聞かなくても、何か察するところがあつたのか、忍田さんから心配そうな空気が流れ出た。横からの空気も、同じだ。

同じだからこそ、やはり話せるところを話すが、一番収まりがよいのだろう。……自分の本音はわからない。けど、それとは別に嘘をつくのは、昔から嫌いだし。

椅子に座つたらいいと勧められて、先輩に押し込まれながら小さく息を吸う。大丈夫。大丈夫の、はずだ。

「ん。先輩、話すから、突かないでいいです。……忍田さんにも、風間先輩にも、全然関係ないドーでもいい話ですけど」

そう前置きして、ちよつとだけ切り口を悩む。話すべき、なのは。「……あたし、あんまり親と仲良くないんです。なんていうか、お互い関心がないというか。だから、母が死んで父が再婚したんですけど、それもドーでもよくて。でも、なんか……今日は色々むしゃくしゃした、ので。だからちよつと、集中しすぎた感じですよ」

嘘は、ついてない。いや、どうでもいいと思っていたのは、嘘なのだろうか。こんなに動揺してるのだから嘘に、なりそうだ。そんなつもりはないのに。

じつとわたしを見て何かを考えた忍田さんはふと立ち上がり、座るわたしの目に視線を合わせてきた。

「無理はしなくていいんだ、色」

「い……や、無理とかは、してない、すけど……忍田さんの、そう、見えます? 風間先輩も?」

ふたつの声から、肯定が返る。……ホントに、そうなのか。無理してるとか、そういうつもりはないのに。他人から見るとそうって事は間違いでは、ないのだろう。自分の事なんて、自分の空気なんて、あたしにはわかりっこないからこそ。

「本部に泊まれる部屋を、用意してもらえ。そもそも雪原、お前のアパートはあんな事があつたんだから危ないだろ」

「うっ。でも、風間先輩。それは一応終わった話なので」

「アパート？ 何の話だ、風間」

わーしまったあ!？ 先輩先輩、それは話さないでいいです！ アパート住まいなの忍田さんとかボーダーには内緒にしてるのに……！ ま、待って下さいせんばーい！

止めようとするも終わった事と完結させて特に話してない事に気づかれたのか口を手で抑えられ、ストーリー事件の流れを説明された。そしてあたしはめちやくちや怒られた。それはもう火がついたように、真剣に、懇々と。

もういつそこつちの方がダメージ大きいまである怒られ具合にしよんぼりだ。だって忍田さんに怒られるのつらい。風間先輩は言っていないお前が悪いといわんばかりに呆れた空気を出してるけど、違うし。終わった話だから忍田さんの耳に入れる事じゃないだけだもん。わたし悪くない！ ……でも実は玉狛の人たちにも言っていないのバレたら流石にもう少し怒られそうだな。

「色」

「ハイ、スミマセンです……」

もつと頼れと言われてしまえば返す言葉もございません。次があればちゃんと言報告はします。

しよんぼりしつつ反省の意を示せば、忍田さんはすっかり困った顔でまったくと呟いた。うう、面目次第もございません。しかしそれ以上は怒られることなく、本部に泊まれる部屋を用意するとの話で締めくくられた。一応、職員の中にも寝泊まりする人もいるから部屋を用意する事自体は問題ないらしい。なるほど。

忍田さんの言うことも、心配も、もつともな事なので素直にその案を受け入れます。はい。これ以上ないってくらい良い選択肢なのもわかってるし。

しよげながら頷くと、風間先輩も忍田さんもホッとした空気を出すのをとでも申し訳なく思いつつ、くすぐったいもので満ちた胸を押さ

える。揺れていた心は、虚ろな影を小さく窄めてすっかりと落ち着き
を取り戻していた。

お呼び出し

会議室に呼ばれた事に内心こわ、とか考えつつわたしは扉をくぐり適当に調べた言葉を述べる。視線を上げた先の真つ直ぐ前に座るのは、本部総司令の城戸さんだ。こうして割と近くで見るのははじめてな気がする。

「雪原色隊員」

「はい」

なんだか真面目くさった空気に何かやらかしただろうかと考えつつ、ちゃんと聞く姿勢を見せるべく背中を真つ直ぐに伸ばす。……もうつらい。

「君は迅と部隊を組んでいた。だが、迅は黒トリガーの所持者となった事で、部隊の離脱を命じざるを得ない。それは、わかっているか」
「あ、はい。迅から聞いてます、大丈夫です。それで問題ないです」

なんだ、あたしがやらかしたとかじゃないんだ。そう安心して、大きく頷く。確かにその説明は本人から聞いていた。

だからこそわたしは自分で解散する事を選んだのだ。本気を出した迅なら師の形見だとかいう黒トリガーを掴み取るのも簡単だろうし、という思いもあったし。

でもそういうわたしの考えなど誰も知らないわけだから、なるほど。傍目から見たら邪魔になるのかな、あたし。……いやいや、忍田さんに邪魔とか思われたら終わりだけど。色んな意味で。えっ嘘、どうしよう。あたしは自分にフレンドリーにしてくる人以外は基本的に塩対応みたいなもんだから問題視されてたのかな実は……。

「……不満はない、と。そうか。では君の今後の扱いについてだが、君の隊に所属しているオペレーターからも開発部への転属願いが出されている。これについては知っているな？」

「え、はい。何か元々そーいうのに興味があるとは……で、まあ解散するなら希望出してみたらいいのではと思って……」

「つまり君から提案したのか」

「まあ……はい。そう、ですね?」

いまいち意図が読み取れず忍田さんをチラツツと見るけど、真面目そうに頷かれるだけだ。そんな忍田さんもカッコいいよ、うん。

でもなー、何だか困っちゃうなあ。こういう風に観察されるの、あんまり好きじゃない。

「では君自身がどうなるのか、という希望は?」

「え。選べるんですか? てつきり普通にB級に戻されるものと思っ
てたんすけど」

希望とかそういうの聞いてくれるとかは特に思っ
てなかつたから驚いてしまう。いやだって、A級になったとはいえ部隊解散しちやつたら一人になるわけだし、降格かとばかり思っていたから。

城戸さんの口振りではまるでそのままA級に残されるみたいだ。

「A級としての実力は確かなものだ
と判断している。ソロ隊員がいるという実例があるのもまた望ましいため、君にはA級ソロとして是非活動してもらいたい」

「はあ……」

「とはいえ、基本的には今までと何か変わるところがあるわけではない」

給金設定は今の固定給プラス出来高と変わらない事。防衛任務の際は他チームに組み込まれる事もあるだろう事。でも全距離に一応実績がある事からソロもままあるだろう事、等。A級ソロとして活動諸々についてを提示された。

あと大事なのは、ある程度上……つまり城戸さんとか忍田さんとかから直接命令が下る事も出てくるだろうとの事らしい。いや、もうちよつとこうふんわりした言い方だったから違うかもしれないけど、ふむ。なるほどなるほど?」

「じゃあそれで、大丈夫です」

なんか色々話をもらったけど、つまりそつちの方が組織として都合がいいって事なんでしょ。なら別に、いいんじゃないか。悪い話ってわけでもないし。

しかしそんなあたしの反応がやけにアツサリとしたものだからか、

幾らか空気が重くなった。怪訝そう、とはこの事だろう。忍田さんからはちよつと心配だな、みたいな空気がするけど。

「……………」

「えーと…………？」

じつと見られても、あたしからはそれ以外の言葉はないのですが。なんだろう。

言葉を待つも、どうにも言葉を迷っている様子だ。いつそそれならまた後日、とかにならないだろうか。こういう場所、ちよつと苦手だな。職員室でガミガミうるさい先生に怒られる方がまだマシだ。

いやあくまで空気感の話だけど。だって怒られたいわけじゃないし。

「…………そうか。では、下がりましたえ」

「はい」

でも結局何も話さないままそうして会議室を追い出され、わたしは本当に何だったのだろうかと思いつきながら歩き出そうとした。けど、同じく会議室を出てきた忍田さんが呼び止めたから振り返って首を傾げる。

忍田さんに呼ばれる事が最近は少なくなってきたので、ちよつぴり安心感があるな。なんて事も考えてしまうのだが、当然目の前のこの人にそれが伝わる事はないので変わらず心配そうに見つめられた。そう見られると照れちゃうね。

「無理はしていないか？」

一瞬、なんの事だろうと考える。いや、たぶんあれだ。部隊を解散して一人になるのを心配してくれているのだろう。

とはいえ、それは杞憂というものですよ忍田さん。わたしは本当に、心の底からそれでいいと思っっているのだから。

「それでも心配してしまうものなんだ。慶よりも注意する事がないから、なおさらに」

「いやあセンパイはなんか、別次元じゃないです？　流石にあたしもあそこまではなれないですもん」

太刀川センパイは、あれだ。学校に関する事はとてもじゃないけど

ヤバイ。不良女子のグループに所属するあたしが言うのもなんだけど、バカなんじゃないかと思う。

戦闘に関しては忍田さんがめっちゃくちや凄いお師匠なのもあってスキル高めなのに、普段の生活があまりにもダメダメすぎる。何度かセンパイの隊の作戦室にお邪魔してるけど、あまりにも片付けが下手くそだしすぐ散らかすし。それに忍田さんも風間さんも、他には東さんだとか、センパイが頼る人たちが揃って困った顔をする程成績が残念すぎるらしいし。

そりやそんな人に比べたらあたしじゃなくても可愛いもんですつて。いやマジで。

「ん。でもご心配ありがとうございます！ 忍田さんに心配されるの嬉しいですよー。最近は稽古つけてもらえてないし、中々お会いできなかつたから〜」

それでも寂しかったんですよ、なんて冗談めかして言うと、忍田さんはきよとんとした顔を浮かべた。虚をつかれた、みたいな感じだ。でもわたしとしてはそんな驚くような事を言っただつもりはないのでちよつと焦ってしまう。困らせたいわけでもないし、えー、どこが引っかかったんだろ？

「そう、だな。確かに、そうかもしれない。……久しぶりにするとしようか、訓練」

「！、いいいんすか?!」

うわわ、えつ、すごい、嬉しい。嬉しいって、最高だ。だって忍田さん本当に忙しそうにされてるから、まったくご無沙汰と言ってもいい。嬉しいな。

きつとこの嬉しいという空気はわたしから出てくれているはずだ。だから忍田さんの頬が緩んだのだ、とそう信じる。

「今日の今日、は少し時間がとれそうにないから、明日いつも通りの時間に訓練室で」

「はい！ ありがとうございます、忍田さんっ」

「ああ。……どれだけ強くなったのか、楽しみだ」

「ん〜ご期待に添えるかはわかんないですけど、よろしくお願いし

まーす」

微笑んだ忍田さんにビシツと敬礼っぽいを送って、今日のところはおわかれする。でもまだ時間はあるし、忍田さんに無様は晒せないし、うん。ランク戦やって帰ろ！ 誰かいるといいなく。

そうやって気持ちニコニコしつつテンションが高いまま戦う事で周囲から引かれていたみたいだが、些細な事だ。

「鏡を見たらどうだ」

「そーやって水差すの、よくないと思いますよ二宮さん」

「……………」

まあ二宮さんにはそのような反応をいただき。逆に諏訪サンとかには。

「お前も機嫌いい時、あるんだな」

「そりや人間誰だつてそうじゃないすか？」

なんて言われもした。失礼な人たちだ、まったく。「いい事じゃないですか」と頷く堤さんを見習ってくださいよ。まあそれはそれとして明日のために負けませんけど。

——と。そのような感じで過ごした昨日ですが。なんか耳に入ってたらしく、忍田さんが苦笑して「程々にするようにな」と言うものだから少々反省。

確かに、ちよつと暴れすぎた気がしないでもないのである。……いやでも相手が二宮さんとか諏訪サンたちとか出水とか、やっぱそれなりに手強かったし……。

「だけど、慶といい色といい、弟子が優秀で私も鼻が高い。……慶はもう少し勉学に身を入れてほしいが」

「ありがとうございます！ あたしはセンパイを反面教師に頑張りますね〜？」

「はは」

笑う忍田さんに宣言通りもうちよつと勉強頑張らねばなーと考えつつ、早速訓練を開始する。久しぶりだからか、ちよつと目が慣れない。

それに、忍田さんの空気は隙間が細すぎて攻めきれない。サイドエ

フェクトを使った戦闘にだいぶ慣れてきて、ものになってきているからこそ、その強さは鮮明に映る。やっぱり、すごく強い。

弾かれる刃が持つてかれてしまっそうなのをしっかりと握りしめ、攻撃がくる空気の前に置いていく。一撃。続けてまた一撃。二撃。ひとつひとつの攻撃が変わらない重さで、自然と弧月を握る力を更に込めて。

それから呆気なく体勢を崩され、転がされてしまった。

「うん、前よりも強くなったな、色」

「そうですか？ 忍田さんにそう言われたら天狗になっちゃいますよ、あたし」

「ははは、本当の事だから安心して天狗になってくれ。ただ、そうだな……」

そんなでも強くなったと言われて、嬉しくならないわけがない。つい笑顔になってしまいうくらいには、嬉しい言葉だ。そのまま続く細々としたアドバイスに耳を傾けながら思う。

最初の頃よりもずっとその言葉の数は少なくなったし、その分大雑把なものではなく詳細なものになっているから、うん。忍田さんが褒めてくれるように、ちゃんと強くなれているのだろう。

誇れる程とは、まだ言えないけど。それでも、確かに前に進めてはいる。はずだ。

今はただがむしやらに走っているに過ぎないけど。もっともっと、あたしは強くなりたい。この人のような強さを、わたしは持ちたいと思う。

似てるようで似てないコウハイ

忍田さんに中々大変なお願ひ事をされてしまった。むむむと眉を寄せてしまいながら、トントンと爪先を踏み鳴らす。

ラウンジの入り口で髪を触りながら立つあたしは、さぞ近づきづらい雰囲気を出してるのだろう。まあ別に何でもいいけど。

「ああ、あんたか」

そうしてふとラウンジに入ってた存在にやっと顔を上げる。

「アア?」

不機嫌な空気がわたしへと向くけど、たぶんそれはあたしだって向けてる。だって忍田さんの願ひは。

「あたしは雪原色。上からあんたの面倒をちよつと見てくれて言われたの。というわけだから影浦、ちよつと訓練室に面貸しなさい」

こここのところ問題の多い影浦という存在の面倒を見る、というものだったのだから。

なんでも、あたしに似て非なるサイドエフェクトがあるのかなんとか。それによって着実にポイントを稼いで正隊員になった影浦は態度だとか目つきとか口が悪いとかもあつて問題が起こす。あるいは起きるものだから少々話を聞いてみて欲しいというのが忍田さんの言だ。似てるならまあわかることもあるかもしれないけど、正直無駄に終わる気はしてる。

「何でテメエの言うことを聞かなきゃなんねーんだよ」

「上官命令つてやつ。……じゃ、こうする? 五本勝負で負けたら諦めるつてのは。あたしもあんたに構いたくて構おうとしてるわけじゃないし、それが一番手っ取り早いでしょ」

「……へエ」

少しだけ興味がわいたような顔に、さっさとブースへと向かう。そんなわたしの後ろを影浦はやや離れた距離から着いてきていた。

そうして、開始したランク戦。

「っ、んだ……ア!」

スコープピオンの扱いというよりは、反射がいい。咄嗟の判断の早さも、うん。それなり。

首を刈って、次の勝負がはじまった瞬間に距離をもって構える影浦に問いかける。

「あんたのサイドエフェクト、心が読めるって聞いたけど。ど？ あたしの考えてる事、わかる？」

「……………聞いてくる割になんだそれ、気色悪い」

「ふーん。じゃ、心が読めるというよりは、なんだろ……………なんとなく空気が伝わっちゃやう感じ？ なるほどね。あたしに近いなら、まあ確かにお願いされちゃうか」

肩を竦めて弧月を攻撃が来るだろう空気の前へと滑らせる。それだけでスコープピオンを弾き、空いた隙間にアステロイドをばら撒く。

避けようと後退した影浦の距離を詰めて、はいここ。がら空きの間隙に刃をつき立てればこれで三勝。

「チツ、うぜえ！ なんなんだよ、クソ！」

「何って、……………はあ。あんたと似たようなサイドエフェクトを持つてるセンパイよ」

「……………」

ギロリと睨んでガリガリと頭を搔く影浦に答え、ハウンドを展開して適当に打ち上げる。追尾弾であるそれは勝手に弾が動いてくれるから、打ってしまえば後は思考外だ。

反撃に合わせて弧月でスコープピオンを砕き、観察を続ける。視線に頼る癖があるから、攻撃の狙いがわかりやすい。あたしと一緒にサイドエフェクトに振り回されてるのかな。わたしは多少、マシになったとは思うけど。

上空に上げたハウンドがパラパラと降り注ぎ影浦のトリオン体を削っていくのを見つつ、ひとつ頷く。まあとりあえず叩きのめしておこう。

「はいこれで五勝」

続けて警戒する影浦の、隙と呼べるであろう空気を穿つことで腕と足を切り飛ばして無事五勝すべてを手にしたわけだが。ブースを出

て顔を合わせると、怒り混じりの拗ねた……いや、なんか拗ねた？
というのが近い空気だ。負けたのが悔しいのだろうか。

わたしは悔しいというのはあまり思わないから、なんだか面白い。
あたしに負けてここまで悔しそうにするのはそう無い事だし。仲良
くしてくれてる人は悔しいというよりは楽しげだし、それ以外なら
ちよいちよい影で何やら言ってるのは知ってるし、他は興味なさげ
だったりそもそもあたしを嫌ってたりで……まあアレ。割と新鮮つ
て話。悔しい空気、というのはこんなものかというラベルだけは心の
中で貼っておこう。

そうして訓練室に向かい、部屋に入ったところで振り返る。うん、
機嫌悪そうな顔。目つき悪いし、元々そんな顔なのかもだけど。

「とりあえず説明しとくけど。あたしのサイドエフェクトは空間感応
能力、つていうの。一定の空間内の空気の流れとかそーいうのを知覚
する感じ。で、あんたは感情を読む、というよりは受け取る？ 感じ
だつて事でおーけー？」

「………知らねエけど、そうなんじゃねーの」
「そ。ならそーいう事で話を進めるけど」

あたしが影浦にするのは、とりあえず戦闘指導だ。サイドエフェク
トの利用法について、の方が近いかもしれないが。まあ本人が嫌では
なさげならそうして欲しいと頼まれたから、ここはサクサク話を進め
よう。

まずはわたしのサイドエフェクトについて簡単に説明しながら、影
浦との違いを確認していく。最初は非協力的に苛ついたように適当
に答えられていたが、めんどくさくなつたのか、早く終わらせようと
思ったのか、はたまた興味はあるからか。時間経過と共にやや明確に
答えられるようになっていった。実戦を合間に交えているから、なの
かもしれないけど。

「じゃ、今日はここまで。あたしとの違いはわかったし、明日……あんな
防衛任務ある？ やる気あるなら暫くは続けるつもりなんだけど」
「……別に、ねーよ」

「そ？ なら四時半くらいにここに来たら訓練ね。あたしはあんま扱

えないけど、スコープピオンの扱い方についてちょっとレクチャーしたげる」

「扱えねえのに教えられるのかよ」

「そりや身近にスコープピオン使いがいたから問題ないわよ」

明日の予定を決めて本当だろうなと疑いを微かに持つ影浦に、肩を疎めて頷いておく。まあ実際、影浦よりかは使い方は知ってるつもりだ。なにせ、開発に携わった人間と部隊チームを組んでたわけだし。

でも弧月ばつかだから、教えられるほど使えるかは微妙……かも。後でランク戦に潜る時にスコープピオンを使おうかな。一応、念のために。

そうしてはじまった影浦との訓練だが。まあセンパイにされた事をそのまま影浦にしている次第である。

つまり、戦って戦って戦いまくる。という指導とは？　な内容だ。でも、影浦にはちようどよさげな感じだから似たようなサイドエフェクトがあるとそんなもんだろうかと思えてしまう。ちよつとだけ戦っただけだけど天羽もそんな感じだったし……いやあいつはあいつで違うか。まあそれはまた違う話だな。うん。

「だー！　うっぜエな！」

「うるさ。そうカツカツしないでくれる？　ウザいんだけど」

「るっせえ！　そっちこそちまちまちまちまとうゼエんだよ！」

「そーいう訓練だっつってんでしょーが」

ジロリと睨み合いながらお互いに攻撃を行う。わたしは自分で軌道を動かせるバイパーの練習がてら影浦に撃ち。影浦はその攻撃をスコープピオンで叩いていく。その間、双方共に定めた範囲を動かさないというルールのため見た目は然程派手ではない。いや、影浦の動きだけは中々忙しなくていつそ滑稽だけど。

「テメエ今オレの事笑いやがったなクソババア！」

「次ババアって言ったら殺すってあたし言ったんだけど、あんた覚える脳ミソあるわけえ？」

一つ違いだっっていうのにいい加減ババア呼ばわりされてかなりム

力がついているので遠慮なく弾数を増やして最終的に狙撃で頭をぶち抜く。これをはじめて早三日。顔を合わせているのはたぶん一週間かそこら。

小一時間程度の訓練とはいえ、まあそこそこ。そこそこだけど、打ち解けてはきている。いや、打ち解けるといいうか、遠慮がなくなっただけか。この場合の遠慮という言葉を選ばなくなった、が近いかな。

あたしも影浦も口が悪いみたいだから、まあ割と喧嘩腰なのは間違いない。だからか逆に。逆、に？　かはわからないけど、やりやすくなるはある。

太刀川センパイとか迅とかとは全然違う感じだ。あつちはあたしが無駄に消耗するだけだから。で、影浦の場合は一を言うと三くらいになって返ってくるから割と楽しい。

「はいお疲れ。今日はこれでおしまい」
「……チツ」

楽しいとはいっても、あくまでも少しは、というだけだ。影浦はめんどくさいと思っただけだし、まあその辺はお互い様だろう。

それでも訓練室に影浦が来るのは、少なからず自分のためになっているから、と思っただけだろうか。そうだとすると、迅のサイドエフェクトみたいな戦いづらさはないし、わたしとしてはいい練習台だし、お互いにとって得ではあったという事になるし。うん、それならオツケーでしょ。忍田さんからのオーダーを十全にこなしてるって事で。

いや、まあ誰彼構わず喧嘩を買うのは止められているかと言われたら駄目っぽいけどさ。まーその内いい感じになる相手も見つかるんじゃないの。あたしとは友達でも何でもないし。

「クソババア、もつと戦えねえのかよ」

「ふん。あたしだってあんたにだけ構ってられる程暇じゃないの。そんなに戦いたい相手が欲しいなら誰か見つけなさいよね」

「……テメエが勝手に構ってきただけだろ」

不満たらたらず、という空気をするのを最早毎回の事のように適

当に流して、先程きた連絡を確認する。今日のわたしは夜の防衛任務があるのだ。

「そう。なら友達でも探してみなさいよ。そしたらあたしもお役ごめんになるだろうし」

「ああ？　んなのいらねーし、まず別に頼んでねーんだよ」

「上からの命令って言ってんじやん。……ま、あんためんどくさいタイプの男だし、おおらかそうなやつ探してみたら？　じゃーね。早く帰りなよ」

余計なお世話だと舌打ちと共に苛立ちを吐き出す影浦に肩を竦めて呆れつつ、先に部屋を出る。そう長々とこんな日が続く予感はないし、その内マジで友達でも作るんじゃないかな。いや、希望的観測なのかもだけどさ。

そうなったら本当にわたしの仕事は終わりだ。まあでも暫くは無さそうだし、それまでぼちぼちに訓練の相手をしてあげるとしよう。そう言ったらたぶん「余計なお世話だクソババア」とか言いそうだけど。その時は……そうだな。腕を使わない縛りで訓練してやろう。

変わったのかも

最近少し疲れてるのか、グラグラと自分が揺れているような気がする。あくまで気がするだけだが。

先日、新入隊員の入隊指導を何故か任されたからというのが疲労の主な原因な気がする。勿論これにあたったのはあただしだけじゃないのだけど。

「あ、色ちゃん先輩じゃん。ちーっす」

かけられた言葉は軽い割に、なんか棘のある空気戸惑いつつその声に答える。わたしに声をかけてきたのは、中学時代の二つ下の後輩だ。つまり中三の時の中一。

見た目はあたしとどっこいどっこいだ。けど、あたしよりも人懐こい、というか物怖じない？ というかなんというかな子だ。派手になった化粧以外はあまり前と変わりない気がする。

まー言っても、わたしが彼女と親しいわけじゃなかったし、会ったのも片手で数える程度なんだけど。それでもあんまりいい空気を向けられたような覚えがない存在である。だからこうして話しかけてこられても戸惑ってしまうというわけだ。

あたしの事嫌ってるみたいなのになあ。

「今日は訓練？ 頑張んなよ」

「アハハ、色ちゃん先輩でもそんな真面目な言葉言うんだ！ ウチの記憶だといつもダルがってた気がするなく」

「そりゃま、金を貰う以上はそれなりに真面目にしてるわけよ。いつB級に下ろされるかわかんないしね」

肩を竦めて返しつつ、まだ買ってなかった自販機のボタンを押す。今日は炭酸の気分。

ガコンと落ちたそれを拾って早々に缶の蓋を開けて喉に流し込む。シユワシユワとした炭酸が口に広がって、こくりと喉を鳴らせば食道を流れていく感覚がする。うーん美味しい。

たまには炭酸も悪くないかも。

「え〜〜じゃあ暇があるならウチにせんと〜くんれんしてよ〜」

「……まだ入ったばつかだし、あたしの訓練方法じゃ潰れちゃうかもだからやめといた方がいいわ。上に怒られるのもゴメンだしね」

「なにそれ〜」とおかしげに笑う彼女に似たような笑みを浮かべつつ、どう言ったら諦めるだろうかと考える。何度か接したからわかるけど、確実にあたしのやり方じゃこの子には合わない。わたしの基本方針は太刀川センパイと同じく兎に角戦い続ける事だから、決して楽ではないのだ。

それをわかってくればいいのだけど、どうもわたしのやり方を説明するにも難しく困ってしまう。誰かに説明する、というのは中々ハードルが高い。完全に理解してくれるとも思えないし。

そう考えるとやっぱり影浦はやりやすい分類だったか。言葉より実際にやるのが性に合うタイプだし、トリオン体だとはいえ何回も殺される事も割と平気みたいだし。

「——お疲れ様です、色さん」

「ん。ああ、お疲れ」

後ろからかかった声に振り向き、返事を返す。声をかけてきたのは太刀川センパイの隊の烏丸だ。センパイとはあまり戦わなくなってきたが、それでも会わないわけではない。

それに、同じくセンパイの隊に所属してる出水の射手としての能力が高くて参考になるから、何度か作戦室にお邪魔してるわけだ。だから出水とも烏丸とも、それからオペレーターの国近ともそれなりに話をする仲ではある。けれど。

「ちようど良かった。太刀川さんに色さんがいたら呼んでこいって言われてたんで」

「は？ センパイが？」

頷く烏丸に、戸惑ってしまうというものだ。だって状況と彼の空気を鑑みるに、助けられているのだとわかるから。

そんな必要はなかったし、そうされる理由もないし、気にされる程へマをしてないつもりだったのだが。どうしてだろう。

「色ちゃん先輩、この人は〜？」

「……後輩みたいなもん。あたしと違って部隊組んでるから忙しいでしよーに。センパイってば部下使いが荒いんだから」

「いえ。じゃあ行きましょう」

「ん、おっけ。……じゃーね。訓練頑張ってる」

急かすようにわたしの名前を呼ぶ烏丸に頷いて、片手を振る。返事はない。あたしへの視線も向けられない。

だからこそ逆に悪かったなと思って「なんか悪いね」と呟く。

「色さん、なんか困ってるみたいだったので」

先日穴埋めみたいな感じで組んだ防衛任務で近界民撃破を譲った礼だと言われてしまえば、そっかとしか言いようがない。年下に助けられるというのは何とも情けないように思うが、まあ助かったのは事実だ。からお礼も言っておく。

あのままだとあの子に対してそれなりに酷い事を言いかねなかったし。たとえ真実だとしてたってね。

「色ちゃん先輩って面白いあだ名ですね」

「そう?」

「はい。可愛い響きでいいと思います」

「ええ……いや、可愛くはないんじゃない」

「そうですか?」

せっかくだからトレーニングルームで模擬戦してほしいと頼まれ、太刀川隊の作戦室へと向かいながらそんな会話に流れていった。可愛くはないでしょ、その呼び方。

烏丸は何を気に入っただのか「俺も呼んでいいですか?」とか言い出したから適当に頷く。別に呼ばれる事に抵抗は少ない。さつきまで呼ばれてたしね。

逆に改まって時枝みたいに雪原先輩と呼ばれた方が困る。時枝にそう呼ばれるのは慣れてるからいいけど、それ以外に呼ばれるのはちょっと。いやだいたいぶ抵抗感がある。抵抗感というか慣れない呼ばれ方というかなんというか……。

「あれ、国近だけなの?」

「で〜す」

先程の会話で実際センパイは遅れてくると聞いていたけど、出水もまだか。じゃあ出水が来るまででいいかな。

「はい。よろしく願います」

「ん。それじゃ、トレーニングルーム借りるからよろしく、国近」

「どうぞ〜。設定変えたくなくなったら言ってくださいねえ」

そうしてトレーニングルームで戦う事……何分だろ。とりあえず片手を超える数だけ勝負は決してるわけだが、うーんほんと、今日調子悪いな。

受け止めた刃を流しきれず、負けの判定が出た表示を見ながら首を傾げる。もうそろそろ本当に限界が近いという事か。

烏丸も気づいたのか「大丈夫ですか？」と聞いてきたのに肩を竦めて返す。

「明日明後日は休みだし、目一杯休む事にするからまー平気」

「それ、答えになってます?」

「なってるっしょ」

昔からよくある事だ。今はトリオン体だから何も感じない。けど、昔は半年に一回。最近では二ヶ月に一回一日寝るだけの日がわたしにはあった。普段はそこまで長くない睡眠で問題ないのだけど、こういう調子が崩れてきている時っていうのはその日が近づいてきている証拠だ。

以前何かの拍子で忍田さんに話したらサイドエフェクトに関係しているのかもしれないという事らしい。使いすぎた反動のようなものだろう。憶測ではあるが、とは医療担当^{先生}からの言葉である。

だからまあ、二週間前のわたしの直感は、サイドエフェクトは流石といったところだ。休むタイミングバッチリ。自分の事に関してはこれくらいしか教えてくれないんだけどね、あたしのサイドエフェクトくん。

だからグラグラしてる気がするのも、疲れの他にそういう理由^{ワケ}もあるのだとわたしは考えていたりする。

「色ちゃん先輩は」

「んー、うん。なに?」

呼んでいいと頷いたとはいえ、いざ呼ばれると少し複雑だな、これ。そう思いつつ弾かれた弧月を拾い上げて振り返る。

「なんというか、我慢強いっすよね。割と」

「……割とは余計な気がするけど。そう見える？」

紡がれた言葉も、これまた複雑だ。だって言われた事無いし。

あたしは割と怒りっぽいと言われてるから我慢強いとは少々ズレている気がする。いや、でも、うーんトリオン体とはいえ殺されるのに慣れてるのは我慢強いと言える……のか？ それは違う？

「殺される、と言うとたぶん大多数の人から反感を買うと思いますよ」

「あー。ま、それもそうか」

苦笑する烏丸の攻撃をいなして、アステロイドの三割を放ち残りの向きを整えて更に撃つ。出水の弾に慣れているからか即座に避ける動作を取るが、うん。ここだな。

「つ……！ はあ……まだ、色さんには敵いそうにないな」

「そう簡単に勝たれたら堪えないわよ。あんた出来る奴だし、今の内にいっぱい負けてよね」

「なんすか、それ」

わたしの言葉に楽しげな空気になった烏丸に肩を竦めつつ、それ以上の言葉は止めておく。だって烏丸、年下だしね。いやそれ言ったら年上の威厳なんてあつてないようなもんだけどさ。

でも「あたしはめちやくちや強くなつてなれないだろうから」なんて言っちゃうと、もっと威厳なくなるじゃん？ それはあたしだって避けたいところだ。……いや前々から色ちゃん先輩なんてあだ名がついてる時点でもう遅いかもしれないが。

あたしはセンパイみたい在先輩顔で指導できるタイプじゃないもの。影浦については上からの命令込みだし、期間限定だから出来る事だし。そもそも指導というより遊び相手に近いものであるからな……いやその点でいうと出水とか烏丸とかと戦うのもそうだけど。

太刀川センパイは割と本気で遊び半分真剣半分みたいな感じなので別カウントだ。

『色さん、京介、俺も戦^やりたいんだけどいいー!?』

「俺は大丈夫です！ 色ちゃん先輩」

「ん。じゃあセンパイが来るまでか、18時くらいまでならね」
『しゃっ！』

ところで何故色ちゃん先輩？ という疑問の声をスルーして、自分の中のスイツチを切り替える。一対一^{サッ}で戦う時と複数人で戦う時とというのはまったく違うスイツチなのだ。

この中々侮れない二人を相手にしてどれくらい今日のわたしが頑張れるのか。少し不安にならないでもないが、無様には負けないようにしよう。

そう考えながら、トレーニングルームに入ってきた出水と烏丸と三人でどういう方式で戦うか決めて弧月を握りしめる。

それからふと狐月を見下ろし——わたしの弧月は通常よりも少しだけ刀身が短いのだが——すっかりこの手に馴染みきってるなという事に唐突に気がついた。

だから、うん。今更ながら気づいたけど、きっとあたしにも意地が出来ていたのだろう。多少なり実力が認められた以上はあまりナメられたくない、なんて。そーんな感じのね。

……なんかちよつとあたしらしくないな。ヤメヤメ、今のナシ！
年下だからって戦う以上は遠慮も容赦もしない！ そーいう方針でいくだけって話だ。

年上？ あたしと好んで戦う人ってほしい皆それぞれ色んな意味で強い人が多いから……開発部に転向した寺島さんとか沢村さんみたいな人もいるけどね。

まあ誰が相手でも正直あんまり関係はないかな、これじゃ。

普段とちよつと違う日

ソロになってからというものの、防衛任務も一人の事の方が多くはあるし細々とした頼まれ事だったり熟してるから割と忙しい。とはいえ以前と変わった、という事もない。つもりだ。

ただ少し、話す相手はボーダーに入隊する人が増えていくのに比例するように前よりはちよつと増えている。……いやまあ話してた人が部隊を組んでるから自然と話す事があるだけだが。

でも別に、話す相手が増えようが減ろうがあたしにとつては何か特別な事があるわけでもない。せいぜい、ランク戦で戦う時に話がしやすいくらいのものだ。それは前々からそうだから、まあ……やつぱり変わらない。

変わったのは、玉狛に行かなくなつたくらいのものだろう。行かなくなつて高校が上がつた小南はたまに本部にやつてきてはわたしとランク戦をするし、木崎さんも普通に顔を合わせるし、会議室に顔を出したら林藤さんにも会うし。他の人たちにはあまり会う機会がないけど、まあ会えば話はする。嫌になつて離れた、というわけでもないし。

迅とも会う事は少なくなつたが、本部でたまに出会すから特に何か思う事もない。いや会うとわざとらしくくつつかれるからウザいけど。

「ん。おつかれ、どしたの？」

6月9日。今日は昼から防衛任務だつたわけだが、本部に戻つてきたわたしを掴まえたのは小南だった。思わず数度瞬いて問いかけるが、何やら拗ねた空気を感じるだけだ。

ここ数日ランク戦に顔を出せてはいないから、ランク戦のお誘いだろうか？

「色、今日誕生日でしょー！」

「あー？ ああ……？」

そういえばそうだった。自分の誕生日を祝う事も特別祝われる事もなかったし、去年はなんやかんや色々あったから忘れてたな。いや

流石に中学の頃は友人とか後輩の子に祝われもしたけど。

誕生日だからといって普通の日と変わらないから頭から抜けどちやうんだよねえ。

「絶対忘れてると思ってた。去年もそーい感じの顔してたもん」

「そうだっけ？ いや確かに思い出すから待ってと言ったような記憶がうっすらある……：ようなないようなだけ。それでどうして小南が拗ねるの？ 小南が祝ってくれるならまあ普通に嬉しいけどさ。」

「むぐっ……そ、それはだって……だってえ……」

そこで照れないでよ。いや気恥ずかしいのかもしれないけど。本当、小南ってば可愛い反応するんだから。びっくりしちやうよあ

たし。

「かわっ?! も、も〜!」

「はいはい、可愛い可愛い」

「うぐぐぐ……色、面白がってない!」

そんな事ないよ。そう返しつつ、ぷくつと頬を膨らませる小南をつつく。わたしがされたら叩き落とすけど、彼女は拗ねつつも受け入れるのでまー可愛らしい。

そういう反応が出来ないから可愛げがないとめんどくさい絡まれ方をするんだろうか。いやでも実際小南みたいな可愛げを今更覚えてもじゃないかな……絶対自分でダメージ受けるから却下だわ、うん。後センパイが大笑いする未来が見える。迅とかも笑うでしょ、絶対。あとは諏訪サンとか犬飼あたりも笑いそう。他の人はそうでもないと思うけど……いやいや、無駄な事考えるのは止めよ。

「もー……とりあえず、誕生日おめでと、色。これあげる」

「ん、ありがとう」

「うん。……えへ、じゃあわたし、そろそろ帰るから。また今度ランク戦しよーね! あと陽太郎が会いたがってたからたまにはあつちに顔だしてよっ」

はにかんで、慌ただしく去っていく小南に片手を上げて見送りその姿が消えてから渡された紙袋に視線を落とす。

あ、ケーキだ。わたしが忘れてるの見越されちゃったかな? 小南

に誰かアドバイスしたのかもしれないけど、うん。晩ご飯にしようかな。それに、今度休みの日には玉狛に行くか。行くのが嫌なわけじゃ、ないんだし。

「あく色さんだー。お疲れ様でーす」

「お疲れ様です」

「おつかれっすー」

「お？ 防衛任務終わりか？」

「お疲れー。太刀川センパイたちも帰りっすか」

近づいてきた太刀川センパイの隊に挨拶を返す。ニコニコしてるのは国近と出水だけで、烏丸とセンパイはいつも通りな顔をしている。空気は特に変わったところもないし、国近もいるという事はやっぱり帰るんだろう。

最近センパイおとなしいし、ランク戦に誘ってはこないだろう。センパイなんか、割とぼんやりしてるから。正直ちよつと大丈夫かな？

と思わないでもないが、部隊での動きはちゃんとしてるらしいからまあ流石のセンパイでも悩む事があるのだろう。たまにそれに近い空気をしていない事もないし。

「それどうしたんすか？」

「帰りにケーキ屋寄ってたんですか？ いいなくわたしも今度買おう」

「ん。これはさつき小南に貰ったところ。あたしが買ったやつなら上げるって言いたいけどね」

「へえ。ケーキ貰うとか、なんかしたのか？ 何かねーと貰えねえだろ、ふつう」

センパイの疑問に、一瞬答えるのを躊躇って、でもまあ別に隠す事でもないしと答える。すると全員に驚かれてしまい、あたしも驚いてしまった。まさかそんな空気になるとは思わなかったもので。

「ええーおめでたいじゃないっすか！ おたおめです」

「おめでとうございます。誕生日なのに防衛任務だったんですね、本当にお疲れ様です」

「あー、うん……ありがと、出水、烏丸」

「お誕生日おめでとうございます。教えてくれてたら何か用意したのにな〜。うーん……」

「いいいいいよ、気にしないで。祝う気持ちだけでじゅーぶんだから」
純粹に祝ってくれる空気に苦笑しつつ、かばんを漁ってチョコひとつをくれた出水と、貰い物だけどという飴を烏丸から受け取る。まあ貰えるなら貰っておくけど。

「じゃあ〜ハグしましょーハグ。ほら、ハグって落ち着くっついていいますしー。手軽なプレゼントってーことで〜」

「ん？ ああ、じゃあはい」

ひらめいた、とでも言いたげな顔した国近にかつて後輩たちも同じ事したな、って思い出しつつ手を広げる。むぎゅっと締め付けられる感じが久しぶりだ。

彼女たちの連絡先を知らなかったりあれだったりで最早そういうのも遠いものと思っていたけど、ボーダーはトリオンのあれそれでこれからも年下が増えていくから。たまにこうした、あたしに懐いてくる子がこれからも出てくるのだろうか。懐く、というのとはちよつと違う気もするけど。

「おお〜色さんやわらかあい……これは寝れそう」

「このままは無理でしょ。ほら男子共はこっち見ないで。そしてセンパイは頭を掴まない」

「……………いや、だってそこに頭があるから」

「あるからやっていいわけじゃないっすよ」

抱きつかれてるのを見られて喜ぶ趣味はない。思春期なのはわかっているけどじろじろと見てくるな。センパイは何故かいつものように頭を掴んでくるのは何？ というか国近もどうしたっての。なんか徐々によくわからなくなっくんだけど？

空気もなんか色々入り混じってるし、読もうとするのもめんどくなっってくる。どうせたいして困ってるわけでもないし、負の感情が向けられてる感じでもないようだし。

「はいはい、あたしは満足したからもういいよ、国近。ありがとう」

「…………じゃあわたしの誕生日プレゼントもハグでお願いします〜」

「それか枕に……」

「なーにそれ。前と同じくゲームに付き合つてとかじゃなくていいの？ いやあたし全然出来ないからあれだけど」

「いいんです〜。いやゲーム音痴な色さんは可愛いんですけどね〜」

ニコニコ上機嫌の国近に、つい渋い顔を返してしまう。いやだつて、ゲームとか殆どやった事ないんだから仕方ないじゃないか。わたしの友人、あんまりゲームをする子たちいかなかったし。いや漫画はあつたからよく見させてもらつてたけどさあ。

だからって別に、音痴なわけじゃないもん。ただちよつと操作がよくわからないだけで……。対戦とかだつたらなんか仕掛けてくるんだろうなつていうのはわかつてても避け方とかわかんないだけだから、うん。

「……センパイはマジでいつまで頭搦んでるつもりっすか」

「ん〜〜……」

「ちよつと、セクハラやめてもらえます？」

後ろに回つたかと思えばぐいつと引つ張られ、首に腕が回される。そうして改めて頭に手を置かれた。なにするんだこの人。

「どこがセクハラだ……？ 落ち着くだろ」

「ぜんぜんまつたく」

「なんだとお」

顎を乗せてがくんがくんしてくるセンパイに痛い痛いと言っていると、角から聞こえてきた声はどうした、とこちらへと近づいてきた。「何かと思えば、……本当に何をしてるんだ？」

「風間先輩〜助けてくださあい。太刀川センパイがあイタタ！ 痛いってセンパイ！」

太刀川センパイの後ろからやつてきたであろう風間先輩に助けを求める。出水たちはやれやれといわんばかりの空気をしているので手を貸してくれそうにはなかったからそう判断したのに、このセンパイ思いつき顎を押しつけてきやがったので大変痛い。そりやもうしかめっ面になつちやうくらいに。

「あまり妹弟子をいじめてやるな、太刀川」

「いじめてはいないけどなあ……な、色」

「風間先輩の言うとおりいじめです。ね、烏丸。そう見えるでしょ？」
「え。……うーん、絵面的にはよくないかと」

そういう問題かあ？ 出水と国近は笑ってさあとでも言いそうだったから烏丸に振ったけど、これはこれで間違いだった気もする。

一瞬困った顔をして答えた烏丸に、太刀川センパイは「色はチビだからまあそうかも」と呟いてやつと離してくれた。けど。言うに事欠いてチビとはなんだチビとは。自分がデカいからつてくそお……！

「……それで、廊下で何してるんだお前たちは」

離されたからささっと距離を取るわたしを横目に、至極冷静にそう首を傾げた。そう改めて問われると確かに何をしているのやら。

いや作戦室から出てきた太刀川センパイの隊と顔を合わせた、が一番正しいわけけど。

「色の誕生日を祝ってたんですよ。こいつ、今日が誕生日だったらしくて」

「ああ、そういう事か」

納得した様子でひとつ頷いて、風間先輩はかばんを開いた。そうしてすぐにこちらに箱を差し出してきたので咄嗟に受け取る。

「誕生日おめでとう雪原。去年俺の誕生日にくれたからな。そのお返しだ」

「ホワイトデーじゃないんですから……いやまあ、ありがとうございます」

プレゼントにしてはラッピングされてないが、風間先輩らしいかと思う事にしよう。律儀なのが先輩のいいところだし、うん。とりあえずポケットにチョコと飴をしまつて、クツキーの箱を持ち直しておく。

たぶんこの感じだと、通りかからなかったら部屋にまでわざわざ訪ねてくれていたのだろう。それはちょっと申し訳ない気がするからちやうど良かった。

「そーいや俺も貰ったつけ。……何かいるか？」

「いや、別に要らないんでいいっすよ。気持ちだけでじゅーぶんつて

やつです」

その点太刀川センパイはすっかり忘れてる様子だ。まあ一応お世話になってるからには、という意図しかないから正直祝い返されたいとかは思っていないし何でもいいけど。

というか、あれだな。そろそろ部屋に戻らないと、幾ら空調が効いてるとはいえケーキが心配だ。じゅうぶんに祝ってもらったと思うし、いいだろうか。

「じゃ、ケーキ食べないでだしそろそろあたしは行きますわ。出水と烏丸はまた今度誕生日教えてくれたらてきとーに祝うからよろしく。って事でお疲れ様でーす」

「了解っす」

「お疲れ様です」

「おつかれー」

「お疲れ様です〜」

「ああ、お疲れ」

いい感じにわかられるタイミングなのを見計らい、改めて挨拶してさっさと立ち去る。ちよつと急ぎすぎたと思わないでもないが、そのまま居たら色んな人が通りそうだったから悪くはないだろう。

正直あまり誕生日を祝われるというのは慣れないし。友人たちが祝ってくれる時もちよつと反応に困ったものだ。わたしの誕生日とか祝う必要を感じないから。

そう言ってしまうとよくないとはわかってるから、決して言ったことではないけどね。

しかしそれから数日色んな人に祝われるとは思ってなくて驚いた。誰から話 flowed たんだろうな、と思わないでもないが気にせずお礼を伝えて、それからもわたしは特に変わらない日々をまた送る。

……少しだけ、嬉しいと思っただのは事実だ。

焼肉は美味しい

パンツという弾けるような音が幾度となく響く狙撃訓練場。その端を陣取ったあたしはひたすらの弾を撃ち込んでいた。

狙撃訓練は正直、対人相手の捕捉、掩蔽訓練以外は胸を張って出来るとはいえない。けど、去年の夏は狙撃訓練に集中していたし、本部に部屋をもらってからは人の少ない時間にあてている。だから、空気が発せられていないとしても的の真ん中近くに殆どの弾を当てられるようになった。つもりだ。

「お疲れ、雪原」

「ん。お疲れ様です」

近づいてきた木崎さんに返して構えを解く。的を見て「腕が上がったな」と呟かれたらまあ照れてしまうというものだ。木崎さんの方がわたしよりもすごく強いし。

「ゆりさんは元気にしてます？ こないだ行った時には会えなかったのよ」

「ああ。ゆりさんは変わらずお元気だぞ」

「なら良かった。よろしく伝えてくださいね、木崎さん」

「あ、ああ。任せておけ」

何に動揺したのか、若干キョドった木崎さんに軽く首を傾げてしまう。が、まあゆりさん関係の話になるとよくある事なのでいつもの事ではある。微笑ましいと年上に言うべきか、どうなのか。

そんな事を考えつつ何か用事だったろうかと聞くと、焼肉に誘われた。向こうの方で何時ものように誰かに教えてる東さんがたまにはどうか、という事らしい。

断る理由も特にないし、だいたい奢ってくれると言うから今回も素直に頷く。特に師事しているわけではないが、気にかけてもらえるというのはいい事、なのだろう。

「今回はあんまり人がいないんすね」

「ああ、なんかタイミング悪かったみたいだな」

残念だとテールのはす向かいで肩を竦めた東さんになるほどと

納得しつつトングでお肉をひっくり返す。火が熱い。

「おい、俺がやる。トングを貸せ」

「ん。ありがとーございます、二宮さん」

スナイパー会ではないという事なのか、右隣の壁際に陣取った二宮さんがトングを要求してきたので手渡してじっくり炙られる肉を眺める。

じわじわ、じゅわじゅわ。眺めながらも、他の人たちの会話を聞き流す。話題はあっちこっちに広がってとりとめもない。とりとめもないが、左隣の加古から振られる話には適度に応じておく。

……とこでなんであたしがこの二人の間なのだろう？ と前回同様思わなくもないが、焼肉の前には些細な疑問である。

「完璧万能手かあ。すごいですね、パーフェクトってつくとなんかわからないけどすごそう」

もうちよつと別の言い方がありそうなものだけど。そう思いつつ向かい側に座る木崎さんの話に眩く。

黙々と肉を焼く二宮さんが「語彙がないな」と言うがセンパイよりはあるつもりなんです。肩を竦めて返し、それを聞いていたらしい加古は「そうね」とくすくすと笑う。楽しそうでなによりだ。

「お前もポイント的にはそう呼ばれても可笑しくないだろ」

「ん？ ああ、確かに。雪原、どのポイントが足りてないんだ？」

「えー……んー、射手の方ですかね？ 気分で使うの変えてるのでポイントがバラけちゃって。総合的なポイントはたぶん足りてる……と思いますけど、どうでしょう。トドメが孤月な事が割と多いんで、東さんの問いに答えるとなるほどなあとあちこちからの声がして、なんとなく居心地悪い。ぽいっと横から無言で放り込まれたお肉をとりあえず頬張ると、入れてきた二宮さんがフンと鼻で笑う音がした。

そーいうところがこの人の悪いところだと思っなああたし。空気的にはなんていうか、もつと頑張れとかそういう応援？ というか、認めてる……？ ような感じなんだけど。

何せ言葉にしないものだから、たぶん知り合いの中でもわかりづら

い人に分類される。二宮さんとは、出水に合成弾を教わってた時が一番会話したけど、言葉足らずというか態度と空気ですす人とかかなんというか。ああ、わたしが教わっていたんじゃないかと二宮さんが教わってた時の話、なのだが。

ま、そんなわけで。

「あたしそんなに肉いららないんで、そのくらいでいいですよ。後は野菜ちよつとください」

「そんなのだからチビのままなんだろう」

「むっ……いやでももう伸びる見込みはないんでいいんです」

「あら。わからないわよ？　もしかしたらちよつとは伸びるかもしれないじゃない」

「そうだと嬉しいけど、伸びても数センチじゃん。諦めるしかないじゃん」

だからぼすぽす頭を撫でなくてもくれるかな、加古サン。この座敷にいる八人の中で断トツに低いのが割と辛く思ってるというのにこの仕打ち。よくないと思います。

いやまあ年下が今日は狙撃手の後輩？　にあたる当真しかいないからなんだけどね。……当真は無論の事、大半の子には身長負けてるけどさあ。でも背が伸びる前の子とかはそこまで変わらないからいてくれたらそれだけで割と気分が楽なんだよ。いないけど。

……まあわたしが幹事なわけでもなし、積極的に話しかけるような相手も話してくるようなやつも少ないしいいけどさ。

「にしたってお前は食べなさすぎじゃね？　昼に見かけても量が少ないしよ」

「諏訪サンまで言ってくるの珍しいっすね……」

「前も言ったが、食事はきちんと摂れ、雪原」

「……はあい。もー、なんで今日に限ってそんなに言うんですか」

位置的には真ん中寄りだから室内に肯定する空気が満ちて、思わず渋い顔をしてしまう。そこまで小食なつもりはないのだけ……え、加古。なんで否定するの。これ、ほんとに小食？　割とマジで足りてるんだけど。

加古の炒飯は食べきる前に重い事の方が多し、たまに意識飛ぶからなあ……あれはもう足りる足りない以前の話だ。加古炒飯による悲劇は本人に言っても好奇心のままに作る限りは改善はされないだろう。いやでも次からは断れない時は量減らしてもらおう。マジで美味い時でも半分食べたらけっこうお腹いっぱいだし。

「ほらほら、これも食べなさい」

「いいって言って……もう、加古お入れないですよ……」

「うふふ。可愛らしい反応するからつい。ね、二宮くんもそう思うでしょ?」

俺に話を振るな、という空気も気にしない加古に二宮さんと揃って小さく息を吐きつつ、わたしは追加されたお肉に箸を伸ばす。一応食前に胃もたれしないよう薬は飲んだとはいえ、今日はどれくらい食べる事になるのやら。

育ち盛りもいるし男性陣は背が高いしガタイもいいし、食べられないさそうなら押し付けなければいいだろうけど。ま、前回と同じく加古にからかわれながらになるかもしれないが、わたしはゆっくり食べ進めるのみだ。

あ、デザートだけは別腹なのであしからず。

「いっぱい食べてお腹いっぱい……」

「あれでか?」

「ですよ」

信じられないという空気をする二宮さんに本当の事なんだけどな、と思いつつ頷く。人それぞれという事です。

え、なんすか。使い所が違う? ……そんな事ないと思うけどなあ。加古も肯定してくれてるし。

「それじゃ、あたしはまた本部に行くんで」

焼肉屋の店の前で会計の終わった東さんにお礼を伝え、解散という空気の中わたしはそう手を上げた。本部に部屋をもらってるのを公言していないから少しだけ心配そうな眼差しが向けられている気がする。

「あら? まだ訓練するの?」

「んー。まあ……心配しないでも本部に泊まるから、だいじょーぶだよ」

実際「無理したら駄目よ」と言ってくれる加古にちよつと悪いなと思いつながら、しかしそう言ったら言ったで説明するのめんどくさいしなあという気持ちもあつたりなかつたり。……まあ深く聞かれたら答える気はあるから、大丈夫大丈夫。

「……じゃ、俺も用事あるし雪原は送ってくか。加古は誰か頼む」

「あざつす東さん。よろしくおねがいます」

「ああ。それじゃ、お疲れ」

『お疲れ様です』

軽く手を上げて他の焼肉メンツと別れて、わたしと東さんで本部への道を歩く。とはいえ、話が弾むというわけではない。東さんはわたしより大人だし、あたしは聞く側だし。共通する話題を話そうとするなら、まあやつぱり戦術についてだとか狙撃訓練についてだとかだ。

「当分はソロのまま活動か？」

「はい。上の意向はよくわからないんですけど、天羽の件とか影浦の件を考えると、そういう奴のフォローとかさせたいのかなーと思うんですが」

今のあたしの動きを東さんはどう捉えるのかと尋ねる。わたしの考えとしてはサイドエフェクトで感じた空氣的にもそこまで間違いいではない気がするのだ。

基本的に上からの命令は素直に聞いているつもりだし、多少便利な駒として使われているとは思う。が、他人から見るとどうなのかという疑問があつた。

「うーんそれも有りそうだが……ソロに慣れてきたら次は部隊の補助もしそうだな。その調子だと」

ほうほう、なるほど。えー……つまり？

「雪原はサポートが上手いから、それを腐らせるつもりはないだろうって事だよ。俺の隊がA級に上がる時の試験で忍田本部長がお前をサポートにしていただろ？ その延長、みたいなものじゃないか」

「あー……」

「それに、どの隊の補助になろうが雪原は不足してる部分を補えるだけの実力もあるし」

「その評価はちよつと大げさですけど、まあ確かにポジションとかは合わせられると思いますけど……」

そこまで評価されてるとは思わず一瞬足を止めてしまった。がすぐに気を取り直して数歩先に進んだ東さんの横に並ぶ。

気遣いしてくれる人だから、その歩みはわたしに合わせたようにゆっくりだ。そもそもあたしの二歩が一步みたいなものだし。センパイとかはその辺気にしてくれないから有り難い気遣いである。

「大げさつてもんでもないだろう。雪原は努力が出来る人間だからこそその評価だと、俺は思うが」

「……努力、すか。努力してるつもりはないんですが」

東さんはそう言うけれど、わたしのは努力とは言わない気がするな。

なんとなくボーダーに入って、センパイに引つ張られたから訓練を続けただけで。それを努力と取られては、本当に頑張っている人からすると迷惑だろう。あたしのそれは、間違いなく最初の出会いに恵まれたからこそそのものなのだから。

そこから攻撃の手段が増えたのが今だけど、ボーダー隊員を続けているのだからあたしの性に割と合っているからだし。どこがって言われそうだけど、それはまあ過ごしやすいから……？

「続けていく、という事自体に努力は必要だ。戦い続けるっていう事にも。A級にまで上がったのなら、誰からも認められる実績があるという事で、そこに努力が介在するのは明白だろ」

「……ですかね」

「雪原がどう捉えているにせよな。俺は迅と部隊を組んでいたお前の能力を公正に評価をしているつもりだぞ。もつと互いを引き立てる戦略を練り込まれたらA級1位にまでなっていなかった、って今でも思ってる程度にはな」

それは……、どう、答えたものだろう。嬉しくないわけではない。東さんはボーダー隊員の中でも一番多くの人に教えていると思うか

からこそ、認められている事は喜ぶべき事だ。

しかしそれは忍田さんに強くなつたと褒められるのとは、また違う感じに思える。……なんだろう。強い強くないとか、そういう基準ではないような気がするから、かな？

「一応、素直な所感つてやつだよ。だから深く考えず受け止めたらいいよ」

「なるほど。なら、ありがとうございます」

「はは、どういたしまして」

そうして一瞬沈黙が落ち、しかし話を移り変えながらわたしと東さんはボーダーへと戻り、出入り口でわかれる。

東さんとうとうしてそこそこ長い時間話すのははじめてではあったけど、色んな話をしたからかとても充実していたように思う。焼肉も美味しかったし。

それに、うん。まだまだ頑張ろって、思えるな。人間褒められると大なり小なりそういう気持ちが生えるもの……なのではないだろうか。いやまあわたしは自分が一般的な人間とズレてる気はするけど。

でも、その気持ちだけは確かにこの胸の内にある。その気持ちは大事に、したいな。していこう。

相棒と言うと怒られるけど

雪原色は生きづらそうな女だ。

性格も、生き方も、サイドエフェクトも、彼女のそれはおれからすると生きづらそうとしか言いようがない。はじめて会った時だって、そう思った。いや、その未来を視て、そう思ったのか。

たくさんの未来を視る事で今ではもう、どうしてそう感じたかも曖昧になりつつあるけれど。でも、その印象だけは今でもずっと持ち続けている。

「ジロジロ見てこないでよね。ウザいしキモいんだけど」

十月某日、日曜日。防衛任務から戻り、そのまま玉狛……もつと先の未来では支部として独立するこの場所に泊まった、未来ではここにいない彼女は振り返りもせずそう言う。小さな鏡に向かって化粧をする手はいつものように淀みない。

「色つてば冷たいなあ。大事な相棒じゃないの、おれ」

「本気で言ってるならマジで一回病院行ってきてくれる？ 本当ならすぐにぶっ飛ばしたいとこだけど、今忙しいから」

「ええ〜」

ベッドにもたれると「二回は首切るぞ」と訓練室の犯行を予告されるが、いつもの事なので気にせずぼんち揚げを食べる。今日も美味しい。

バリバリ。ボリボリ。カタン。バリバリ。

おれが食べる音の合間に聞こえる小さな音。この音が心地良いな、と最近は思うようになった。色の文句も、最初はそりやちよつとはへこむ事もあつたけど。

それでも、おれのサイドエフェクトはこの時間は残り少ないといっているから。……だから、ではないけど。もつとこの時間は楽しんでいきたい。

これは、この感情は恋情なんかではないけど。色の近くは過ぎしやすくて、好きだ。

彼女の友人も、そうなのかもしれない。そうだったのかもしれない。口では文句ばかりだけど、なんだかんだ許容してくれてるようだから。だから色のそばは曖昧で心地よくて、居やすくて。

「あのさあ」

「んー？」

「……いや。気のせいだったら恥ずいんだけど」

パチン、と何かの蓋を閉じた色が今度は髪を整えながら声を上げた。空になった袋を見て指についたカケラを軽く舐め取りつつ、おれは何だろうと彼女を見る。

おれには彼女みたいに相手がどんな空気をしているのかなんてわからない。けど、なんとなく……なんとなくだけど、ちよつと決まりが悪そうな顔をしてそうだ。

色は、不器用だから。

「なんか元気なさげじゃない？ ……あたしは別に、なんでもいいけど、うつとーしい空気振りまかれるのもダルいし」

不器用だから、そういう言葉選びになるんだろう。突き放すように、確かに気にかける言葉を。

彼女が失った友人にも、そうだったのだろうか。おれが視たのは、誰かの死に直面した色の姿だったけれど。

「そう、か……？ 自分じゃよくわからないけど……色が言うなら、そうなのかもなー」

「なにそれ。自分の事くらいちよつとは把握しなさいよね」

チラリとおれを一瞥した瞳に、苦笑する。まったくもって、手厳しいな。ま、そういうところが好きなんだけどさ。ああいや、恋情とかではなくて信頼とか信愛とかまあそういう方なんだが。

口に出して言うのと、めちやくちや嫌な顔されそうだから言いはしない。しないけど、サイドエフエクトで伝わってるトコもあるんだろうな。というのはきつと、お互い様なのかも。

「今日もキレイなメイクだな、色」

「はいはい。もっと褒め言葉増やしてから出直して。……でもとりあえず、ご飯の前に軽く動きたいから付き合ってくれるんでしょーね

？」

「もちろん。相棒の仰せのままに」

未来視と寸分違わない嫌そうな顔をする色に笑いつつ、さつとトリオン体に換装して訓練室へと向かった。

色との戦いは、楽しい。太刀川さんたちと戦うのもチーム戦をするのももちろん楽しいけど。おれのサイドエフェクトを部分的とはいえ覆すから。だから、何回戦っても良いものだと思える。

だから色と戦う時は、あんまりサイドエフェクトを使わない。視えていても、そつちに意識を割くほど隙を見せてしまう分、そこを誰よりも早く鋭く狙われるから。だから色を相手にする時は視たものを精査する前に動くようにしているわけだ。

色のサイドエフェクトはおれの隙を見逃してはくれないみたいだからなあ。味方の時はカバーしてくれるからとても頼もしいけどさ。彼女と戦うときのやり辛さ、というのは。未来を予知するおれに対し、直感に近い空気の予兆というべきものを感じ取って戦うというサイドエフェクトの違いからくるものである。

未来というものを明確にヴィジョンを視てしまうのに対し、ヴィジョンではない感覚で捉えるというのは、そりゃ戦う時の相性が悪いだろう。おれは未来視を精査してより良い手を打とうとするけど、色は隙だったり攻撃がくるのを感じた段階で攻撃をおいていくらしいから、それだけで未来視が不正確になっていく。

逆に防衛任務とかチーム戦をしているとこちらに向いた攻撃をおれに構わず処理してくれるからかなりやりやすい。たまーにおれへの攻撃がまじるけど、そういう時はだいたいおれが煽ったりした後とかテンションがめちゃくちや低いあるいは最低な時くらいのものだ。

「ご飯食べたら今日はどうするんだ？」

「あたしは帰るわ。そろそろ服買いに行きたいし」

そっか。じゃあおれはどうしようかな。おれも防衛任務はないし、本部に行くか。

「そ。あーでも、太刀川センパイはいないと思うよ。なんか一学期の

期末補習受けるレベルでやばかったのに、中間の結果がまた悪かったみたいだから」

「……太刀川さん……」

忍田さんが頭を抱えて呼び出したらしい。太刀川さんらしいと呆れたらいいのか笑えばいいのだから。まあ本人はあんまり気にしてないだろうな。

そういう色はどうかと聞いてみると、彼女は苦手な科目以外は一応平均点前後を取っているそうだ。そういえばこないだ任務も約束もない時に風間さんに教わつてるところを見かけたし、やつぱなんだかんだ真面目なやつだなと思う。おれからすると意外というわけでもないけど。

きつと、周りの人たちは色の事を勘違いしている。

そもそも見た目を派手に仕上げているのが大きいかな。ぱつきりとした眼力のあるメイク。崩した制服。少し長い、彩りのある爪先。いつも何かに、周囲の空気にあてられてるような冷たい横顔。張り詰めた雰囲気。それらが多くの人を遠ざけているのだろう。

とはいえ空気を読める色はおれの視える限りだと周囲の人がまったくいなくなるわけではないけど。いやまあ学校での色は視える以上の事は正直わからないが。でも、ボーダーでだって太刀川さんとかをはじめに忍田さんとか風間さんとかもいるし、女性陣も沢村さんと一番仲良さげだけど一部のオペレーターとかとも仲良くしてるしな。ああ、確かこないだは加古さんと楽しげに話してたか。

「あれ、迅。珍しく暇そうだな」

「色に振られちゃってさー。嵐山こそ、今暇してるか?」

本部にやってきてブースに向かっていると出会った顔に、ぱちりと瞬く。そういえば色と嵐山も仲良いよな。それに、嵐山にはウザいとか言わないし。

ちよつと煽るの控えたら言われなくなったりするかな? いやでも今更な気も、するな。キモつとか言いそう。というか絶対言われる。

「俺と雪原が? そうか……?」

仲良いよなと言うと不思議そうに首を傾げられるものだからつい笑ってしまう。いや、言わないでも良かったんだが、おれのサイドエフェクトは別に言っても言わなくても変わらないというから。

「迅みために気兼ねなく言い合えるのもいいと思うけどなあ」
「なるほど」

そういうものだろうか。……いや、隣の芝が青く見えるようなものなのだろう。きっとこれは、羨ましいと思うから出た言葉だ。

だって色と初めて会った時からあんまりいい印象持たれなかったみたいだし。その後会うほどに、なんかぞんざいにあしらわれてきたし、今は適当に返されるしき。今更そうじゃなくなったらそれはそれでちよつと寂しくは思うかもしれないが。

でもたまにはこう、嵐山とか風間さんとかみたいにくっついて話してみたいじゃないか。

「どう思う？」

「うーん……」

ランク戦に興じながら聞いてみるが、嵐山はそうは言ってもなあという様子で眉を寄せた。真剣に考えてくれる様子にちよつと悪いなと思わないでもない。

というか、傍から見たら恋愛相談じみてるよな、これ。おれはそういうつもりはないし、嵐山もそれはわかってくれてるだろうけど。

「雪原は真面目なやつだし、こう……お前も真面目に言ってみればいいんじゃないかな」

「ええー？ ……おれ、いつだって真面目だけどなあ」

「そうだな……いやでも、それくらいしか思い浮かばないぞ？」

真面目に言われても……本当に毎回真面目なつもり、なんだけどなあ。ああ、でも。今日みたいに心配される時は確かに、あんまり何も言えない時かもしれない。

それってさあ。嫌われてはいない、って事でいいんだろうか。

「ん。前に嫌いだったら端から相手にしないって言ってた気がするけどなあ」

どうという話の流れでそうなったのか。それを聞くべきか一瞬躊躇

踏って、しかし困った顔で。けれど楽しそうに笑いながら首を振った嵐山をサイドエフェクトが視たから。その疑問は、心の中にしまいこむ。

だからいつか。……いつか、色に聞いてみよう。

彼女がおれを嫌っていないというのなら。おれの事を、どこまで信じてくれているのか——なんて。

まためんどくさいという目でこちらを見てくるだろう色を幻視してしまいながら、唇に笑みを乗せる。

「助かったよ、嵐山」

「また時間が合ったらランク戦しよう。——とはいえ次はチーム戦で、か」

「そうだな。おれと色はそう簡単に倒せないから覚悟しといてくれ」

「はは、こつちだつて負けるつもりはないさ」

楽しげな明るい笑顔を浮かべる嵐山と拳を突き合わせてからわかる。嵐山はこの後隊の作戦室でブリーフィングをしてから防衛任務らしい。特に何事もなく終わらせる嵐山隊の姿を予知しながら、おれは他の事をしようかとブースを離れる。

足取りは、軽い。

やっぱりなんだかんだと、色について悩んでいた……のかもしれないから。話せてスッキリした気持ちだ。

いや、悩んでいたというのは少し違うか。おれの知らないところを補完できたから、納得がいった……かな。

色の事が少しわかった、なんて本人に言ってしまうばまた嫌そうな顔をされるだろうけど。

こわくない人

もう辞めてしまった人にだけ、あの人に話しかけるおれが凄いと
言われた事がある。自分ではそんな事ないだろう、とは思うのだが。
彼がそう呟く理由が、まったくわからないわけではなかった。

雪原色さん。おれよりは前にボーダーに入り、太刀川さんの紹介か
ら忍田さんに弟子入りしたという人。どれだけ凄いのか、とかはまだ
その時はわからなかったけれど、遠目で見かけるその姿は少し近寄り
がたくはあった。

何せ、先ずは見た目。派手な印象を抱く化粧に、おれの通う学校で
はあまり見られない短めのスカート。不良、あるいはギャルと呼ばれ
るタイプの人だからこそ、彼女は人を寄せ付けない人だ。それは、彼
女の事を知った後も変わらない印象である。

だがとりあえず、最初のうちはおれも近づこうとは思っていなかった。
関わる事はない人だと、そう思っていたから。

しかしその転機は、かなり早く訪れた。

とはいえ、なんて事はないランク戦での話だ。

ただ、淡々とした眼差しを向けられ、そうして首を刈り取られただ
け。でも、その前にひとつだけ耳にした事があったから。

「雪原さん、サイドエフェクトってどんな感じなんですか？」

「……………？ ん……………」

腕のなくなった先を押しえつつ、そう首を傾げる。

サイドエフェクト、というのはボーダーに入るまであまり聞き馴染
みのない言葉ではあったが、聞けばそれはトリオンが多い人に見られ
る特殊な力だそうだ。……特殊、特別と言えば聞こえはいいのだろ
う。

けど、おれがその言葉に対して抱いた印象は、あまりいいものでは
ないのだろうというものだ。どんな能力であれ望んだものではない
事もあるんじゃないかって。

「…………別に、ふつーだけど？ なに、あたしの事が気になるの？」

唇をつりあげて不敵に微笑む雪原さんは、見る人が見ればもしかしたら勘違いしてしまうのかもしれない。なんていうか、目をつけられたとか、そういった。

でもおれは、その瞳を見てしまったから。だから違うって、そう思えたのだ。目を細めて笑うその向こうに、冷たく落ち着いた眼差しがあったから。

「は、はい。雪原さんに学べるところが、ある気がして」

「……………ふーん」

捻り出した言葉は、彼女のサイドエフェクトにはどう捉えられていただろう。焦りと混乱は、感じ取られていたのではないかと。詳細を知った今ではそう考えるが。鼻を鳴らしたかと思ったら、首を取られたのは驚いた。

続く戦いで弧月を肩にかけつつ、雪原さんはそこではじめて表情を変えた。のだと、後のおれはそう感じた。

遠目でしか見たことない雪原色さん。彼女は常に気だるそうだったり不機嫌そうだったり退屈そうなの、そう。明るくはない顔をしている。違うのは嵐山さんとか沢村さんとか、そういういった親しくしているのだらうな、という人の前だ。兄弟子になるという太刀川さんに対してはよく迷惑そうな様子をしているが、それはそれで仲がいい、のだらうか。

「サイドエフェクトなんて、あってもろくなもんじゃないよ。ボ―ダーで働く分には有利かもだけどね」

淡々と吐き出された言葉は、たぶんきつと何の感情も込められていなかった。そこにはおれが感じたままに、望まれたものではないのだらうという印象がそのままあって。

「えーと、あんたはたしか……………」

「時枝です。時枝充」

「そ。じゃ、何個かは質問に答えてあげるわ、時枝」

とりあえず、とまた落とされた首には苦笑が浮かぶ。それでも誰かがヒソヒソと声を潜めて囁く程、怖い人とは少し違うようなの。そんな気はした。

だからといって、怖くないかといったら、まあ多少怖いところはあ
る。こう、雰囲気というものが。

「それで。えーと、どんな感じかだっけ？ あたしは物心ついた時か
らあったから、逆に普通ってのがわからないんだけど。ま、親には好
かれなくらいには変わってるんだと思うよ」

それだけじゃないかもしれないけれどと付け足す雪原さんの表情
は派手派手しい人、とは少し違う。ラウンジの角で肘をつけてこちら
を見る目にも、特別何かを感じるところもない。冷たい、というより
はやはり淡々としているの方がしっくりくる。

「なるほど……雪原先輩はご自分のサイドエフェクトがいいものとは
思っていないという事ですか」

「ん、……うん、うん？ ……せ、せんぱい？」

驚きに目を丸くして瞬く雪原さんに、なんだ、と思う。雪原さん—
—雪原先輩は、やっぱりこわくない人じゃないか。

「何か変でした？」

「えっ、いや……えー……変、というか」

呆氣にとられていた表情が困惑へと移る。こうやって見ると、全然
こわくなんてない。むしろ、親しみを覚えるくらいだ。

先輩。うん、いいじゃないか。先輩で、しっくりくる。

「後輩の子たちにも名前で呼ばれてたから、そういうふう先輩って
呼ばれるのははじめてだわ……」

「ちよつと恥ずい」と口元を押さえて壁を向いた雪原先輩を、こわい
となんておれはもう二度と思えないだろう。だからやっぱり、噂なん
てたいてい的外れてる。

「時枝。なに笑ってるの」

いえ、笑ってません。

面白い……に近い感情は抱いているけど。でも、笑ってはいない。
「空気がめっちゃくちゃ笑ってんじゃない。あたしのサイドエフェクトで
わかるから、それ」

「なるほど。雪原先輩のサイドエフェクト、凄いですね」

「……………嵐山が隊に誘うだけあるわ、あんた」

「あはは。褒め言葉ですか、それ？」

じとりとした目をする先輩からの言葉に、ついつい笑いがこぼれてしまう。だって、嵐山さんの名前がそこで出るとは思わなくて。それに雪原先輩がおれの事を認識してると考えた事なかったし。

「そー思うんならそういう事にしといて」

小さくため息を吐いて、彼女はひとつ首を振った。

そういうつもりじゃないなら、たぶん厭味に近いのだろうけど。悪い気はしなかったのは、柔らかい顔をしていたからだ。

「あたしのサイドエフェクトなんて、ただ空気を読めるだけのもんよ。だから凄くなんてない。……ま、それでも上にはそれなりに評価されてるみたいだから価値が無いって事はないだろーし、確かに戦闘では有用だけど」

やっぱりだ。雪原先輩は自分のサイドエフェクトをいいものとは思ってない。嫌ってる、とまではいつてなさそうには見えるが。

それでもおれには想像しかできない苦しみや悩みを抱えて、その結論に至っているはずで。そんな人だから、きつと周りに人がくるのだろう。嵐山さんも柿崎さんも、先輩はいいやつだ、なんて前に言ったし。

実際こうして話してみれば、見た目の圧も冷たい雰囲気も気にならない。いい人だ、と言い切れる程に近づいてはいなくても、こわくない人とは断言できる。だから。

「……おれは、それでも凄いと思いますよ。雪原先輩の戦いを見てたらサイドエフェクトを自分の力にできてるんだらうなって思いますから」

「ん……、んんん……」

これは偽らざる本心である。雪原先輩は毎日のようにボーダーに来ては訓練しているのを見かけているからこそ、おれはそう思えるのだ。もつとも、遠巻きに見かけるだけではあつたけど。

繰り返すようだが、最初の内はこわそうとは確かに思ってた。それでも、少しだけ。こうして話す前でも意外と真面目な人なんだな、とかは思っていた。だって、おれがボーダーに来るときにはだいたい見

かけていたなら、そう思うだろう、普通に。……目立つ人だから見てしまっただけで、他意はない。

だけど、うん。これからは普通に話しかけよう。難しい顔で唸る雪原先輩を見ながらひとつ頷く。

「雪原先輩。今度また戦ってもらえますか？」

「え………まあ、いいけど。あたしと戦って、学べるものなんてたかが知れてるでしょ」

そんな事はない。直ぐにそう返しておれを見た瞳を真っ直ぐに見返す。

「強い人と戦うのは、勉強になりますから」

あなたは尊敬できる人だ。そういう意味を込めて言うと。彼女は呆気にとられたように瞬いて、それから困ったように、しかし照れくさそうに笑みを噛み殺して「そう」と呟いた。

雪原先輩は真面目で、それから少し自尊心が低い人なんだろうなとこうして話した事で思う。だからサイドエフエクトで空気が伝わるというのなら、どうかこの尊敬の気持ちを受け取って欲しい。

「ん。あんたみたいなのやつ、今までいなかったからどう言ったらいいのかわかんないけど……」

ちよつと言葉を迷うように視線を彷徨わせ、それでも雪原先輩はおれの瞳を真っ直ぐに捉えて自然な笑みで頷く。

「そう言われたら、わたしも少しは自信がつくわ。ありがと、時枝」

「負けないように頑張らないとね」と呟いた雪原先輩に頷く。おれは、この人の強さに追いつけるだろうか。

追いつきたいと、思えるのだけど。きつとそんな事を思われてるとは、想像していかないだろうな。

「教えられる程の腕じゃないけど、まあ空いてる時なら相手したげるわ」

これは顔を背けながら言われたので、照れているのだろうと察する。もしかして、意外と照れ屋なのかもしれない。

ちよつと前までは考えてもなかった可能性がなんだか楽しくて、笑みが浮かんでしまう。「時枝」と物言いたげにじりと見られたけれ

どそれも照れ隠しのように見えてしまった。

——この人は嵐山さんや柿崎さんが言うようにいい人で。それから誰かが思うよりもずっと表情豊かで楽しい人だ。

おれは今日雪原先輩に話しかけて良かったと、心からそう思う。

燻る感情はまだ解けない

なんとなくむしゃくしゃする。そんな日々を、俺は過ごしていた。理由は、わかっている。迅との決着もついてなければ、チームとしても勝ち逃げされてそのままだからだ。

「センパイ、お邪魔しますよー?」

「……おー」

出水と一緒に作戦室に来た色に手を上げて返事をして、餅を頬張る。確か今日、うちのトレーニングルーム使っていて言ったんだっただか。

黒トリガー持ちになった迅はもとより、色とも最近は何も戦っていない、そういや。……まあなんか、タイミングが合わねえしな。そもそも今日とか、出水との話の流れでとかなんとかって連絡が来たただけで。

「太刀川さん、色さんと戦わないでいいんすか?」

「んー……後で余力があるならやろうぜ色く」

「……………いいですけど、防衛任務あるんじゃないか?」

「あ、あんたそう言ってたっしょ」

「ああ、そつすね」

じゃあいいと手を振って断り、また餅にかぶりつく。あともう一個しかないし、大事に味わわねば。

そうしながらトレーニングルームの映像を見ると、出水の弾幕が広がった。何の訓練してるんだ、それ。

「……………あー」

またなんかやってるわ、あいつ。出水の弾幕を片手でバイパーで当てながら消しきれない弾を弧月で消す色だが、正直曲芸だよなと思わないでもない。あいつ俺の事頭おかしい扱いするけど、おまいうじゃねーか?

色は俺みたいに剣だけで強いわけじゃなく、かといって出水みたいな才能があるわけでもないし、東さんとかみみたいな戦術がすげーわけ

でもない。それでも、弱くはないのは俺のおかげもあるだろうけど、やっぱ一番はサイドエフェクトによるところが大きいのだろう。

なにせ未来視に近い直感でここぞって攻撃を避けたり防いだりするんだから、これが中々手強い。忍田さんに一緒に教わってる時は全然弱くてもたまに鋭い反撃が飛んできたものだし。

それがこの一年近く？ まあそんなくらいの間には手強い相手にまであってるとんだから俺の目に狂いはなかったってこった。

いや、そもそもあの日。黒板消しを落としたりあの時も、思い返せばまあまあ曲芸じみてたなそういや。俺も出来ない事はないだろうが、色より精度高く攻撃を置くまではまだ無理だ。

……ま、俺なら出来るようになるけどな。

「お疲れ様で〜す。あれえ……雪原さんだ〜。太刀川さん、戦ってたんですか〜？」

「いやー出水と遊ぶの邪魔するのも悪いだろ。別に俺、あいつの友達でもないし」

「おやや……もしかて〜ですけどお」

「拗ねてません〜？」と言う国近にはと首を傾げる。拗ねる。拗ねる、とは？ いや別に、拗ねるような事なんてないぞ。

出水と色染しそうに戦ってるとは思うけど、別にあいつらが仲良くなった事はいい事だし、国近と烏丸もあいつを嫌ってるわけじゃなさげだから兄弟子としては安心してると………やっぱ拗ねるとこなんてねーよ。

そう訴えるも、国近はゲームを起動しつついつものように笑って………というかなんかニマニマ笑ってる。年上をからかうものじゃありません。

「そう言いますけど、なんかつまらなそうな顔してますよお。それに太刀川さん、色さんと戦うのも好きじゃないですか〜」

そりやまあ、そうだ。口だけはめちやくちや嫌がつてるけど、あいつなんだかんだ俺が満足いくまで割と付き合ってくれるしな。

「ハッ………もしかして色のやつ、俺が好きとか？」

「ええ〜………？ いやーそれはわかんないですけど、たぶん違うん

「じゃないですかね」

「……………そうか？」

そう言われたら言われたでちよつと傷つくな。いや本人に言われたわけじゃないし別にめちやくちや傷つくわけじゃないけどよ。

でも割と色と仲良くしてる国近が言うなら強ち間違いないやねえんだろーか……………いやいやいやでも嫌われてるわけじゃねーし。

「すみません、ちよつと遅れました」

「おー。まだ出水と色が戦ってるから問題ねーぞー」

「本当だ。声かけてきましようか」

まだ時間あるし、お前もちよつと遊んできていーぞ。そう京介に返して、ソファに寝転がる。

「やってるやってる」

出水と色の弾幕の間に入っていった京介に、画面の中で二人の手が完全に止まった。そうして何かを話した後、三人がそれぞれ距離をとってまた弾が飛び交い弧月が交わる。出水は楽しそうだし、京介もやる気のある顔してるし、色はいつもの噛みついていきそうな顔だ……………その表現やめろって言ってたっけそういや。

えーとあれだ。マジな顔ってやつ。いつもは不機嫌っぽく見える顔してるけど、あいつあれで真面目だから。マジになったらたいいあんな顔で淡々と切り返すんだよな。

あまりにマジすぎる顔をするから楽しくないのかと聞いた事があるが、強くなれると実感できるのはいいと微妙に外れた答えが返ってきた覚えがある。俺は戦うのが楽しいし、同じように強くなった実感があると嬉しいが、それと何が違うんだろうか。聞いても色はさあ？と首を傾げるばかりでよくわからない。

だけでもまあいつなりに楽しんでるのだけはわかるから、また……………前みたいにな、戦いてえなあ。

——でも今は、ダメだ。

いやまあ色々理由はあるけど、S級になって趣味の暗躍とかしてる迅とは全然戦えないし、ソロになってからというものの色のやつがなんかいろいろなやつと話したりなんかしてるし、戦ったとしても満足で

きるまで出来ない。だからそれは、ダメだ。俺的には。

俺は満足がいく戦いをしてえし、チーム戦だつて勝ち逃げされたまままだから、勝ちたい。……部隊のやつらは、そう考えてないだろうけどな。

これは密かな、俺の願望というものだ。

「はーやつぱ色さんと戦うの面白えつす」

「色ちゃん先輩、今度ランク戦してください」

「ん。出水の弾はいい練習になって助かるわ。烏丸は機会があつたらね」

出てきた三人の会話が聞こえてきたから起き上がり、頭を掻く。なんか考えすぎて頭いてえかも。

「センパイ?」

「どうかしたんすか、珍しく真面目な顔して」

「え? ほんとだ」

「太刀川さんもそんな顔するんだ〜」

失礼だなお前ら。俺の事を何だと思ってるんだか。そう文句を飛ばす。しかし聞き流されているようだ。この中で一番年上なの、俺なんだが。

「なら年上らしく防衛任務も頑張ってくださいね。あと勉強も」

「……そうだな!」

「うわ、信用できない返事。じゃ、そろそろ時間きそうだしあたしはこれだ」

あつさりとした挨拶を残していく色に「おー」と曖昧な言葉を返して部屋を出ていく背中を見送る。……もうちつと兄弟子に優しくしてくれてもいいと思うんだよなあ。たとえば俺ともつと戦いたい!とか。

いや、ないか。最初の頃は「先輩今暇つすか? 暇なら個人戦やりましょーよ」とか言ってたのにな。まあ迅とか嵐山とか風間さんとかも似たような感じで言われてたのは知ってるが。

「太刀川さん、そんなに色さんと戦いたいなら戦えばいいのに」

そうだな。でもま、いつかな。いつかその内、このむしゃくしゃし

た感情が落ち着いたら。

そうしたら俺だって、もつとちゃんと楽しめるようになるはずだ。だからそれまでは少し、長めの休憩ってやつだ。

とーぜん、戦うのをやめるわけじゃねえけどな！ やめるとかは考えられねーし！ そのいつかが来るまでに腕が落ちて負ける、なんてのはぜってえ嫌だ！

——よし、そう考えたら久々にガチでランク戦したくなってきたな。帰ってきたらソツコーでやるとするか！

意外と可愛いかもしれない

応援してる、と偶然警戒区域外に出た近界民^{ネイバー}を倒したわたしに声をかけてきたのは同級生の男子だった。同じクラスに所属しているから顔を見た覚えはあるが、名前までは正直覚えていない。大人しいタイプだからあまり関わりがないからというのものもある。

あたしはこの通りのやつだから、そういうタイプのやつには話しかけられる事がないからね。気にしたことはないけど。

とりあえず軽く礼を言いつつ後処理の許可を取るために本部に通信し、直接戦闘を見てしまった彼の記憶処理の前に軽く雑談を試みる事にした。

「その、ホラ、ボーダーの公式ホームページに名前が載ってるんだ！

だからその、同級生だし、俺、応援してて」

「ふーん。……ああホントだ」

見せられた画面を見て呟く。広報系の話はあまり聞いていないけど、こういう形でも正隊員の情報公開してるんだ。まあ人も増えたしね。

でもあたしとしては嵐山と柿崎がしたみたいな会見のお鉢が回ってこなくて良かったと心から思う。いやもしかしたらあたしを出すのは躊躇ってくれたからかもしれないけど。メディア対策関係のあの人、根付さん。

あの人とはそんなに話した事ないが、わたしだとウケが悪いと判断したのだろう。ボーダーに入った理由も届いてるだろうし。

「ゆ、雪原さん、ほんとに強いんだね！ あつという間に倒しちやっただから、その、ゲームみたいだったよ」

「別に。あたしよりも強い人はいるからそーでもないけど。ま、とりあえず応援はありがと」

しどろもどろに語る彼とその空気を観察しつつ、適当に相槌を打つ。近界民^{ネイバー}に襲われたからか、純粋に興奮しているのか、よく話す事が尽きないものだ。

まああたしから話す事もないし、いいんだけど。でもなんというか、ゲームにたとえられてしまうと困るな。わたしは国近に誘われるまでゲームとかほぼ触った事なかったし。……いやいいんだけどね、別に。

「お疲れ様です、雪原さん」

「ども。運びやすくバラしといたんで、後はお願いしまーす。……それじゃ、また明日学校でね」

「あ、う、うん！ ホントにありがとう、雪原さん」

やってきた回収担当の人に目配せして、任務の続きを続行する。後にはあの人たちがいいように処理するだろうから、特に心配もない。

複雑な気持ちにはなつたけど、それはそれとして。こうして感謝をされたのははじめてだから、それだけは少し覚えておこうと思う。自分がちやんと出来てる証になるのだから。記憶も形も残らないけどね。

「あ、雪原さんだ。お疲れ様です」

「チツ」

「ども！ お疲れ様つす」

「お疲れー北添、仁礼」

その後は特に何事もなく防衛任務も終わって、ボーダー本部に帰つたわたしはさくつと報告書を提出した。その帰り道というか食堂に向かう途中で影浦とその隊員二人と鉢合わせてしまった。

舌打ちする影浦はスルーして二人に答えると明らかにこのババアとも思つてそんな空気を感じたので鼻で笑つとく。……サイドエフェクトでお互いなんとなくは感情が読めなくもないからある意味以心伝心というかなんというか。

いや、以心伝心はキモいからやだな。えーと、そうそうこれもまた同族嫌悪つてやつ。ま、サイドエフェクトに関しては迅のやつの方もそーいうのに近いのはあるけど。

「防衛任務は終わったんですか」

「さつきね。あんたらも上がりなの？」

「そつすよー。明後日ウチのランク戦があるんで、作戦立ててたんす

わ

「へえ。影浦のカバーは大変だろうけど頑張んなよ、二人とも」

「……テメエは俺が暴れるしかしねえと思ってるのか」

ムスツとどこことなく拗ねに近い気がしないでもないわざとらしい怒ったような空気だ。コイツのそういうところは嫌いではない。やりやすいともいうか。

そう感じるのはたぶんわたしだけかもしれないけど、まあ口に出すと鳥肌ものなので適当に流しておく。

なんというか、たぶん最近戦ってないから、なんじゃないかと思わないでもない。太刀川センパイも似たような空気を出すことがあったから、本当になんとかなくそういうラベルを貼ってはいるけど……あながち間違いじゃなさそうだ。

「じゃあこれからカゲんとこ行くんすけど、どつすか？」

「んーまあ、特に予定はないからいいけど」

「ア？ テメエも来んのか……」

わたしがそう言うと、途端に嫌そうな空気ですい顔をした影浦が呻く。小南並に空気を隠せないやつだよ、影浦って。

だからって別に気にする事もないけど。

「あんたがイヤイヤって駄々こねるならやめてあげるけど」

「ハ……だーれがんな子供みてえな事言うかよ。チツ、おい、ゾエ！ おめーはそれ止めろー！」

生暖かい目、というのが相應しい空気をする北添とまたかーみみたいに笑う仁礼に苛立った様子でモサモサの黒髪が震える。相変わらず面白いくらい過剰に反応するやつだ。

そういうところが面白がられてとは思わないだろうか。いや、思ったところで直すのは難しいだろうけど。

「でもほんと、焼くのは上手いよね」

「喧嘩売ってるのか？」

「別に。喧嘩したいなら買うけど、怒られるのはあんただと思うわ」

「……………チツ」

以前もここ。影浦の家がやってるといってお好み焼き屋に来たことがある。その時も北添が言うから来たわけだけど、昔から手伝っていたのか影浦は手慣れた様子で生地をひっくり返していた。

じゅうつと小気味よく響く音と鼻に届く生地が焼けていく匂い。熱気をはらんで揺れる空気が、どんどんとお腹を空かせにかかってくる。

うーん、まあ今日はまだそこそこ食べられるお腹の調子な気がするし、頑張つて食べきろう。

「今度のランク戦、最初はどこと当たるの？」

「えー確か柿崎隊つすね〜」

「へえ。柿崎は割と手堅いし、いい相手になるんじゃない」

主に仁礼が話し、北添がそれを補足したり影浦が悪態づいたりしたりするのを聞きつつお好み焼きをつつく。遊ぶなど言われたが遊んでいるわけではない。ただお肉が上手く切れないだけだし。

時折戦い方についてとかの話が振られて答えたり、ちよつと向かないんじゃないかって言葉を返したりしながら思う。なんというか、懐かしい感じがするなど。

あたしが部隊でチームこうやって話をしてたのも、もう何ヶ月前の話だろ。解散してから割と何とも思ってたけど、なんだかんだこーいうのも嫌いじゃなかったんだなあ。迅のやつがもつたいぶつた切り出し方ばつかったのはウザかったけど。

でもやつぱ、年寄りくさいかもだけど。こんなやり取りも大事なのかもね。迅には絶対と言わないが。

「うわ、んだよその視線。ウゼエ」

「は？ 失礼な事言わない方がいいよ、影浦。あんたの親にボーダーでの事話してもいいんだからね」

「カゲの恥ずかしい話があるならアタシも知りたいっす！」
「アア?！」

驚きと慌てたものを混ぜた空気をするモサモサ頭に仁礼がニヤニヤと笑う。それと同じように笑ってやりながら一休み。そろそろお腹がいっぱいになってきた。

しかしあたしとは対象的に三人はよく食べて元気だ。育ち盛りは違うって事だろうか。いや別にあたしだって若いけどね？ 胃に關しては違うっていうかなんというか。

「はい。お勘定」

「……………」

「何その顔。あたしがお金を払う事になんか問題あるわけ？」

「別にねーけど」

ないならその空気やめてよね。無言でそう睨みつけるも、影浦はやや不満そうな顔だ。特にないなら何故そんな反応をされないといけないのやら。

言いたいことがあるみたいなのに、そんなに言いにくいのか。……まあなんでもいいけど。

「じゃあ帰るわ。二人共、気をつけて帰りなよ」

「あ、待つて待つて雪原さーん」

「？ なに、北添？」

流石に呼び止められるとは思ってなくて一瞬驚いてしまったが、気を取り直して首を傾げる。仁礼はちよいちよい話しかけられるから話すけど、北添とはあまり話したりはしない。だからというか、逆に内容というのは限られてはいる。北添の性格的にも影浦の事だろう。なんとというか、影浦も仁礼も少々癖がある分北添って癖が少ないし。……ないとは言わないけど。まあ、そういう事で。

「最近戦ってないから戦いたいわってカゲが！ だからよかったら今度戦ってあげてほしいんですよ」

「……………へえ。影浦、北添はそう言ってるけど？」

「別に思ってもねえし言ってもねえ！ ……ゾエ、いいて言っただろ！」

何やら北添を止めようとして失敗した影浦から焦りとか恥ずかしさっぽい空気を感じる。……まあ、意外と可愛い？ ところもあるものだ。いや図体とか態度とかはめちやくちやウザいから全然可愛くはないけど。

なんだかんだひとつ違いとはいえ一応年下なので、ここはそうだ

な。北添に免じて怒鳴ってるのは許してやろう。

「柿崎の隊に勝ったら戦ったげる。……ま、頑張んなよ」

「……………」

「楽しみだね、カゲ」

「しかたないやつだなあカゲは！　アタシもやってやるから安心しろよ！」

「…………チツ」

そういう地味に素直なところは割と嫌いじゃないなああたしも。不服そうにしながら否定しないんだから、素直じゃない？

本人に言ったら絶対ウザい空気をされるから言わないけどね。どうせ変に誤魔化そうとして結局クソババアとか言い出すのがオチだし。

「じゃーね。特に任務がのびなかったら観戦しに行くわ」

「ツス！　楽しみにしといてくださいー！」

「お疲れ様ですー」

「テメエなんか見に来なくていい。……ぜってーオレらが勝つ」

ぽそりと付け足す影浦にとりあえず肩を竦めておく。柿崎は普通に手堅い作戦を取るし、人数も一人多い分あっちの方が有利だ。楽勝で勝てる相手とは言えない。でもまあ、だからこそ……って言うのかな？　柿崎隊は堅実でいい隊だとわたしは思う。

ただまあB級も上位は今ヤバイ。だって菊地原を加えた風間先輩の隊の戦績がいいのだ。これはA級までくるんじゃないかなあって勢いがある。

……それはともかくとして、影浦がA級の実力があるかは、まああたしの判断するところでもない部分があるが。少なくとも柿崎のことはいい勝負にはなるだろう。一度くらいしか防衛任務で一緒になった事はないけど、あそこは隊員たちの連携が割と取れている。

影浦が一对一なら勝てそうだが、そこは転送場所次第だろう。運が悪ければ殺られるのが戦いつてもんだし。そこは北添の活躍にも期待かな。

とりあえず、あたしが面倒を見てたのに無様に負けたら指さして

笑ってやろう。よしそうしよう。そのために明後日は報告書も早く作らないとね。……ま、適当に頑張りますか。

これを師弟と呼ぶと拗ねられたとか嘘

さてどうしたものか。隣でワクワクしたように狙撃銃を両手にひとつずつ握りしめた佐鳥と、合図するように手を上げた時枝の顔を見つっこつそりとしたため息を吐き出す。

「ま、とりあえずは一回撃ってみて」

「了解っすー」

広報部隊にぴったりなキラキラとした笑顔を見せた佐鳥に、もう一度心の中で呟く。本当に、どうしたものだけか。

——こうして悩む事の始まりは、つい四日程前。久しぶりに嵐山とランク戦をしていた時だった。二ヶ月とかそれくらいぶりだ。

嵐山隊は広報活動がそれなりの頻度であるし、わたし自身も遠征に行ったりだとか防衛任務の緊急の穴埋めで出たりとかしててそこそこ暇があるようでない。だからブースで顔を合わせるタイミングとこののはあまりなかった。

一応顔を合わせない事はないけど、最近だと次の遠征についてああだこうだという話で忙しかったからなあ。あんまり話す時間はなかったのも確かである。

「雪原先輩、ちよつといいですか?」

そして偶然ブースに入るタイミングがかち合ったわたしと嵐山の戦いが終わった後、時枝から声をかけられた。その後ろには佐鳥もいたが、嵐山と話していたので最初は用事があるのは佐鳥で。なおかつあたしに対してだと思ってなかったのだ。

まあすぐに本題に切り出してくれたのだけだ。

「あたしに狙撃を教わりたい?」

いやでももしかしました何でそんな発想に至ったのだけか。

「このとーりー… お願いします!!」

深い角度で頭を下げた佐鳥に、視線が集まる空気を感じた。だからすぐに止めるように言って、嵐山に何か聞いているのかと視線を向けたがニコニコした笑顔で首を振るだけ。……聞いてはいないのだろう。

ただ自分の隊員が強くなりたいたいと思ってるのが嬉しいとか、あたしがこんなな困っているのが珍しいとかそういう感じに思ってるような空気だ。

「賢、雪原が困ってるしもうちょっと説明した方がいいと思うぞ。俺からも頼むから」

「……いや嵐山、あんたに頼まれても受けるかどうかはわかんないからね?」

「はは、そうだな。でも可愛い隊員が頼み込むために頭を下げるのなら、隊長である俺もそうするべきじゃないか?」

「えー……そういうもんかなあ」

爽やかに言い切られても困る。……嵐山のそういうところは正直よくわからない。隊長としては割と良いんじゃないかというのはいかるけど、その持論はあたしにはわからない系統のものだ。こうして話す分には何も思わないけどね。

ただ悪意も敵意もない嵐山や、それから時枝とかにはなんかわからないけどまあそういうもんか、と思ってしまう節は正直あつたりなかったり。

「んーまあいいけど。それで、佐鳥。あたしから教える事なんて東さんの半分とないと思うけど、何かしら理由があるんでしょ」

「へへ、ばれちやいます? ……実はその、雪原さんのサイドエフェクトの力を借りたくて」

「ふうん……?」

とりあえず場所を嵐山隊の作戦室に変えて話を聞くと。佐鳥は狙撃を二本の手それぞれで行えば戦力も二倍になるのではないかと考えたらしい。中々混沌としたB級上位に食らいつき続けるなら戦力増強を図るべきだ、と。

あたしが迅と組んでた頃もまあ激戦だったが、今の環境^{B級}よりずっと盤面は読みやすいものだった。けど今現在はトリガーの開発がより進んで幅広い戦略があり、求められる作戦も高度なものになっている。

近界民^{ネイバー}との戦いは今のところ人型と、というのはないようだから読

み合いという程のものではないからどうしても内向きで戦略を競い合う方向にしかならないと誰かが言っていたけど。……まあ、大変だなと思う。

あたしは部隊チームに入らずあちこちフラフラしてるようなものだから他人事になっちゃうけど。でもA級の部隊チーム同士で戦る時に混ぜてもらってる、というか引つ張り込まれるから体験はしてるから少しくらいは理解しているつもりだ。

こないだもセンパイにいいように撃つてくれとか言われて……いやこれは関係ない話だから置いとこ。

「ま、面白そうだしいいよ」

「マジですか!? やった!!」

それはそれとして、狙撃銃二丁持ちというのがどうなるのかは気になる。そんなの全然考えてなかったし、自分でやるかはわからないけどね。

佐鳥の大きな喜び様には思わず呆れてしまったが、そういう訳で現在に至る。ということだ。

あたしが悩んでいるのは自分でもした事の無いそれに、どうしたらいいように言えるのかという問題である。とりあえずやりながら考えよう。

「全然照準合ってない。今度は左を意識しすぎ」

『あはは、雪原先輩は相変わらず厳しいですね』

「時枝、茶化さない」

『いいじゃないですか少しは。おれだつてたまには雪原先輩に教わりたいのに』

「……あんたももう十分やっていけてるでしょーが」

「——よし！ こうつすか!?!」

そうして、何度か撃つ佐鳥の空気を読み取りつつ観察して指摘する。自分に向けられたものではないからちよつと読みづらいが、なんとか形になってきているはずだ。

撃たれる側の時枝は当たらない弾に茶々を入れてくるが、佐鳥よりもあたしの方に声をかけてくるのはなんだ。もう少し激励を送ると

かしないのか。しない？ あ、そう。

「うーん……思った以上に難しい……」

「そうみたいね。やる上で理想とかあんの？」

「一応は。雪原先輩みたいに空中で撃てるとカッコいいなって！ しかも両手で狙撃スナイプとか出来たらカッコいいと思いませんか?！」

「は？ ……あー、そうかも、ね？」

あたしがカッコいいかは知らないが、まあ目標があるなら少し考えてみるか。わたしが出来ない事を教えるのにも限度があるし、後で人の居ない時間に訓練室借りようかな。夜中は防衛任務に出入りして人たちが本部の誰かしらがいるくらいで訓練室までは誰も来ない。ボーダー隊員は学生が殆どだからね。

性格上極めるまでやる事が出来ない人間だという自覚はあるが、それはそれとして一応出来ない事はないくらいまではやるつもりだ。佐鳥の撃ち方を見ててこうやったらどうなるのか、くらいは思わない事もないし。うん。

「綾辻、後で佐鳥が空いてる日教えて。あたしの予定も連絡するから調整は任せる事になるけど」

『わかりました。それくらい幾らでも任せてください』

「悪いけどよろしく。佐鳥もそれでいい？」

「はい！」

ニコニコ笑顔でいい返事を返してくる佐鳥に頷いて、次は時枝だ。佐鳥の頼み事の後でいいから久しぶりに戦いたいとのことらしい。

もしかしたら嵐山より戦ってないような気がするし、まあなんだかんだ先輩、先輩といい方に慕われているからこちらは迷わず了承している。甘いって言われてもあんた程じゃないと思うよ、嵐山。

「いや、俺よりずっと甘いと思うけどなあ。そう思わないか、充」

「あはは、そうだと嬉しいですね。でもおれとしてはお二人に可愛がってもらえて幸せものですよ」

「とつきーのそういうところズルい！」

「ズルくないと思うけど」

いや別に可愛がってるつもりではないけどな……という言葉は飲

み込む。なんか言ったら言ったでからかわれそうな予感がする。たぶんきつと嵐山隊に、ではなく彼らの誰かから聞いた迅とかセンパイとかその辺に。

言うなというのは簡単だけど逆に言われるのがオチだと思ってるからあたしの判断は間違いないはずだ。サイドエフェクトの働いてない、経験的な予想だけどね。

「じゃあお疲れ様」

「はい！ あざっした！」

「ありがとうございます、雪原先輩。お疲れ様です」

「お疲れ。防衛任務、無理せずにな」

「お疲れ様でした、雪原さん。分かり次第ご連絡しますね！」

時枝と戦うのも終わり嵐山隊のそれぞれの声に手を振って返し、作戦室を後にする。

任務までの時間にまだ空きがある内に訓練室を使う申請をしておいたから、今日はちよつと早めに報告書とかも上げよう。うん。

「……ですから、やつぱり、その……雪原さんの思う通りにした方がいいかと……」

それから数日後。いい感じに教える、というのがこれほど難しいとは思わなくて同じ狙撃手スナイパーで誰かに教えている人物をあたっていているわけだが。

東さんの答えもそうだけど自分的にピンとくるものが無くて困る。だが、眼前で所在なさげに視線をそらした彼女の言葉が総合的な答えだろう。

「それもそーね。悪いね、時間とらせて。参考にするわ、鳩原」

「は、はい」

二宮隊の作戦室に居座ったわたしはそう言葉を返し、席を立つ。もういいのかと空気が向くが、まあ一応結論も出たし問題はない。と思う。

ここに居座った理由は簡単で、鳩原は最近絵馬とかいうちよつと生意気なのを弟子にしているからというものだ。狙撃手スナイパーになる多くのやつらは大体東さんに聞きに行ったりしているが、全員が全員そうじゃ

ない例だろう。居合わせたからアドバイスを受ける、というのはあだし自身も含めてあるあるだと思うけどね。

とはいえ最近も人も増えたし、今後は鳩原と絵馬みたいな狙撃手スナイパーの師弟も増えていくはずだ。東さん一人の負担が高いし、いい傾向なんじゃないの。知らないけど。

「もう帰るんですか？　せつかくならゆっくりしていけばいいのに。ねえ辻ちゃん？」

「えっ。い、う、いや、その……………」

「そーいうウザい絡みは止めてくれる？　犬飼。ウザい。辻もコイツのこういう軽口に真面目に返すの疲れるでしょ」

「あ、え、い……………いえ……………」

にんまり目を細める犬飼とめんどくさいとため息を吐くあたしの言葉に挟まれて、ただでさえスーツで全身黒いつていうのに黒い体がさらに縮こまった塊になる。かわいそうな辻だわ、ホント。

二宮さんもコイツの手綱をもうちよつと締めてくれていいと思うけど。ま、それは望みが薄い話か。

「はい。氷見、鳩原。改めて、これはお礼ね。二人で食べといて」

「あ、はい」

「ありがとうございます、雪原さん」

「礼はいらないって。……………それじゃあこれで」

まず一番の目的だったのは話を聞く事じゃなかったから聞けたついでに鳩原にもお菓子を渡して部屋を出る。つまんないなって空気を感じはしたが、無視だ。

あたしはただ、ここ一ヶ月氷見によくオペを引き受けてもらったからお礼をする名目できたんだし。犬飼に構ってやる理由はない。二宮さんはシミュレーションでもしていかないのかと思つてそんな空気であつたけどまあ言ってくれたら一回くらいは付き合うけど。言われなければならノーカンってもんでしょ。

「やっつこ」

とはいえこの後は任務もないし、訓練室で今日も元気に訓練しますかー。それで佐鳥が合流するまでにもうちよつとマシに教えられる

よう考えよう。

遠征後の軽口

久しぶりに帰ってきた気がするな。遠征から戻って部屋に帰ったわたしは疲れたと大の字になって寝転がった。口頭による報告は終わったし、後はわたし自身の報告書を出すだけ、だけど。

……今日のところはゆっくり休もう。忍田さんにも休みが終わってからでいいって言われたし。そんな事を考える間にも眠気がぐわつとやってきて――。

なんと丸つと一日近く眠りこけていたらしい。

「ああ……？」

久しぶりにサイドエフェクト関連以外でこんなに寝たかもしれいな。画面に表示された日にちを眺めてぼんやりしていると、また何か眠気が……。

どちらにせよ夜だし、もうちよつと……寝よう。ご飯は……まあトリオン体に換装してしまえば栄養的な問題は解決する、し……。

そうしてウトウトしていたら、次に目覚めた時さらに半日近く経っていたようだ。時刻は午前十時。活動を開始するにはやや遅い時間である。まあ学校も任務も休みなので問題ないけど。

「ふあ……おふろ……」

ぼんやりと軽くストレッチからはじめないとかなーとか、ご飯はめんどくさいから食堂に行くかーとか考えながらシャワーを浴びて、ポイポイツと洗濯機に服を放り投げてスイッチをオン。

洗濯機が回っている間にお湯を沸かして置いていたコーンスープの粉に注ぎ、くるくるとスプーンでかき混ぜてすする。熱い。

さて、この後はとりあえず、どうしよ。訓練室の使用申請しないと……あーその前にちゃんとしたご飯食べた方がいいかな。

「おはよ、色」

「……………最悪」

化粧だけは念の為して、けどひどい顔してるだろうしトリオン体に換装したあたしの前に立ちはだかったのは迅悠一だった。しかも部

屋の前の通路で。

コイツ、サイドエフェクト使って待ち伏せしてたわけ？ 暇人か。それか嫌がらせか。

でもとりあえず元々低かったテンションが更に下がるわ。迅の相手ってこう、寝起きのテンションでしたくないんだよね。めんどくさいし。

「そんな顔するなよ、傷つくだろ〜」

「あつそ。んな事言われても元々こんな顔だし。……はあ。で？ 何か用？ これからご飯なんだけど」

「おれもご飯まだだし、久しぶりに一緒に食べない？」

「……もう勝手にすれば」

ほら、こうやって用件はぐらかしてさあ。そーいうの、めんどくさいんだよね。どうせ迅の用事なんて、たいしたものじゃないし。

「ひどいなあ。もしかしたら大事な用かもしれないだろ」

「それならもつとそれっぽい顔してから出直すことね」

少なくともそんなニヤついた顔してるくらいだし、大した話じゃないとあたしは思うけど。そう続けて、ひつついてこようとするのを腕で押し返しつつ食堂に向かう。

時間的に食堂の人影は少ない。それに落ち着きを覚えるのは一重に疲労が抜けきらない今の状態で、大勢の人が居る空気トクにいたくないからである。

トリオン体である事を考慮していつもは頼まない定食とサラダ(大)を注文する。迅はランチを受け取った後にお茶を淹れて、おぼんに乗せたふたつの内のひとつをわたしの前に置いた。……食後でいかと思ってたけど、まあ一応お礼は言っておく。

「遠征はどうだった？」

「ぼちぼち」

「へー。皆と協力は出来たのか？ 何かあったんじゃないかとそりやもう心配で心配で」

「うっげ、そういうのいいから」

わざとらしく泣くような仕草をするのをジトリと睨みつける。あ

んたはあたしの何になったつもりなんだか。

ぼやきながら、話題は自然と遠征での事になっていった。迅の昔話を、というか今のボーダーになる前の話をチラツと聞いていたから、その差異があるかとか近界の空気の違いつかを中心に。後は遠征面子についての話くらい。まああたし以外とも話を聞いて知ってるだろうけどね。

仲良くやれたようで良かったなとか笑う迅の脛を蹴りつつ、こちらも変わったことがあったのかと聞いておく。大して興味があるわけではないが、一応知っていて損はないだろう。面倒な事に関わりたくないし。

でも影浦のやつがまた喧嘩買ってたとかくらいしかないらしい。それならまあいつも通りだろう。

「ところで、どうせこの後訓練するんだろ？ おれもいいかな」

「あちこちでコソコソしてるあんたにしては珍しい事言うのね。なに、誰かに負けでもしたわけ？ そんな面白い事は教えなさいよ」

「いや〜？ 色の唯一の相棒として、遠征でどれだけ強くなったか確認したいだけで他意はないって！」

「……………あつそ」

嫌味も流され、挙げ句にはまた自称相棒を引っさげてくる迅には呆れしかない。百歩譲って元相棒くらいまでは認めてあげないこともないようなあるような、だけど。

今現在のあたしらの関係ってただの同僚じゃん？ 別に確認の必要なくない？ そういうところウザいんだけど。

「冷たいなあ。なんで色はそうおれにだけ冷たいんだ？ 流石のおれでも悲しい」

「はいはい。別にアンタにだけ特別冷たく当たってるつもりはないけど」

「……………それもそうだな。なら安心だ」

どこがだよ。いやしかし、迅と戦うのなら玉狛に行くか。あつちの方が人が少ないから気楽だ。変な観衆が付くのもセンパイに乱入されるのもゴメンである。

未来が視えてたのかにんまり笑われるのがムカつくけど、たまには顔出さないと陽太郎がまた拗ねるから行くだけだ。だからその顔止めてくれる？　しまいには殴るからね、マジで。

「はは、悪い悪い」

「どーせ悪いとか思っていないくせに」

そんなことないと首を振るが、信じられるか。空気が言ってるからこっちには伝わってる。だからこのあと、絶対ボコる。少なくとも引き分け近くまでは持つていこう。

固く心に誓ったあたしだが、まあそう簡単にはいかないのが迅悠一という相手だ。ムカつくことに、勝率は三。引き分けは一である。つまり六の割合で負け。これがムカつかないわけがない。

「精度上がってるなあ。今のは当たったかと思ったよ」

「避けといてよく言うわ腹立つ」

苛立ち混じりにスコープピオンを弾いて、後ろ手に弾を生成する。そのまま撃ち込んで、避けられている空気を感じながら下から感じる違和感に膝を曲げる。同時に迫り上がる盾を足場に飛び……上がるの不味いが、これは仕方ない。どうにか最小限のダメージに留める。

足についた傷から漏れるトリオンを気にせずもう一度弾を作ってあいてる空気トコに撃ち込み、片腕を犠牲にして迅の片足を落とす。だが、今回はここまでいって負けだ。もう少し身体を縮こませていたらもう一、二回くらい鎬を削ることもできただろうか。

「特攻しすぎもよくないぞ？」

「一対一サシなんだから一でしよ別に。というかあの体勢から出てくるスコープピオン、マジでムカつくわ」

「いやいやそれ言ったらあの偏差撃ち、結構焦ったよ」

「あつそ。じゃあさつきと次、いくわよ」

あたしの言葉にやれやれだと大げさに肩をすくめて見せる迅だが、その空気はやる気に満ちている。ほんと、こいつもセンパイに劣らず変なやつだ。なんとなく久しぶりにそう思う。

けどそんな考えなんてすぐ切り落として、わたしは。いや、二人して日が暮れるまでずっと対戦に没頭するのであった。なんだかんだ

久しぶりに戦ったからかお互いに本気になってしまっていたらしい。それを止めたのは小南がご飯だと言いなながら乱入してきたからだ。ズルいと拗ねる小南を何故かわたしが宥めたが、迅の空気にムカついたので睨みつけておく。あんた少しくらいフオローしなさいよね。

「お前らホント、仲がいいな〜」

「は？ よくないすけど」

「でしよ〜」

林藤さんの言葉も心外だ。迅と仲がいいと言われるのはなんかちよつと嫌なわたしの気持ちもわかってほしい。だってこいつセンパイ程とは言わないけどデリカシーってもんが足りないし、なにかと引っ付いてきて鬱陶しいし、その癖あつちの方が勝率高いからムカつくのだ。

ニヤニヤする迅の頭にチョップを見舞いながら、これみよがしにため息を吐き出す。この顔。この顔がめちゃくちゃムカつくのを誰かにわかってほしいものである。

「色、今日はこつち泊まる？」

「ええ……いや、まあ明日は報告書を上げるだけだから構わないけど」

「ホント？ やった！ じゃあさ、アタシとも軽く戦ろ〜！」

「オツケー。迅とばつかで飽きてたところでさあ」

「あーんひどい！ あんなにいっぱいおれを煽ったのは色なのに、おれとはお遊びだったなんて！」

「きつつしよいこと言わないでくれる?! 鳥肌立ったんだけど！」

小南見てよこれヤバくない？」

「アハハハ！ ホントだ〜」

やいのやいのと食器を片付けながら騒ぐわたしたちに、林藤さんは背後で大笑いした。陽太郎がとりはだつてヤバいのか？ と不思議そうにしているが、マジでヤバいんだつて。見てみ、と腕を差し出しておく。

久しぶりにめちゃくちゃ引いたわ、これ。あれかな。普段の任務とか遠征で会わない期間がけっこう長かったからコイツの軽口に耐性なくなつたのかもしれないと思いましたまる。

水と油とガス抜き

ガンと睨みつけてくるような空気に、イライラとした気持ちを抑えきれない。うっとうしいし、めんどくさいし、ムカつく。

そういう視線が向けられることはたびたびあるけど、慣れていくわけではないのだ。だって自分でどーもできないものだし、うざいし。

毎日毎回向けられるわけではないが、この空気は正直嫌いだ。大半がめんどくさいことにしかならないのだから。それも飲み込んだ上で諦めてこっちもガンつけてもいいんだけど、この視線の元たちに絡むのはかなりだるい。

「おい、雪原ア」

「……………なんか用？ あたし、あんたと話すことなんてないんだけど」

しかしどうもタイミングが悪い。いつもなら避けて通るのに、今日に限ってこいつと食堂で鉢合わせになるなんて。まったくもって最悪な気分だ。

食べ終わった手前後ろに戻ることもできないし、ここは睨みつけるより他にできることはない。

「ちよつと面貸せ」

「は？ 嫌に決まってるじゃん」

ジロリと互いに睨み合い、眉間にシワを寄せる。どうせこの間の防衛任務のことで文句を言われるのだろうという当たりはついていて。

「本部長に呼ばれてるつってもか」

「……………それ先に言えつての」

しかし予想とは違う言葉にはついつい毒づいてしまうというものだ。忍田さんの呼び出しはそこまで珍しくはないが、頼む相手は今度からこいつだけは外すようお願いしよう。

「なんだと？ 喧嘩売ってるのかてめエ」

「あんたの方が先に喧嘩売ってきてるじゃん、弓場」

ほら、これよこれ。わたしの言葉に噛みつくように唸られるんだか

ら堪ったもんじゃない。こいつのこういうところ嫌なんだよね。迅はからかってくるからめんどくさいけど、弓場はつかかってくるからほんとダルい。

こんなにあたしのこと嫌いなら必要最低限の接触にしてほしいわマジで。ガチで嫌いというか気に入らないという空気の方が近いとはいえ、空気読んでる側的には気持ちいいものではないからね。

「また喧嘩してるのか、二人共」

「ああ？ 邪魔すんじゃないやねエ、嵐山」

「はあ？ こっちはめんどいだけだし、したくてしてないんだけど」

通りがかったのか、弓場の後ろからひよっこり現れた嵐山について嫌な顔でため息を吐き出す。嵐山のことだから喧嘩する程度には仲が良いと思ってるかもしれないけど、全然まったくその事実はない。つかかかってこられてめんどいからあたしが折れてるだけだ。

まあム力つくから迅相手並に雑な対応してる自覚はあるし、それがまた生真面目な弓場には気に食わないでしょうけど。

「チツ……まあいい。本部長をあんま待たせないためにさっさと行くぞ、雪原ア」

「は？ なんであんたと行かなきゃいけないわけ？」 「俺もてめえと行動したいわけじゃねえ。用事があるだけだ文句あんのかコラア」

ジロリ。互いに嵐山に視線を向けたけどまた睨み合って、小さく舌打ちする。文句しかないってーの。

「まあまあ。仲が良いのはいいが、出入口で言い争うのはやめた方がいいぞ二人共。あ、でも俺も本部長に提出する報告書があるから一緒に行こう」

「いや仲良くなんてないが」

「仲良しとか気持ち悪っ」

「ああ？」

「はあ？」

嵐山の言葉に低い声が出てしまった。その上弓場と被るとか最悪。ただでさえ下がったテンションが更に落ちただけけど？

……………いや、まあいいや。忍田さんと話せるってことだけ考え

よ。もう弓場なんて無視だ無視。

「はは、ほんと仲が良いなあ」

だからそれは無いって言おうと思ったけど、止めておく。どうせこのニコニコとした嵐山の勘違いが直るわけない。こいつ、妙などこ固いから。

ただ返事代わりの沈黙さえ弓場と被ったのは偶然なんだけど、なんかもうダルい通り越して疲れるわ。

「はあ……」

「はあ……」

前言撤回。ここまで被るとムカつく。

だがまあ——実際問題。ボーダー内でわたしは浮いてる方だから、そうした衝突。あるいは空気は珍しいわけではないのだが。

「イライラしてるからうちに来ないでよ。迷惑な人だなあ」

忍田さんとの話も終わり、弓場と目も合わせず部屋を出たわたしは風間先輩の隊の作戦室にやってきていた。そして風間先輩に愚痴つてたわけである。先輩なら割と聞き流してくれるし。

加古のところにしようかなとも思ったけど、今日は生憎と休みだった上、この後のことも考えて風間先輩のところにきたわけ。愚痴という点だけなら諏訪サンもある程度聞いてくれるけど、解決案を求めてないからナシだ。

「まあまあ、きくつちー。今夜は雪原さんと防衛任務だしいいじゃんいいじゃん」

「知ってるけど、ここは風間隊の作戦室であって相談所でもなんでもないし」

不貞腐れたように唇をひん曲げた菊地原だが、もう何度かそのやり取りも交わしているため諦めも早い。そもそもあたしと風間先輩の付き合いの方が菊地原よりも長いから、というのもあるかもしれないが。一番の理由は先輩が受け入れているからだと思う。いわゆる慣れ。

わたしからした菊地原は、小憎たらしいやつではある。だが弓場とかみたいに明確な張り詰めた空気を向けてこないから断然マシだ。

あと、そう。正直なやつでもあるから、程よくムカつくだけで済むのがいい。多少の苛立ちくらいはどうでもいい分類感情だからすぐ脳内で捨てちゃうからね。その点でいえば影浦と同じ扱い、というのを本人に知られたらげんなりするだろうな。

「雪原さん、この間買った煎餅食べますか？」

「ありがと歌川。でも……」

「いや。気にせずお前も食べたらいいい」

「あ、あざます。先輩もそう言うのなら、おひとつもらいまあす」

小分けされてビニールに包まれた煎餅を開けて、バリツと咀嚼する。うま。これどこのだろ？ 今度自分でも買おっかな。

「それで？ 忍田本部長に何を言われたんだ」

「んーなんていうか、今度来るスカウト組に一通り戦いを見せろって話みたいで」

「なるほど。確かに、オールラウンダー万能手である雪原さんなら一度にレクチャーできますしね」

「大変そうですね。でも雪原さんなら何事もなく出来ますよ！」

そうだといいいけど、と歌川と宇佐見の言葉に肩を竦めつつどうしたもんだらうと悩まずにはいられなかった。影浦とかの面倒を見てるのもあって、正直教えるという行為自体に慣れはある。はずだ。

だけどスカウトされてきた新しい隊員と、B級になつて暫くしたやつとの差はかなり激しい。殆どゼロから教える、というのはね……荷が重いというかなんというか。でもさつきも忍田さんに期待の眼で見つめられたから請け負ってしまったというかなんというか。

あたしつてやつは、忍田さんのご命令には特に素直に領いてしまうから仕方ない。いや城戸さんに命令されてもちゃんと領くけどね？

それはそれとして、こーいう頼まれごとはねー。性に合わないっていうか、気疲れしちゃうから嫌だつていうか。

一般社会に出てしまえばこれがふつーかもしれないけど。まだ一介の学生であるあたしには、より良い選択なんてもんできないし。ていうかどーせ嫌われるのがオチというか？ いや、嫌われるの自体は平気だし、初見の人間に好かれたいとも思つてないんだけど。

まあ互いに嫌ってるのを嵐山みたいに喧嘩するほど仲が良いみたいにとられるのはマジで勘弁してほしいが。それはそれ。

「……忍田さんに頼られて嬉しいのはわかるが、あまり無理はするなよ。お前は溜め込みやすいからな」

「はあい。先輩のおおせのままにい」

ううん経験からのマジの心配は流石にいい子に返事せざるを得ないな。センパイほどとは言わないまでも、迷惑をかけてる自覚は多分にある。

とはいえ。

「風間さんにこんなに褒められといてボイコットとかしたら許さないから」

「んなのしないっての。あんた、あたしを何だと思ってるわけ？」

菊地原の生意気な発言にはついつい睨み返してしまいうけど。そもそもそんなの言われなくてもわかってるし！

「めんどくさい人」

「……別に答えるとは言っていないけど」

「そういうところめんどくさい人だなあ」

「あんたも十分めんどくさいわ……」

「あーやだやだ」とこれみよがしに肩を竦め、苦笑しながらお茶を淹れてくれた歌川に礼を言う。風間先輩の隊は、こういうところで釣り合いをとっているから居心地が悪くない。宇佐見のオペは的確だし、いいやつだしね。

「それで、受験勉強は捗っているのか？」

「やあ、ボチボチすすね。ボーダーの推薦もあるし、センパイが入れてあたしが入れないこともないだろうし」

先輩ってばひどい、現実を思い出させるなんて！ まあたぶん大丈夫、だとは思うんだけど。今言ったようにあのセンパイが入れたんだし。

……ま、忍田さんや先輩や東さんたちというたくさんの人に教わってるのは知ってるんだけどね。センパイ、勉学に関してはヤバすぎるから……。

「そうか。だが備えあれば憂いなしだからな。必要ならまた声をかけろ」

でも風間先輩がそう言ってくれるのなら……！

「え、いいんすか？ なら先輩が空いてるときにまた勉強教えてくださーい。先輩の教えなしじゃ赤点の危機なんで！」

「図々しいなあ。風間隊ウツチに迷惑かけないでよ」

「じゃあここで勉強会しません？ たまにはアタシも混ぜりたい！」

「ならオレがお茶請け用意します」

「いや、前回は歌川だったろう。俺が選んでくる。菊地原、何が食べた
い」

「……たい焼きが」

「こないだあたしが買ってあげたやつ？ あれ美味しい食べたくなるのはわかる。先輩、住所わかります？」

「いや、教えてくれ」

「了解つす。あ、でもあたしの受験勉強に合わせてもらおうわけだし、一緒にいきますよ」

中間だとか期末テストのたびに起こる光景にそれぞれの表情で、空気で軽く応じる。もう何度目かになるから、文句をいいつつも菊地原も満更ではないのはわかりきったことだ。

だから今日起きた弓場とのことなんてぐしやぐしやにして丸めてポイツである。忍田さんから受けた仕事はもうメモしてあるから大丈夫だし。

……ま、頑張つてこ。

適當の重要性

雪原色ってやつはムカつくやつだ。似たようなサイドエフェクトがあるだか知らねーけど、俺の事わかってるみたいな顔して。そのくせ向けてくる感情はそこら辺のガキでも眺めるようなものだから、その刺さり方が逆にウゼエ。

それがあんまり痛くないのも、あの脳筋ババアがムカつく原因のひとつだ。脳筋ってつけるためちやくちやイテエ殺意が刺さるからめんどくさくてもう言わねえけど。ケツ。

それでもA級ソロだかなんだか知らねえが、あんなのクソババアでじゅーぶんだろ。他のやつらがコソコソ陰口叩くほど大した女じゃない。

「また言ってる。……そんなに気になるなら雪原さんと戦えばいいじゃん」

「つせえ、別にクソババアと戦いたいとか思ってるねーし」

ゾエの言葉に頬杖をついたまま返し、シャーペンを転がす。わかんねえし、もう良くねえか？

「駄目だって、カゲ。赤点取ると補習があるんだし、そうなると防衛任務が大変になるからさあ」

「……わかってるって。あのクソババアに馬鹿にされるのももうゴメンだし、太刀川隊の隊長と同じとか言われるのも嫌だからな」

太刀川慶はクソババアづてに聞いた話ではかなりヤバいらしい。それとタメを張るレベルの成績をとってみろ。脳筋ババアにさえ馬鹿って言われる未来が待ってたんだから、そりゃ赤点は取らない方がいいに決まってる。

あの強さは正直スゲエと思わないでもないが、本部長に正座させられてる写真を見せられた事のある人間としてはまあな。一緒にされて嬉しいとはいまいち思えねえ。

「あー太刀川さん、雪原さんからもヤバいって聞いてるしね……その点うちの頼れるオペレーターの方も心配といえば心配だけどねえ」

「アイツはアイツと同じ学校のやつらに任せとけばいいんだよ」

鼻を鳴らして、渡されるがままシャーペンを握る。あー答え見て書いていいか？ このままやってるとぜってえ任務に間に合わねえし。

……わーってるよ、やるって。やるからその視線は止めるよゾエ！
「うんうん、頑張ってるカゲのために次に雪原さんに会ったらゾエさん、ひと肌脱いであげようかなあ」

「脱がんでいいー！」

「雪原さん真面目に頼んだらたぶんオツケーはくれるだろうし」

そうかもしれない。だけど、だから嫌なんだ。あのババアに頼むとか。……というかそもそも頼む事なんてねーけど。

「はいはい。ゾエさんに任せてよ」

おい、聞いてんのかよ。ぜってえ俺の話聞いてねえだろ！ いいつて言ってるんだろ！

しかしその言葉も虚しく、ゾエのやつはクソババアに俺が戦いたかって直球にいいやがった。くそつ、面白がってる視線が腹立つ！

「良かったねえカゲ」

「……うっせバーカ」

「あはは、素直じゃねーなカゲはー！」

「イテエ！ 叩くなー！」

お前ら、面白がってるんじゃないよー！ くそ、こーなったらむしろくしゃするのは全部ランク戦にぶつけてやるよ……！

別にあのクソババアに戦えるからとかじゃなくて、勝ちたいから勝ちにいくんだからそここのところは間違えるなよ!?

「………呆れた暴れ具合だわ。柿崎も災難だったね」

「いや。俺の判断が遅れたから負けただけで災難って事はないさ。――と、影浦。お疲れ」

「………ドーマ」

そうしてまあ、ランク戦が終わったわけだが。刺さってくる感情の反応に困って視線をそらして頷く。クソババアが呆れた視線とため息を吐くが、いつもどおり感情の刺さり方は肌を撫でるだけ。

どうせまあいいけどか思ってるんだろう。このババアのそーい

う感情は最初からそんなもんだ。ウザいとかめんどくさいとかは思っているけど、悪意がない感じの感情。

それが正直楽な分類なのは、絶対に誰にも言うつもりはない。面白がられるのも、からかわれるのもウゼエし。

「それじゃ、また今度個人戦しようぜ、雪原」

「オツケー。照屋たちが良ければあんたの隊の作戦室でもいいよ。根こそぎポイント奪っちゃわれないようにさ」

「はは、流石にそれは勘弁して欲しいし、聞いておくよ。じゃあな」

楽しげに手を振ったクソババアはすぐにその顔を消して、こつちを見た。それからすいと視線をそらし歩いていく。ま、ついてこいつてアピールだろう。このクソババアだいたいいつもそうだしよ。

んで遅かったらクソうぜえ感情刺してくるのも知ってるし、めんどくせーからさっさとついていく。周りの視線がうぜえのもいつものことだ。すげームカつくが、いちいち噛みつくモンでもねえ。

「あんたも多少なり落ち着いたんだ、意外」

「あ？ 気色わりいこと言うな」

「別に褒めてるわけじゃないわよ」

「そーかよ」

プスリ、と一瞬突き刺さった棘は、しかしすぐに消えていく。クソババアと付けてたらもつと長かっただろうが、まあ別に、そんなんしてもめんどくせえだけだ。だから適当に言っつて、ババアと同じく口をつぐむ。

とりあえずついてるが、このまま行くと訓練室になるか。ま、今はランク戦の期間だから人もすくねえし、俺は戦えればそれでいいが人目がすくねえ方が気楽だし、文句はない。

「で？」

「あ？」

訓練室に入る直前にいきなりガンつけられて、思わず睨み返す。んだよ、こつちはやる気出てるっつーのに。

「……あたしの武器に希望はあんの？ 一応孤月とスコープオン、どつちでもいけるけど。あ、言っつくとくけど北添が出来たら頼むつて言

うから用意しただけだから、そこは勘違いしないでよ」

「アア？ ゾエのやつ、ほんつとにいらねえ世話ばつかしやがって！

……あー……クソツ、別に嬉しくもなんともねーよバーカ！

「……………フンツ、準備がいいよーで何よりだよクソババア！ ……最初は孤月でやれよ。アンタお得意のエモノだろーが」

「あつそ。ま、いいけど」

ふんと鼻を鳴らしたクソババアは、しかしクソババア呼びにムカつきを向けてくるわけでもなくトリオン体に換装する。

何だ？ 何でいつもみてーに怒らねえんだよ気色わりいな。

「……………んだよ」

「いや？ ただあんたは相変わらず素直じゃないと思ってるね」

「は？ ああああ??」

「あたしと戦うの久しぶりすぎて空気を装うのも忘れた？ カワイイところあるわね、影浦」

「!? ツぶ、ぶつ殺すぞクソババア!!? ああああクソツ!!! クソうぜえええ!!!」

珍しく思いつき刺さってきた感情があまりにも、クソが!! トリオン体なのに頭掻きむしりたくなるくらい痒いじゃねえか!! クソツ!

とつとと訓練室入りやがれ!! 首取ってやるぞコラア!!

「ハッ、できないことキャンキャン吠えてカワイイじゃん?」

「舐めやがって、クソババア! 後悔させてやるよバーカ!! 脳筋ババア!!」

「うん。ははは……つば殺す」

先に入った俺を追いかけるように、ババアが楽しげな感情を消して加速する。これ、これが落ち着く。

さつきみてーなのは気味が悪くて仕方ねえ。ギンツと弾いた感触と刺さってくる敵意に安心しながらスコープオンを伸ばす。弾かれでも、まあいい。どーせただの訓練、だからな!

「ハ、——!」

そうして何回、やりあってんだ? 小一時間くらいか? 最初は単

純な切り合いをしていたのが、今は少し違っていた。

「考え事なんていい度胸してんじやん」

「うっせえ、なッ！」

左手のトリオン漏出なんて気にせず、放たれた通常弾をスコープピオンで爆破させる。前にコイツがやったのを見たが、難易度たけえなクソが。孤月の方が強度あるからできんのか？

「迷ってるって簡単に殺られるわよ」

「……フン！ 次は引つかからねえ」

弾幕の処理に気を取られて腰に一閃を受ける。すぐ戻るし気にならないが、それでも腹が立つのは腹が立つ。俺だつて負けっぱなしではないが、それでも勝率はこっちのが低いから腹立つのも当前だろ。

不貞腐れてたらうぜえからぜつてーもうしねえけど。

「だから言ってるでしょ、あんたはサイドエフェクトに頼りすぎつて」
「わかってんだよんなのは」

「……そ。まあいいわ。そろそろこっちもスコープピオンのトリガーに切り替えるわ」

呆れたような感情に、クソがともう一度吐き出す。聞こえてるだろうが、気にすることもない。どうせ俺の空気でわかるこつたしよ。

だけどなんか、久しぶりだからか、変な感じがすんな。いや戦うの自体はまあ、楽しいんだが。あのクソババアの言葉がやけに耳に残る。

………いや。とりあえず考えんのは後回しだ。考えんのは。

「……ためしてみつか」

元々ごちやごちや考えんのは好きじゃねえ。だから今度は、狙おうとか考えず適当にやってみるか。

どうせ俺もババアもサイドエフェクトありきの戦いをしてんだ。攻撃しようつて感情を感じ取る俺と、狙いをつけた空気を感じ取るクソババア。……確かにこう並べると似てるようで似てねえな。

前から聞いていたことが突然パツと理解できて、なるほどなど納得する。どーりで中々勝てねえワケだ。

「あんたがニヤけんのは珍しい。なに、そんなにあたしのことが好き

なの？ うわ、自分で言って寒気がする」

「はア？ バカじゃねーのか。誰が teme なんかに好きになるかよ」

「あつそ。そうよね、よかった」

「とはいえ嫌いだ、と言おうかとも思ったがそこは止めておく。別にこのクソババアが傷つくとかなんとか考えてるわけじゃねエ。

ただ、なんだ。こいつと戦うのは嫌いじゃねえから、迷っただけだ。

「んで？ なんかに思いついたわけ？」

「……誰が teme に教えるかよ」

「ハ、あんたたってほんと生意気。まあいいわ。戦えばわかることだし、ねー」

「つとー！ 相変わらず teme は卑怯だなこのクソババアー！」

「油断してるあんたが悪いのよ」

わざとらしく敵意出してきたのはそっちだろーがクソババア。そんなことを考えつつ、しなるスコーピオンを躲し、こっちも伸ばす。

——ただし、ババアの横を狙って。そんでそこからはまあてきとー、に！

「つ……!？」

「油断してんのは teme のほうじゃねーか？」

「……………生意気」

適当にスコーピオンを伸縮させたら、ババアの首を一閃できた。今まで首は取れなかったが、これでやつと。やつと雪原色ってやつを見返してやったようなモンだ。

ニヤリ。自然と溢れた笑みには、どんな感情が乗ってるのか。自身にサイドエフェクトは働かないからわかんねえが、ぜってーコイツに聞いたりなんてのはしねえ。からかわれるのがオチだしな。

てーかそれより戦う方が何倍も重要だ。俺の空気も、クソババアの感情よりもずつとな。でも後で、ゾエには一応礼を言っとくか。

ついにクソババアの首を落とせたつてよ。